
新生夢世界の集い

たけにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新生夢世界の集い

【Nコード】

N9772I

【作者名】

たけにゃん

【あらすじ】

とある世界に存在するメルト王国。

そして、その国を治める王子・マルク。

この国を中心に、マルク達の異世界への旅が始まる

はじめに

毎度私の小説を読んでいただき、本当にありがとうございます

まずはじめにこの小説は以前書いておりました【夢世界の集い】の別バージョンの小説です

前作の夢世界は元々数年前から書き続けていた話をこの小説家になろうに載せるために編集して出したものです（誰に見せるわけでもなく趣味で書いていたので編集しないといけませんでした）

しかし、九月下旬にそれを書き溜めていたノートPCが壊れてしまい続きの執筆が出来なくなりました

よってこの【新生夢世界の集い】を一から別ストーリーで書くこととなりました

よろしければ他の私の小説同様に読んでいただければ幸いです

更新は遅めですが、頑張っていきますのでよろしく願います

* キャラ紹介 *

マルク・バンガード

この物語の主人公で、13歳。

少々わがままな性格。

ある理由から様々な異世界へ飛び、仲間を集めていくこととなる。

クリス・バンガード

マルクの双子の妹で13歳。

幼い頃は二人の兄や両親とも一緒に生活していたが、ある頃から別の国に招かれその国の姫として活躍しているらしい

ユーマ・バンガード

マルクとクリスの兄で16歳。

マルクやクリスとは違う国で現在は生活しており、そこで色々な活動をしているらしい。

また、剣術の腕はなかなかのもの。

ディオ

マルクが治める国に住む人物で13歳。

空間に穴を開き、同世界の別の場所や異世界への移動ができる。

物語開始時ではなぜこの能力を持っているのかや、自身の過去の事は語られていない。

何故か関西弁で話し、マルクとも対等に接している

リュウキ

マルクに仕えている人物で20歳。

マルクを守り、戦いの際には前線にでて戦う。

剣技の腕はかなり良い。

少々デイオとは相性が悪いらしい

マリアン

城の中で家事をやっている女の子で16歳。

結構厳しく王子であるマルクにも身分など関係なしに話す。

家事の中でも料理が一番得意。

シエル

マルクが何処からかスカウトしてきたらしい発明家。

大抵は自室にいて研究やら何かをやっている。

第1話：王子と仲間達

ここは、至って平和な国・メルト王国。

いつものようにこの王国内の城では、王子であるマルクが自分に仕える者達と共に時を過ごしていた。

「退屈だな・・・こうも同じような日が続くとな」

そう告げたのはこの国を治める王子・マルクだった。

「しかしマルク王子。平和こそが一番いいのです。争いが起きればこのような・・・」

そう言うマルクに仕える人物・リュウキ。

「違う。俺がいたいのは何か面白いことがないのかって事だ。何かいつもと違ったことがあれば楽しいだろ」

そう言うマルク。

「マルク王子。いい加減に食堂に来てください。あと、リュウキさんとディオ君もですよ」

そう言って姿を現したのは、この城の家事全般をやっているマリアンである。

「わかっている。と、よくディオもいるって気付いたな」

と、部屋の隅にいたディオが立ち上がった。

「ウチは朝が弱いんや。マルクの部屋に来たのはよかったんやけど隅で寝てもうてたわ」

そう言うディオ。

「相変わらずな王子に対しての口調ですね、ディオ」

そう言うリュウキ。

「マルクが別にええって言うてるんやからええやろ」

そうリュウキに言い返すディオ。

「とりあえず食堂に行くぞ。マリアンに色々言われる前にな」

足早に部屋を出ていくマルク。

「相変わらずやな、マリ안의姉ちゃんは」

そう言うディオ。

「その呼び方はやめてください。恥ずかしいですから」

そう言うマリアンも食堂へと向かった。

「この時だけは全員集まるからな・・・」

「マルク王子・・・また何かお考えを・・・」

そう言うリュウキ。

「ディオ、お前の力を俺に貸せ。お前の能力を知ってからそれが可能になるまで随分待ったんだ・・・もう良い頃だろ」

そう告げるマルク。

「王子。まさかディオ君の力を使って別の世界に行かれるのですか？」

そう聞いたマリアン。

「なりません。他の世界など王子の身に危険があります。王子を守る立場の私としては・・・」

「なら、どんな事があっても俺を守ればいいだろ・・・俺は少しでもこの退屈な生活を脱したいんだよ・・・と、マリアン」

「はい？」

「何であいつは呼んできてないんだ？」

「シエルさんですね。何か王子に頼まれたことがまだ終わらないから食事は後で良いと・・・」

マリアンがそう言うと

「王子！またシエルに勝手なことを頼まれたのですか」

「別にええんやないんか？この国はマルクが治めてるんやしな・・・
そのやり方にウチらは口出しできへんやろ」

そう言うディオ。

「じゃあディオ・・・」

「まだ確実やないんやけどマルクのお願いやったらオツケーやで。
どんな世界だろうとも道を開いたるわ」

そう告げるディオ。

「こうなると王子のお父様以外では止められませんからね・・・」

すでに諦めている様子のマリアン。

「で、どないするんや？」

リュウキにそう聞くディオ。

「わかりました。私は王子に仕える身。何処へ行きましても必ずお
守ります」

そう告げるリュウキ。

「決まりだな・・・まあ、出発はシエルに頼んである物が出来てか
らだからな・・・それまで準備しておけよ」

そんなこんなで、いつもとは違うマルクの日が始まるうとしてい
るのであった。

第2話：いざ、異世界へ・・・

しばらくそれぞれ自室にて準備をしていたマルク達。

と、珍しくシエルが自室を出てマルクの部屋にやってきた。

「早く異世界とやらに行きたいみたいだな、マルク王子」

そう告げるシエル。

「シエルか、自分から部屋の外に出てきたってことは頼んでおいた物が出来たのか？」

「ああ、それはいいが今度からは少し早めに欲しい物の製作を頼んでくれよ。流石の俺も急ピッチじゃ物の出来が悪くなるからな」

そう言うシエル。

「それは悪かったな。その詫びと言っては何だが希望があれば異世界から調達してきてやるぜ」

そう告げるマルク。

「まあ、特に忙しくはないから必要はないが・・・助手の一人もいれば製作の作業もはかどるだろうな」

「わかった。考えておくれ。それじゃこいつは有効に使わせてもらうからな」

と、満足そうなマルクの顔を見ながらシエルはマルクの部屋から出ていった。

そして、マルクの指示の元城の中庭に集まったメンバー。

「じゃあ、行くぜ。ディオ！」

「了解や」

と、マルク達の前に大きな穴を作り出したディオ。

「では、留守をお任せします。シエル」

「まあ、適当にやっておく。そんなことをしなくても大丈夫だろうがな」

そして、シエルが見守る中マルク達はホールの中に飛びこび異世界へと向かっていくのであった。

- - -

見知らぬ世界の適当な場所に開かれたホール。

そして、そこからマルク達が飛び出してきた。

「最初の異世界にしては至って普通っぽいんやな」

そう告げるディオ。

「それにしてもマルク王子。異世界で生活する場所はどつするつも

りなんですか？」

そう聞くマリアン。

「流石に今回はシエルに無理を言わせて作らせたからな・・・マリアン！」

と、何やらボックスのような物をマリアンに投げ渡したマルク。

「適当な場所でそのボックスを開放しろ。そうすればその場所に家が出る。城ほどのものはないが異世界で生活する分には問題ないだろう・・・と、シエルが言っていた」

そう説明するマルク。

「はぁ・・・それでマルク王子は・・・」

「リュウキとディオと一緒にこの世界を見てくるんだよ・・・だから家の方は頼んだぜ」

そう言うとそのまま歩きだしていくマルクなのであった。

第3話：とある異世界の能力者（1）

「最初は普通っぽい感じだったけど、それなりに発展している世界だな・・・」

そう告げるマルク。

「王子、一応周囲の警戒は怠らぬように・・・ここは見知らぬ異世界。何があっても不思議ではありませんゆえ」

そう言うリュウキ。

「って言うたってここに来たのも旅しに来たみたいな感じなんやしあまり堅くならんでもええんやないんか？」

そう告げるディオ。

「相変わらず軽すぎるなディオ。その軽さで王子にもしもの事が起きてからでは・・・」

「もうそれくらいにしる二人とも。異世界で楽しむのも警戒するのも人の自由だ・・・少なくとも俺は両方やっているけどな」

そう言うマルク。

そんな話をしながら、町を歩いていくマルク達。

と、その時前方に複数の男達が集まっている光景を目にした。

「何かやってるのか？」

そう言うマルク。

「そういうわけやあらへんみたいやな・・・よう、見てみい。真ん中に女の子がおるで」

そう告げるディオ。

「リュウキ！お前に任せる」

「お任せください。マルク王子」

と、マルク達から離れ駆けだしていくリュウキ。

その頃、その女の子はというと・・・。

「今日も朝から厄介なことに巻き込まれたわね」

ため息をつきながらそう言うその女の子。

周りの男達はその女の子を逃がさないように囲んでおり、いつ襲いかかれるかわからない状態になっていた。

「こんな所で足止めさせられてたら学校に遅れるんだけど・・・今日に限っては黒子と一緒にじゃないし・・・まあ、仕方ないわね・・・」

と、手のひらをかざすその女の子。

そして、その女の子が何かをしようとした瞬間男達が全員その場に倒れたのだった。

「ん？私まだ何もしてないんだけど・・・」

と、女の子が周りを見ると刀を鞘に収めたまま構えていたリュウキがいた。

「今のアンタが・・・」

「・・・自分で何とかするつもりだったのか・・・すまなかった・・・しかし、マルク王子の指示だったので」

そう告げるリュウキ。

「マルク？」

「王子、さっきあの子からなんや力を感じたんやけど・・・」

そう言うディオ。

「この世界・・・面白くなりそうだな・・・リュウキ、戻るぞ」

そう告げるとマルク達は、来た道をゆっくりと戻っていくのであった。

「って、何なのよ・・・」

そして、訳が分からずその場に残された女の子もまた自分が通う【常盤台中学】へと向かうのであった。

第3話：とある異世界の能力者（2）

その頃、適当な空き地にはそれなりの家が建てられ・・・ではなく、出現していた。

「もう、マルク王子は・・・」

そう思っていたマリアン。

と、丁度戻ってきたマルク・リュウキ・ディオ。

「お帰りなさいませ、マルク王子」

「最初の世界にしては楽しめそうだ・・・ディオ、引き続きあいつを含めたこの世界の奴らを見ていてくれ」

そう言うマルク。

「まあ、観察とか調査とかはうちの能力があれば簡単に出来るからな」

そう告げるディオ。

「それでマルク王子は・・・」

そう聞くリュウキ。

「俺は来るべき時に備えておく。あいつとも少し話をしたいしな」

そう告げるマルク。

「それはいいんですけどマルク王子、無茶なことだけはしないでくださいよ」

そう言うマリアン。

「お前もリュウキのような事を言うな・・・まあ、そんなに心配しなくても俺が外に出る時はリュウキやディオがいるからな。そう危険な事にはならないだろうさ」

そう言うマルク。

「ディオの力など必要ありません。マルク王子を守るには私だけで十分です」

「相変わらずやな、リュウキは」

ディオがそう言うと、ディオを睨みつけるリュウキ。

「マルク王子といい、この二人といい・・・もう・・・」

この様子を見て呆れているマリアン。

「ほな、うちは行ってくるで。良い報告待ってってなマルク」

そう言うと、自分の目の前にホールを開きその中へ飛び込んでいった。

「リュウキ、お前も備えておけ。いつ出るかわからないからな」

「はっ、マルク王子」

指示を受け頭を下げるリュウキ。

そして、ディオは自分の能力を使い先ほど出会った女の子達が通う常盤台中学の近くにやってきていたのだった。

「ここはただの学校やないんやな・・・うちみたいな特殊な力を持つ人がたくさんおるみたいやな・・・一応調査がうちの役目なんやけど・・・うちも気になるしな・・・」

高い場所から周囲を観察していたディオ。

その頃、常盤台中学のグラウンドにいた二人の女の子。

「ん・・・今何か感じましたような」

「どうしたのよ黒子。真剣な顔して」

「いえ、何か能力のような力を感じた気がしたのですが気のせいのようなですわ。美琴お姉様」

そう言う黒子。

（そう言えば今朝のあの人達・・・佐天さんみたいにレベル0の人・・・って、レベル0ってあいつもそうなのよね・・・何か考えるだけでイラつくけど）

そう考えていた美琴。

「今度はお姉様が真剣な顔をして考えておられますわよ」

そう指摘する黒子。

「ちよつとね・・・」

「・・・能力者同士は力を感じ合うんかいな・・・ここからは出来る限りホールを使わないで近づかんといかんな」

そう考えながら調査を続行していくディオナなのであった。

第3話：とある異世界の能力者（3）

ディオが調査を行っている頃・・・。

「マルク王子。ディオの件ですが」

と、そう話しかけてきたリュウキ。

「ん？何だ」

「ディオの能力が調査等に役立つことは承知しておりますが、問題はディオの性格です」

そう告げるリュウキ。

「リュウキさんは真面目なんですけど、一直線に真面目なのが欠点ね・・・」

と、そう思っているマリアン。

「単独でのマルク王子からの任務。ディオの性格では何を起こすかわかりません」

熱心に語っているリュウキ。

「もしそれによりこの世界の住人との争いになればマルク王子にまでその被害が・・・」

リュウキがそこまで言った時、椅子に座っていたマルクが立ち上がった。

「ディオ・・・リュウキ・・・マリアン・・・俺はお前達を優秀な部下であり仲間だと思っている。出会った日は違ってもその思いは同じだ。お前達がと言う人物かも知っている」

そう言うマルク。

「マルク王子・・・」

マルクの顔を見るリュウキ。

「ディオは常にああいう感じだからな、リュウキやマリアンと比べたら頼りない感じはするが、俺はリュウキと同じように信じている」

「信頼ですか」

「ああ、それになディオがそういった行動に出るのにも理由がある・・・だからリュウキ・・・」

そしてマルクはリュウキに何かを伝えるのであった。

そして場面戻って常盤台中学。

どうやら学校も終わったらしく、学生達は学校内外に散らばっていた。

そして先程の女の子・御坂美琴も学校を終え一人帰り道にいた。

「黒子はジャッジメントだし・・・今日はどうしようかな・・・」

そんな事を考えていた美琴。

そんな時、美琴の前に姿を見せたディオ。

「あんだ今朝の・・・」

「少し能力に興味があるんですわ」

美琴にそう告げたディオ。

「・・・・・・・・」

無言でディオを見る美琴。

「私あんたみたいな人に付き合ってる暇ありませんから」

そう言い放つ美琴。

「ちょっとぐらいええやろ・・・ウチも能力者やで」

「・・・そうなの・・・暇つぶしぐらいにはなりそうね・・・」

「ほな、何処か安全な場所ないんか？」

そう聞くディオ。

「案内するわよ。私も何もない場所の方がやりやすいし」

そんな訳でディオと美琴はこの場を離れ目的の場所に向かうのであった。

第4話：電撃使い【エレクトロマスター】（1）

そしてとある場所にて足を止めるディオと美琴。

「ここならどう？」

そう言う美琴。

「障害物もあまりないし、丁度ええな」

この場所に納得したディオ。

「・・・さてと」

とりあえず一呼吸おいた美琴は考えていた。

目の前にいる自称・能力者のディオとどう戦うかを。

（まずは相手の能力を知ることからだけど・・・うかつな攻撃は自分をピンチにするだけ・・・それにあいつみたいなのもいるわけだしね）

じつとディオの様子を伺いながら、動こうとはしない美琴。

「何や、仕掛けてけえへんのか？」

そう言うディオ。

（こっちの攻撃待ち・・・あいつの能力は直接攻撃系じゃない・・・

だとしたら私からやるしか・・・)

と、手のひらからほとばしる電撃。

「ないみたいね!!」

相手の力を見るため直線的に電撃を放った美琴。

「おっと・・・」

その場から移動して電撃をかわすディオ。

「こっちから仕掛けてあげたのに能力使ってこないわけ？」

美琴がそう言う

「タイミングがあるんや。使い時がな」

そう告げるディオ。

「・・・なら、どんどんこっちから行くわよ」

次々と電撃を放っていく美琴。

「こんなやないな。あの時感じた一瞬の力は」

そう告げながら身体能力だけでかわしていくディオ。

「私が本気にならないと能力使わないって事・・・あんたあいつみたいに気に入らないわね・・・」

と、今までとは違う強さの電撃が美琴の身体に駆けめぐっていった。

「こっからが面白くなりそうやな・・・ウチも力の準備しとかんな」

そう言うディオ。

と、美琴は一枚のメダルを取り出し腕を前に構えた。

「あんたからのリクエストだから、後悔しないでほしいわね」

「後悔なんてせえへんわ。逆に嬉しいしな」

そう告げるディオ。

「じゃあ遠慮なく・・・」

そして今度はディオが美琴の様子をじっと伺っていた。

（見てるだけでわかるわ・・・物凄いバチバチやな。あと、武器はあのコイン・・・それから考えられる可能性は・・・）

と、ディオはある程度美琴から距離をとった。

（私が何をしようとしているかわかったみたいね。でも・・・）

逃がさないようにディオを視界に捉え続ける美琴。

「対処出来るものなら対処してみなさいよ!」

そして放たれた、エネルギー砲のような美琴の一撃。

そして次の瞬間、その場にいたはずのディオはいつの間にか美琴の後方の少し離れた位置に立っていたのであった。

第4話：電撃使い【エレクトロマスター】（2）

「!？」

後方に気配を感じ振り向くと同時に、ディオの次の動きに備える美琴。

（今の・・・まさか黒子と同じ・・・）

そう考えた美琴は

「あんた、瞬間移動でも出来るわけ？」

そうディオに問いかけた。

「瞬間移動な・・・それとはちゃうわ。ウチのはちょっと効率悪いものやしな・・・せやけど」

じつと美琴を見るディオ。

「な、何よ」

そう言う美琴。

「今のはええ攻撃やったな・・・あんなのやったら普通に防御しとつてもあかな・・・」

「私のレールガンをよけた上で、分析してるわけね・・・」

「今度はウチはここから動かへんから・・・もう一発撃ってきてくれへんか？」

と、そんな事を言ってきたディオ。

「それって挑発でもしてるつもり？」

そう聞く美琴。

「そんなやないわ。それに気になるんやろ・・・ウチの能力が何なのか・・・」

「・・・」

無言でディオの様子を伺っている美琴。

（さっきは直接当てるつもりは無かったけど上手くかわされた・・・それにあいつの能力瞬間移動系なら・・・まともに正面に撃つても大丈夫・・・なはずよね・・・）

そう考えながら、コインを手にする美琴。

「いいわよ。やってあげるわよ」

電撃の力を集中させていく美琴。

「とりあえずはこれで調査は一応終了でええな」

そう呟くディオ。

「!!」

そして放たれる二発目のレールガン。

その時美琴は、ディオの前に大きな穴が開いているのに気付いた。

「何・・・」

そして放たれたレールガンは、吸い込まれるように穴の中へと入っていた。

「これがウチの能力なんよ・・・と、横・・・気いつけた方がええな」

「!？」

ディオに言われて横を見ると離れた場所にディオの前にあるような穴が出現していたのだった。

「まさか・・・」

「正解や・・・と、せつかくやしお返しや」

と、穴の中から飛び出してきたレールガンはまっすぐ美琴に向かっていた。

だがその時、一人の女の子が美琴の前に出現した。

そしてその直後、レールガンの軌道上から外れた場所にその女の子と美琴は移動していた。

「黒子・・・何でここにジャッジメントは・・・」

美琴が驚いていると

「お姉様のレールガンは目立ちますから・・・申し訳ないとは思いましたが、初春にその場を任せてここに来た・・・という訳です」

そう説明する黒子。

「なんやあの時一緒におった子やな」

そう言うディオ。

「あの時感じた気配・・・あの殿方の気配・・・と言っわけですね」

「鋭いやっちな・・・」

そう思うディオ。

「貴方が何者かは存じ上げませんが、ジャッジメントとして見過ごすわけには参りませんの・・・ですから拘束させていただきます」

そうディオに言い放つ黒子なのであった。

第5話：空間移動「テレポーター」

（これは予定外やったな・・・）

そう思っていたディオ。

「ウチはもう満足やしな」

「そう言う訳には参りませんの。私のお姉様に手を出したその代金は、拘束という形で払っていただきますわ」

そう言い放つ黒子。

「いつから私は黒子のものになったの・・・」

そう呟く美琴。

と、鋭く尖っている鉄矢を手に持つ黒子。

「せや、さっきいきなり現れて消えとつたな・・・」

「・・・私はジャッジメントの白井黒子。ジャッジメントとして正々堂々と戦う・・・ですから私の能力の事も教えてさしあげますわ」

そう告げる黒子。

「私は空間移動能力者・・・いわゆるテレポーターと呼ばれていますわ」

「なるほどな・・・」

そう呟くディオ。

「わずかの間でしたけど、貴方の能力を見せていただきましたわ。
^{ホール}穴を利用した転移系・・・私の能力と似た感じですね」

そう考える黒子。

「そんなんやないで。ウチのは全てを越えて移動できるんや・・・」
そう言うディオ。

「って、黒子・・・じゃあ私とあいつの戦い若干は見てたわけ？」

「敵の情報を得るのは重要な事ですから・・・それにお姉様の勇姿も・・・」

最後の部分だけ小声だった黒子。

「ほなら、ウチの能力は大体理解したつちゅうことか？」

そう聞くディオ。

「ええ、お姉様のレールガンも飲み込み別に開いたホールからの攻撃・・・確かに強力な能力ですが、私には通じませんわよ」

そう言う黒子。

「黒子、あんたもムキにならないようにしなさいよ。何かあいつは

悪い奴って感じがしないのよね」

そう告げる美琴。

「生物、物質の空間移動・・・つまりはその手にある武器も【空間内を飛ばせる】っちゆうことやる」

「!?!?・・・お気付きでしたの・・・」

「ただの空間移動やったらそんなに強くないやる。真の強さは武器の空間移動や・・・」

ディオの言葉にただ驚きと感心している黒子と美琴。

「まだまともに黒子は能力見せてないのに、あいつ・・・」

「同じような能力やから勝負してみたいんやけどな・・・ウチも帰らんとマルクに怒られてまうからな」

「だったら日を改めたら？」

と、そんな事を言い出した美琴。

「お姉様？」

「今の黒子はジャッジメントとしてやってるわけだし、それじゃ仕事だとか何とかで思い切りやれないでしょ」

そう告げる美琴。

「それはダメですよ！そんな事で能力を・・・しかも・・・」

そう言う黒子。

「なら初春さんとか佐天さんを連れて見学者としてさ・・・初春さんもジャッジメントなわけだし」

「・・・」

無言になる黒子。

「あんたはそれでどう？」

ディオに聞く美琴。

「ウチは構わへんで」

そう返事するディオ。

「あと、そっちも仲間を連れてきなさいよ。それが条件」

「まあ、マルクも了承するやろしええよ」

そう言うディオ。

「なら、今度の休日に・・・黒子もいいでしょ」

「お姉様がどうしてもとおっしゃられるのなら・・・この白井黒子・・・全力で貴方に勝たせてもらいますわ」

意気込みそう言い放つ黒子なのであった。

第6話：それぞれの思い

そして、この日の夜。

「まあ、そう言う事やから」

と、マルク達に事情を説明したディオ。

「お前はまた勝手に・・・」

半ば呆れているリュウキに対し、マルクはじつとディオの話を聞いていた。

「全員と言うことは私も行くんですね」

そう言うマリアン。

「なんや、ウチがやったことまづかつたんか？」

そう聞くディオ。

「当たり前だ・・・大体お前は・・・」

また何か言い出そうとしたリュウキであるが、すぐにマルクが制止させた。

「それについては上出来だ。だからその上出来ついでにもう一つやってもらいたい事がある」

「？」

そして、しばらく時が経ちこちらは美琴達が生活している寮室。

「黒子はジャッジメントの仕事、初春さんに任せて私のトコに来ちゃったから怒られてるし・・・」

お風呂上がりになんな事を考えていた美琴。

だがそんな美琴の目の前の宙に、突然ホールが開いた。

「そっちは聞こえるんか？」

「なーっ！」

声にならない声を上げる美琴。

「こういう使い方初めてやしな」

ホールの向こうからは、ディオの声が聞こえていた。

「あ、あんだね！こんな所にいきなり現れて良いと思ってるの！」

そう告げる美琴。

現在美琴は可愛いパジャマを着ており、それにより少々慌てているようだった。

「せやから声だけ届けるためにしとるんやけど・・・都合悪かったんか？」

「まあ、今は黒子もないからいいけど・・・他の人に見つかったら私もただじゃすまなくなるわよ」

そう言う美琴。

「せやったら話はすぐやから。えつとな・・・これや」

と、ホールの中から一枚の折り畳まれた紙が落ちてきた。

「何なの？」

「マルクからの美琴への手紙や」

そう説明するディオ。

「そう・・・って、何勝手に人のこと呼び捨てにしてるのよ」

そこにつっこむ美琴。

「ウチは平等意識でみんな呼び捨てにしとるんやけどな」

そう告げるディオ。

「会ったばかりでしょうが・・・」

「ほな、どないしたら呼び捨てで呼んでええんや？」

そう尋ねるディオ。

「なら、黒子に勝つたら許可してあげるわよ。言っとくけど黒子は強いんだからね」

「了解や・・・と、手紙ちゃんと見てや。更に言つとその手紙誰にも見せたらあかんからな」

そう言い残し、ホールは小さくなり消えていったのであった。

「手紙ね・・・」

そして美琴はその手紙を読んでいたのだった。

第7話：勝負と密会（1）

そして、黒子とディオが勝負する当日。

美琴はいつも通りに起床していた。

「今日は早いですね、お姉さま」

「いつも通りに起きてきたんだけど・・・まあ、いいんだけどね」

そう言う美琴。

「・・・・・・・・」

しばらく流れる沈黙の時。

「今日なのよね、黒子」

美琴がそう言う

「ええ、必ず勝ってみせますわよ。あのような殿方に負けていてはジャッジメントの恥ですから」

そう告げる黒子。

「初春さんと佐天さんとは待ち合わせていくんでしょ」

「そうですね。しかしそれにしても残念ですね。お姉さまに私の雄姿を見ていただけないなんて」

少々がっかりした様子の黒子。

「悪いわね黒子。ちょっと急用が入ったから」

そう答える美琴であつたが、その表情は曇っていた。

同じ頃・・・マルク達かというと・・・。

「いよいよやな」

そう呟くディオ。

「お前は時間を稼いでいる。今回は自由に楽しんで構わないからな。その間に俺は俺の目的を果たす」

そう告げるマルク。

「私は準備出来ましたけど、リュウキさんとディオ君はどうですか？」

そう聞いてきたマリアン。

「問題ない。いつでも出られる」

そう答えるリュウキ。

「ウチもオツケーやで」

そう言うディオ。

「それではマルク様・・・」

「ああ、何とか頼むぞマリアン」

そう告げるマルク。

「はい。マルク様もお気をつけて」

そして、マルクとディオ達はそれぞれの目的のため動き始めるのであった。

場面戻って美琴達。

「お待たせ」

明るい感じでそう言ったのは黒子と同じジャッジメントである初春の親友・佐天涙子であった。

「白井さん・・・本当にやるんですか？」

そう尋ねる初春。

「お姉さまからのご助力もありますし、私と致しましては一応ジャッジメントとして・・・」

そう言う黒子。

「初春さん、佐天さん。悪いんだけど・・・」

美琴がそう言つと

「任せてください。この私がしっかりと見届けますから」

そう言い放つ佐天。

「だ、大丈夫です。ジャッジメントの私もついてますから」

やる気を見せるように言つ初春。

「う、うん・・・じゃあお願い。黒子、間に合うようだったら後で
行くから」

そう言つ美琴。

「大丈夫ですわ。お姉さまが来られる頃には終わっていますから」

自信たつぷりにそう告げる黒子。

「それじゃ・・・」

そして、美琴と黒子達もまた目的のために行動を開始していくのであつた。

第7話：勝負と密会（2）

指定した場所にいち早く到着していたディオ・リュウキ・マリアンの三人。

「何やウチらが先についてもうたな」

そう言うディオ。

と、少し遅れて黒子・初春・佐天の三人が姿を現した。

「私達が遅れてしまいましたね」

そう言った初春。

「遅れてくるとは初めから負けるつもりのようだな」

そう告げるリュウキ。

「約束の時間の五分前に到着していますの。それを遅れてきたと言う発言は侵害ですわね」

負けずに反論する黒子。

「・・・あっちの女の人・・・綺麗じゃない」

何故かそんな事を言う佐天。

「佐天さん・・・」

少し呆れている初春。

「ほな、始めようか」

そう言い構えるディオ。

「すぐに終わらせてさしあげますわよ」

向かい合うディオと黒子。

「ルールは相手の背後を完全にとったら勝ちとします・・・武器の使用は禁止。ディオ君は武器を使いませんか・・・黒子さん側の観戦者の方・・・それでいいでしょうか？」

そう聞いてきたマリアン。

「大丈夫ですよ、白井さん」

「心配無用ですわよ、初春」

そしてディオと黒子が戦い始めようとしている頃・・・。

別の場所ではすでにマルクと美琴が対面していた。

「話ならすぐ終わらせましょ。黒子達の所に行きたいし」

そう告げる美琴。

「俺がする話は単純なことだ。俺はお前を仲間に加えたい」

「!？」

マルクの発言に驚く美琴。

「あんだ・・・何言ってるの」

「お前の力は素晴らしい・・・理由はそれだけだ」

そう告げたマルク。

「素晴らしいって・・・」

「俺達はこのことは別世界から来たって事は話したっけか・・・まあどうでもいいが・・・」

そう言うマルク。

「冗談じゃないわよ！何で私が、大体この世界から私がいなくなったら・・・」

「俺達がこの世界に来ていることで世界は干渉している・・・そして引き起こされる時空の歪みは都合いいように周りを変えていく」

美琴の顔をみながら説明するマルク。

「私が絶対に拒否したらあんたはどうするつもり？」

真剣な表情で尋ねる美琴。

「お前の返答しだいて事にしようか・・・」

そう答えたマルク。

「・・・」

無言でマルクを見ている美琴。

だが、そんな時

「んな所で何やってるんだ、ビリビリ」

そう言っただけで通らなかった感じの一人の青年が姿を見せた。

「げっ、あんたは・・・って、私はビリビリじゃないわよ」

そう言う美琴。

「ってかナンパでもされてたのか？でも、ビリビリをナンパしてもな・・・」

そんな事をいう青年。

それに対して怒った表情を見せる美琴。

「美琴の知り合いみたいだがいきなり現れて何のつもりだ」

そう言ってきたマルク。

「俺は上条当麻だ。こいつとはちょっとした縁があるだけだ」

そう言う当麻。

「ちょっとしたって、あんたね・・・毎度毎度私の電撃無効化しておきながら・・・」

当麻を睨みつけながらそう言う美琴。

「無効化・・・それがお前の能力か？」

マルクがそう尋ねると

「俺の能力レベルは0だぜ・・・無能力だ」

そう答える当麻。

「おかしな奴だな・・・まあいい・・・美琴に話は伝えたし・・・返事の期限は後でもディオに伝えさせる」

そう告げたマルク。

「何話してたんだ？ビリビリ」

「私はビリビリじゃなくて美琴・・・って、話が終わりなら黒子達の所に行きたいんだけど」

そう言う美琴。

「なら一緒に行く。あとお前もついでにどうだ？偶然ではあるが俺と干渉してしまった事だしな」

当麻を見ながらそう言うマルク。

「別に俺はいいぜ」

「むっ・・・」

当麻がついてくることに不満を持つ美琴。

そんな訳で当麻を加え三人はディオオVS黒子の場へと急ぐのであった。

第7話：勝負と密会（3）

そしてこちらは、ディオvs黒子の場。

未だその決着はついていなかった。

「白井さんと互角って・・・あの人凄いです」

そう言う初春。

「かれこれ何回能力を使い合っているんだ」

そう告げるリュウキ。

「お互い負けたくないからでしょうか・・・ディオ君は本気かどうか分かりませんけどね」

そう言ったマリアン。

と、そんな時こちらに向かっていたマルク・美琴・当麻が到着した。

「黒子！」

「お姉さま！」

美琴の声に笑顔になる黒子だったが、すぐにその表情は変化した。

「お姉さまっ。何故二人の殿方と一緒にいらっしやっただんですの！」

そう言う黒子。

「えっと・・・何て言うか・・・って、あんたのせいなんだから何とかしなさいよ」

そう言うて横を見た美琴だが、そこにいたはずのマルクは、リュウキ・・・マリアンの所にいた。

「なっ・・・」

「ここからは敵同士なんだろう」

そう言うマルク。

「で、ここに集まって何してるんだビリビ・・・じゃなくて、御坂・・・」

途中美琴に睨まれて言い直した当麻。

「黒子とあのマルクの仲間のディオって奴のバトル」

そう説明する美琴。

「黒子って、白井黒子が・・・ジャッジメントの」

そう言う当麻。

「なんや・・・結構早かったんやな・・・せやったら・・・もうええやろな」

黒子を見ながらそう言うディオ。

「それはどういう意味でございますの？」

「ケリつけるっちゆうことや」

そう言うディオは、自分の能力で開けた穴に飛び込んだ。

「私を甘くみないでもらいたいですわ。ただ移動合戦をしていたわけではありませんわ」

と、黒子も瞬間移動の能力を発動させた。

「初春さん、佐天さん。ずっと黒子達ってこんな感じなわけ？」

尋ねる美琴。

「はい、互いに背後をとろうとしていて・・・」

そう説明する初春。

「どっちも凄いんですよ」

見ている佐天の方が何だか盛り上がってしまっている感じだった。

「御坂がバトルとか言うからドンパチやると思ってたけど」

そう言う当麻。

「黒子と一緒にであいつも移動系だからね」

そう呟く美琴。

それからしばらく、同じような光景が繰り返された。

（次のタイミングですわ・・・あの殿方の次に出現するタイミング・
・必ず背後を取る事が可能ですわ）

そう考えながら行動する黒子。

そして、出現したディオの穴。^{ホール}

それとほぼ同時に、黒子も姿を現した。

そして、見学者である美琴やマルク達もこの様子を見ていた。

「相手が出てくるよりも早く攻撃態勢に・・・いけますよ白井さん」

そう言う初春。

「ディオの奴、負けたら私自ら鍛えてやろう・・・」

そう告げるリュウキの横で、笑みを浮かべていたマルク。

「見せてやれよ・・・お前の力を少しくらいな」

そう呟くマルク。

「これで私の勝ちですわ」

ホールから飛び出して来るであろうディオに向けて、捕まえるために手を伸ばす黒子。

だが、黒子だけ気づいてはいなかった。

黒子の後ろに開いた新たなホールに・・・。

「黒子！」

「!？」

美琴の呼び声でその事態に気付いた黒子であったが、すでに手遅れであった。

「ほい、背中取ったで」

黒子の背後のホールから出てきたディオが、黒子の背中にタッチをした。

「・・・っ・・・」

その場に座り込む黒子。

「おいっ、しっかりせえや・・・さっきまであんなに動けてたんに」
そう言うディオ。

そんな二人の元に集うメンバー達。

「あれだけテレポートしていたら、身体に負担がかかりすぎて危な

「いですよ白井さん」

そう言った初春。

「最後の方はディオに負けたくないって思いで能力使ってたみたいね、黒子」

「お姉さま・・・負けてしまいましたわ。ジャッジメントである私が・・・」

「でも、今日はジャッジメントとしては戦ってなかったんだしいんじゃない？」

励まそうとそう言う佐天。

「お疲れ様です、ディオ君」

そう告げるマリアン。

「結構しんどかったわ。中々の精神力やな・・・黒子は」

そう言うディオ。

「なぜ、初めからホルの同時出しをなさらなかったのですか？そうすれば私に勝つことなど・・・」

「その話は後にしましょ・・・黒子も能力使いすぎて疲れてるんだし、あんた達もそれでいいわよね」

主にマルクに向かって聞く美琴。

「ああ、今日は戻るぞ・・・」

そう言いあっさりと撤収していくマルク達。

そんなマルク達の後ろ姿を、美琴は深刻な表情で見っていたのであった。

第8話：美琴とディオ

その日の夜。

昼間の疲れからか美琴に絡むことなく早々と眠りについていた。

「・・・」

そんな黒子の寝顔を見ながら、マルクとの話を思い出す美琴。

と、その時天井付近に開いたホール。

「って・・・」

だが、前回同様にそこから何かが出てくる気配はなかった。

「出てきていいわよ、聞こえてるんでしょ」

そう告げた美琴。

と、ホールが少し大きくなりそこからディオが姿を現した。

「なんや、どないしたんや。前は・・・」

そう告げたディオ。

「黒子と私に手を出さなきゃいいわよ」

そう言う美琴。

「・・・マルクの話の事で悩んでるんやろ」

呟くように言ったディオ。

「あんたが私ならどうしてた？大切な友達がいるこの世界を・・・離れるって・・・」

そう聞いた美琴。

「せやな・・・ウチはマルクの事知ってるから、諦め悪いからついて行くんやろうけど・・・美琴の場合やったら・・・その大切な友達に相談やないんか？」

そんな風に答えを出したディオ。

「相談か・・・そうだよな・・・私ってばそんな簡単なこと気付かないんだろね」

そう告げた美琴。

「やっぱり美琴らしくないんやな・・・すつきりしてきたらまたいつもの美琴になれるで」

「そうね・・・って、いつもの私って何よ・・・」

そんなやりとりを繰り返す美琴とディオ。

「せや、返事の期限やな・・・まあ、適当でええんやけど三日後ぐらいの夕方はどうや？」

そう提案してきたディオ。

「別に反対した所で覆るわけじゃないんですよ。それでいいわよ」
了承の答えを出した美琴。

「ほな、ウチは戻るわ。良い返事待ってるってマルクからの伝言や」

「はいはい、帰るなら帰れば、誰かに見つかる前にね」

そんな訳でホールを抜けて帰還していったディオ。

だが、美琴もディオも気付いていなかったのだった。

寝ていたはずの黒子が目を覚ましていた事に……。

「猶予は三日か……とりあえず明日にでも黒子達に話をしないとね……んっ……私も今日はもう寝よう……」

美琴も色々あって疲れたのか、早めに就寝することにした。

そして、しばらくして美琴が眠りに落ちた頃……。

ゆっくりと身体を起こした黒子。

「お姉さま……」

天井を見つめながら、そう呟く黒子なのであった。

第9話：美琴と黒子（1）

翌朝。

いつものように起床した美琴。

「あれ…黒子は…」

辺りを見渡す美琴だが、黒子の姿は何処にもなかった。

「と、急いで準備して学校に行かないとね」

そう言う美琴。

その頃、マルク達かというと…。

「とりあえず三日後に設定したんやけど…それまでどうするんや？」

マルクにそう聞いたディオ。

「何もしないさ…街を見学したいならしてきてもいい…向こうが動くまでは俺も動かない」

そう告げたマルク。

「それやったらそれでええんやけどな…美琴が来てくれるかはわからへんけど」

そう言うディオ。

「その場合はマルク様次第だが…」

そう呟くりユウキ。

「さて…あいつらはこれからどうするかな」

そう言うマルク。

そして、こちらは常盤台中学。

「…」

美琴は授業を受けながら色々考えていた。

(黒子とは学校に来て会えたけど…いつもとなんか違う感じが)

そう思っていた美琴。

そして、時は過ぎ授業も終わり放課後。

美琴は校舎内で黒子と会っていた。

「黒子、今日は…」

美琴がそう話しかけると

「申し訳ありませんお姉さま。今日黒子はジャッジメントの用事がございまして…」

そう告げた黒子。

「えっ、そう…ジャッジメントなら仕方ないわよね…」

「…申し訳ございませんわ…それでは…」

そう言い美琴と別れる黒子。

その表情はどこかけわしかった。

「仕方ないから先に帰って…」

そんな事を思いながら帰り道を歩く美琴。

と、途中のクレープ屋の近くに初春と佐天の姿を見かけた美琴。

「初春さん、佐天さん」

二人に声をかける美琴。

「あっ、御坂さんも今帰りなんですか」

そう言う初春。

「うん…あれ、でも…」

と、何か不思議に思った美琴。

「どうしたんですか？御坂さん」

そう聞く佐天。

「初春さん、今日はジャッジメントじゃないの？黒子は……」

美琴がそう言つと

「今日はジャッジメントはお休みですよ。固法先輩からたまにはゆつくり休む事も必要だからって」

そう説明した初春。

「えっ……」

驚いた表情を見せる美琴。

「どうしたんですか？」

「だって黒子……さっき」

先程の話を初春と佐天にした美琴。

「白井さん……どうしちゃったんでしょうか」

そう思つ初春。

「それっていつからなんですか？御坂さん」

「いつからって……昨日まではいたって……」

そう言つ美琴。

と、ここで美琴はとある事を思い出した。

「本当は黒子も一緒の時が良かったんだけど…初春さん、佐天さん…少し話いいかな」

ちよつと考え込んだ表情で話す美琴。

「何か面白い事がありそうですね」

そう言う佐天。

「私達は友達です。聞かせてください、御坂さん」

そんな訳で美琴は二人に話をした。

マルク達に関する…。

「…それって…どういうことなんですか」

驚いた表情を見せる初春。

「やっぱり面白い事でしたね」

そう告げる佐天。

「…黒子にも相談したい…そう思ってるけど」

「それでしたら私からも白井さんに話をしてみます。同じジャッジメントですから」

そう言う初春。

「ごめんね、出来る限り私が黒子に話すから」

そんな感じで今日は寮へと戻ってきた美琴。

しかし、黒子の方はまだ帰ってきてはいなかった。

そして、その黒子かというと…。

「一体どういふことなのか説明してほしいわね…」

「ご迷惑をおかけします…固法先輩」

そう告げた黒子なのであった。

第9話：美琴と黒子（2）

「ちゃんと話してくれないと相談にも乗れないわよ」

そう告げる固法。

「私といたしましてもどう説明してよいやら…ですが、今お姉さまと一緒にいるのが…少し辛いんですの」

そう言う黒子。

「御坂さんと何かあったみたいだけど…そうやって距離をとってたら何も解決しないんじゃない？とにかく戻りなさい…それでももしどうにもならないならその時は相談に乗るわよ」

「…ありがとうございます固法先輩…少しだけ楽になったと思いますわ」

そう告げる黒子。

「あと、ジャッジメントの仕事にも影響ないようにね…」

そんな訳でこっそりと寮室へ戻っていった黒子。

「遅かったじゃない…黒子」

「！？…お姉さま…」

ちよっと驚いたように言う黒子。

「今朝から様子がおかしかったけど…具合でも悪いの?」

そう聞いた美琴。

「身体は健康そのものですわ…」

そう言う黒子だったが、その声には元気がないように感じた美琴。

「何かあったなら話してみなさいよ黒子。私も黒子に話したい事あるし」

「…まだ少しだけ時間を頂けますかお姉さま」

そう告げた黒子。

「…いいわよ。その代わり初春さんとか佐天さんにも心配かけないようにね」

「…ありがとうございます、お姉さま」

美琴も黒子も心のうちに思う事がありながらも、語る事はしなかった。

そんな少しだけいつもと違う雰囲気のまま、マルクが指定した日を迎えた。

「今日か…早かったわね」

朝起きてそう呟く美琴。

「おはようございます、お姉さま」

「おはよう、黒子…何だか今日は機嫌いいみたいね」

そう言う美琴。

「…今日は…良い日になりそうですね」

何気にそう呟いた黒子は、微笑みながら美琴を見ていたのだった。

いつも通りに学園生活を過ごしていく美琴達。

そして、マルク達かというと元の世界に帰る準備を行っていた。

「美琴がどういふ答えを出すにしても今日俺達は元の世界に帰るかな…ディオ、最後に色々やってもらうが…」

「別に大丈夫やマルク。それに、美琴やったら…」

そう言い窓の外を眺めるディオ。

それぞれの思惑を胸に、この世界での時を過ごしていく。

そして、夕方。

美琴は一足先に寮室に戻ってきていた。

「案外三日っていうのも早いものね…とりあえず私の答え…ディオ達に伝えないと…」

一呼吸置いて寮室を出ようとした美琴であったが、いつの間にかその入口に黒子の姿があった。

「黒子…」

「今日、初春から聞きましたわ…大体の事情は」

そう告げた黒子。

「で、黒子はどうしようとしてるわけ？」

そう聞いた美琴。

「お聞きにならなくてもわかっていきますでしょ…お姉さま」

「…そこをどいて黒子。どういう答えを出すにしてもディオ達に伝えなきゃいけないの」

と、突然美琴の目の前に瞬間移動した黒子。

「!？」

とつさに身構える美琴に対して、手をかざす黒子。

「お姉さま…ここでお姉さまの能力をご使用になるのはいけませんわ。そして、私の能力があればお姉さまを行かせないように…」

そう告げる黒子だったが、美琴の真剣な視線にその言葉を止めた。

「私や初春達よりもあの殿方達の方が大切なのですか？」

「そんな訳ないじゃない…黒子も…初春さんも佐天さんも大事…でも…」

そう言う美琴。

「でしたら私も同行させていただきますわ…よろしいでしょうお姉さま」

「…心配してくれてるのはうれしいけど…わかったわよ。了承しないとそこをどいてくれないんでしょ。じゃあ、時間も時間だし…」

「ええ、参りますわよ」

そんな訳で美琴と黒子はマルク達の待つ約束の場所へとやってきた。

「と、何や瞬間移動の女の子も一緒に来たんやな」

そう告げるディオ。

「私はただの付添いですわ。お気になさらないでください」

そう言う黒子。

「で、答えは出たのか？」

「…みんなに相談してね…私の事を頼りにしてくれてるのは嬉しいけど…それはこの世界でも同じ…だから私はディオ達の世界に行く事は出来ない」

そう言い放った美琴。

「マルク様…いかがなされますか？」

そう聞いたリュウキ。

「ディオと少し話をしたんだろ…なら…」

マルクがそう言うと、美琴の前に立った黒子。

「お姉さまは答えを出しました。これで話は終了のはずですわ」

「瞬間移動は厄介やな…マルク」

そう言うディオ。

「悪いがな…大体の展開はこっちで予想済みって言う事なんだよ…
つまりだ…」

そして、次の瞬間美琴は自身に何か違和感を覚えていた。

「お姉さま！その腕輪は…」

「えっ、いつの間に…」

驚いている美琴。

「さて、ここから俺達の出番ってわけだな」

そう言い放つマルクなのであった。

第9話：美琴と黒子（3）

「何なのよ、この腕輪・・・」

そう言いながら腕輪を外そうとしている美琴。

「無駄だぜ美琴。それを外せるのは俺だけだ」

そう告げたマルク。

「いったいこれはなんですの！」

そう言う黒子。

「能力封じの腕輪ってやつかな・・・効果は名前のまんまだ」

そう答えたマルク。

「お姉さま！」

黒子が美琴にそう言うと

「電撃が出ない・・・」

そう呟く美琴。

「だから言っただろ・・・いまは能力レベル0に設定してある。お前の一切の能力は使えないぜ」

笑顔を見せながら説明するマルク。

「何でこんなことしてまで・・・」

「これが俺のやり方だ。それになこの世界を放っておく訳じゃない。何かあれば美琴と一緒に戻って力になってやる」

そう言ったマルク。

「最低ですわね・・・しかしお忘れですか？私はテレポーターですよ。こんな腕輪・・・」

黒子が自信たつぷりにそう言つと

「ほんまはわかってるんやろ。その腕輪は外部からの能力も遮断するんや。テレポートなんて出来へんで」

そう告げるディオ。

「・・・」

その事実やはり覚悟していたからなのか、拳を強く握りしめている黒子。

だが、そんな時

「何だか騒がしいと思ったら・・・何をしているの、白井さん」

そう言つて姿を見せたのは、黒子や初春と同じジャッジメントで先輩の固法美偉であった。

「固法先輩・・・」

驚いた表情を見せる黒子。

「とりあえず大体の話はわかったけど・・・無理矢理につてのはいけないわね」

そう言う美偉。

「それは悪かったな・・・だが、ずっと能力を封じておくつもりはない・・・それだけは言っておくぜ」

そう告げたマルク。

「マルク様の邪魔をするのなら・・・」

そう言い一歩前に出るリュウキ。

「武器を隠し持っていても私には無意味よ・・・それに私は争いに来た訳じゃないの」

「・・・こいつ」

美偉の発言に驚くリュウキ。

「美琴・・・なんなら条件をつけようか・・・俺達についてくれば・・・お前のレールガンとやらを強化してやるぜ」

「!?!」

マルクの言葉に驚く美琴。

「お姉さまのレールガンは完璧ですの。あなた方に強化などされなくても・・・」

そう言う黒子。

「私のレールガンに弱点があるとすれば距離だけど・・・ゲーセンのコインじゃ燃え尽きちゃうから」

「美琴のそれに耐えられる金属があれば問題解決だな」

美琴の言葉にそう告げたマルク。

「そんなものがどこにあると」

そう言う黒子を抑えさせる美偉。

「異世界なら・・・それがあるって言うの？」

そう聞く美琴。

「絶対見つかるとは言えないが、無いとも言えない。なんならお前が直接俺たちと一緒に世界を見て回れば早いんだけどな」

そう言い放つマルク。

「御坂さん、悩んでいるようなら私は後押しするわよ」

突然そう告げた美偉。

「固法先輩！お姉さまは・・・」

そう叫ぶ黒子。

「御坂さんは白井さんだけのものじゃないでしょ。それにこれで御坂さんがパワーアップ出来たら白井さんとしてもいいんじゃないかしら」

そう告げた美偉。

「いくら固法先輩の提案でも・・・お姉さまは・・・」

と、黒子がここまで言った時

「ごめん黒子、少しでも私行きたいって・・・思っちゃった・・・あんなに考えて答え出したのに。初春さんや佐天さんに何て言えば・・・」

そう告げる美琴。

「お姉さまが・・・お姉さまがそちらの殿方達と行くと決めたのでしたら、これ以上のひきとめは黒子のわがままになりますわね」

美琴に背を向けてそう言う黒子。

「黒子・・・」

「心配はご無用ですの。お姉さまがいない間私がレベル5の能力者

のように頑張ればよろしいんですから」

はつきりと言う黒子ではあったが、その声には少し別の気持ちが込められていた。

「ごめん・・・そしてありがとう黒子」

美琴の言葉に俯く黒子。

「お姉さま！お姉さまは常に強気であってほしいんです。それが黒子との約束です・・・」

そう言う他突然消えてしまった黒子。

「言うだけ言ってレポートなんて・・・と、御坂さんに渡すものがあるの」

と、美偉から渡されたのは黒子の姿をしたぬいぐるみであった。

「な、何で？」

と、不思議な顔をしていた美琴。

「すでに白井さんは決めていたのよ。貴方を送り出すことを」

「えっ」

美偉の言葉に驚く美琴。

「それよりもつつさの言動が先に出ちゃってこういう結果になった

けど・・・受け取っておきなさい」

そう言う美偉。

「黒子・・・そうだ初春さん達には・・・」

「それは私の方で何とかしておくわ。御坂さんは御坂さんに出来ることをしてきなさい」

「・・・はい」

笑顔を見せてそう返事をした美琴。

「もうええか？そろそろ行きたいんやけど」

そう告げたディオ。

「あとをお願いします。黒子達の事も」

「ええ、任せておきなさい」

そして、ディオによって開かれたゲート。

「それじゃ行くぜ」

先頭でマルクが飛び込み、あとに続く仲間たち。

「最後にこれを・・・通信カードです。何かあったときにメッセージを・・・この通信は世界を越えて届きますから」

そう言って通信カードを美偉に渡すマリアン。

「ありがとう。御坂さんをよろしく」

「はい」

そして、マリアンと美琴もゲートをくぐっていった。

そんな中、少し離れた場所に初春と佐天がいた。

「これで・・・良かったんでしょうか・・・」

そう考える初春。

「御坂さんが出した本当の答えがそれなら・・・私達も白井さん同様に後押ししかないでしょ」

そう言う佐天。

そして、ゲートが閉じしばらくして後ろを向いた美偉。

「もう出てきていいわよ。でも、どうして止めなかったの？」

と、物陰から姿を見せたのは上条当麻だった。

「別に御坂とは・・・追っかけ回される関係だけだったし・・・それにあいつはその道を選んだんだ・・・誰にも文句は言えないよな」

そう告げる当麻。

この場にいたメンバー達は、それぞれ何かを思いながらこの場から去っていった。

そして、新たな世界で美琴の活躍も始まっていくかもしれないのであった。

第10話：とある初日の御坂美琴

御坂美琴のいた世界から戻ってきた日の翌日。

美琴は城下町にある家の中で起床した。

「そう言えばここは別の世界だったわね．．．つい黒子が引っ付いてないか警戒してたわ．．．」

そんな事を言いながら身体を起こす美琴。

と、その時

「美琴、もう起きてるんか？」

そう言ってゲートを通り上からディオが顔を覗かせた。

だが、その直後に美琴の全力渾身による枕投げを顔に受けてしまっていたが．．．。

「あんたにはデリカシーとかないわけ？またいきなり．．．」

顔を赤くしてそう言い放つ美琴。

「もう仲間やしな」と．．．

そう告げるディオ。

「で、一体何用よ。ただでさえ能力封じられていつもの調子でない

のに」

「マルクがまだ城下町の人数は少ないから、食事ぐらい城の方で・
・ちゅうわけや」

そう説明するディオ。

「・・・わかったわよ・・・着替えたら行くから」

「ほな、ゲートは残しとくからな」

それだけ言っただけでゲートの中に消えていったディオ。

「完成された超電磁砲か・・・」

着替えながらそんな事を考える美琴。

実際に美琴自身、ここに来るきっかけとなった項目であり、それイコール今より強くなると言うことなのである。

着替えも終わり、ゲートを通ると城の大広間に降り立った美琴。

「あいつの能力・・・黒子以上に凄いものね・・・」

ちよっと感心してしまう美琴。

「昨夜はゆっくり休めましたか？」

と、姿を見せたマリアンが美琴にそう告げた。

「マリアンさんは初めからここにいるんですか？」

マルク達が集まっている食堂に向かう途中で、美琴はマリアンに質問をした。

「そうですね。詳しく話すと長くなってしまいますから・・・簡単に答えるとYESですよ」

そう告げたマリアン。

そんな話をしているうちに、二人は食堂へとたどり着いた。

「とりあえずは昨日ぶりだな美琴」

そう言ってきたマルク。

「マルク様・・・今は食事の時間ですから、お話は後程に・・・」

そう言ったマリアン。

「何だか一番大人みたいな感じね・・・」

そう思う美琴。

そして、美琴を加えての朝食も終わり今後の事についての話をすることになった。

「シエル、もう次は行けるのか？」

そう尋ねたマルク。

「もうすでにな・・・だが、次もかなり手強い・・・色んな意味でな」

そう告げたシエル。

「では、準備の後すぐに出発ですねマルク様」

そう言ったりユウキ。

だが、その時

「勝手に話を進めないでよね。私だって今はこの中の一人なんですよ」

そんな風に言った美琴。

「つまりはどうしたいんだ・・・美琴」

そう言うマルク。

「私もいくわよ。あんた達がやり過ぎないように見となくちゃいけないでしょ」

そう言い放つ美琴。

「能力が一切使えない状態でもか？」

「・・・」

マルクの言葉に無言になる美琴。

「マルク・・・」

そんな中ディオが何か言おうとしていると

「冗談だよ。仲間になった以上は特別なことがなきゃどんな意見でも言ってきていいぜ」

そう告げたマルク。

「決まりね」

そう告げる美琴。

「ではディオはシエルと共に次の世界の情報を頼んだぜ」

そう言うとい時解散したメンバー。

「準備と言っても特に皆さん変わらないんですけどね」

そう言ったマリアン。

現在美琴は、家に戻る必要もないのでマリアンの自室に来ていた。

「何だかマリアンさんがみんなの世話してるみたいですね」

「マルク様に関しては・・・お任せされていますから・・・リユウキはマルク様の側近ですし、ディオ君はマルク様とは友達みたいなものですからね」

マルクと周りの人達の説明をしていくマリアン。

「でも、マルクってどうして他の世界にまで行って仲間を・・・」

「それは・・・追々わかると思いますよ。美琴さんにも」

そう言い微笑んだマリアン。

そしてメンバーはその後に集合した。

「何だ？今回はいくのか、シエル」

「ああ、この前の世界とは違うから・・・彼女に使ったリングも使えない相手だぞ」

そう告げるシエル。

「まあ仲間にしにくい奴ほど強いやつって言うことだろ」

マルクがそう言う

「だいいですがね・・・」

そう呟いたシエル。

「ほな、そろそろゲート開くで。放つとくといつまでも話続きそうやしな」

そう言いながらディオは異世界へのゲートを開いた。

「じゃあ、二つ目の世界に出発だ！」

そんなわけで美琴をパーティーに加え、マルク達は異世界へと向かっていったのであった。

第11話：平和な世界に流れる力（1）

「で、ここって一体何の世界なわけ？」

次なる世界に到着した直後、そう聞いた美琴。

「それをこれから見ていくんだろ」

そう言うマルク。

「しかしマルク様…目の前に…」

マルク達が降り立ったのはこの世界にある学校の前だった。

「小学校みたいね…で、この世界の重要人物が小学生ってわけなの？」

なんだかやる気がなさそうに言う美琴。

「さあな、とりあえずゆっくり調べていこうか…マリアン」

「はい、すぐに建てられるスペースを見つけて…」

そんな訳で、一度この場を離れるマルク達。

そんな中、この小学校では昼休みを迎えようとしていた。

「…気のせいかな…」

昼休みに入って窓の外をじっと眺めていた一人の女の子。

「どうかしたんですか？さくらちゃん」

そう話しかけてきたもう一人の女の子。

「うん、授業が終わる少し前に変な力を感じただけ……」

そう告げた、さくらと呼ばれた女の子。

「また何か起きているのでしょうか？でも、さくらちゃんはクロウカードを全て自分のカードにしましたし……エリオル君もイギリスの方に帰られたんですね」

「ともよちゃんの言う通りなんだけど……」

と、そんなさくらとともによの所に現れた一人の少年。

「一応警戒はしておけよ、さくら」

「小狼君……小狼君も感じたの？」

そう聞いてみるさくら。

「一瞬だけだったが……特別な魔力だった……クロウ絡みでは何も起きないはずだしな」

そう言う小狼。

「後でケロちゃんとユエさんにも聞いてみるね」

そう決めたさくら。

そして、こちらはマルク達。

「それで今日の予定はどないするんや？もう、こっちやと夕方になってもうとるけど」

そう告げるディオ。

「美琴とディオでこの街の調査を頼めるか？」

「で、何で私も…しかもディオと…」

美琴がそう言う

「ディオの能力が凄いのはお前もよく知っているだろ…後は、相性だよ」

そう告げたマルク。

「なら、私もついていくことにしようか」

そう言ってきたシエル。

「何や、シエルもいくんか？」

「俺的なポジションは発明家や研究員みたいな感じだしな…俺もこの世界には少し興味があるかもしれない」

そう言うシエル。

「なら、三人で頼む」

そんな訳で、この世界のこの街を調査することとなったディオ・シエル・美琴の三人。

「と、言うかシエルって前線って出れるわけ？」

そう聞いた美琴。

「能力を封じられた美琴よりは少しだけマシくらいだな…」

「ああ、せや…美琴は感じてないんか？一段階封印解除してるんやで」

ディオにそう言われ手に力を込めて見た美琴。

すると、大きな力ではないものの手のひらに電撃がほとばしったのだった。

「いつのまに…」

美琴が驚いていると

「まだ何かあるかわからない世界だからな…ちなみにその封印の設定と解除はマルクと作った俺しか出来ない」

「一段階だけっていうのは最低限は自分で頑張れってこと？」

「そうやるな…せやけどシエルが付き添うって言ったからマルクも特に何も言わなかったんやな」

そう言うディオ。

そんな話をしながらディオ達は、一先ず最初にやってきた場所小学校の前にやってきた。

「人の気配があまりないわね…学校終わったみたいよ」

そう言う美琴。

と、懷から何か機会を取り出し操作しているシエル。

「何してるかって言うのか？」

覗き込んできた美琴に対してそう言ったシエル。

自分が何か言う前にそんな事を言われてちょっと驚いている美琴。

「美琴の世界じゃ当たり前だったかもしれないが、と、俺が調べている間にも神経を集中させて探ってみろ…ディオもな」

機械を操作しながらそう言うシエル。

「うーん…」

ちょっと困った表情をしながらも、精神を集中させてみる美琴。

「レベル1って言うっても能力使えるようになってるんやしな」

そう言うディオ。

「どうやらこの学校内にはもついないらしいな…ここから少し離れた場所に反応があるぜ…抑えているのかそんなに強くないがな」

そう告げるシエル。

「まだよくわかんないんですけど…私達の世界はそこら中に能力者だったから…その環境に慣れすぎてるってことなのね」

そう言う美琴。

「とりあえずゲート使って移動するんか？」

そう聞いたディオ。

「…やめておいた方が良さだろう…今は美琴の力も解除してある…ハウスにいるマルク達が特殊な結界で気配や力を探られなくなっただけ…ここはゆっくり行こう」

そんな訳でディオ達は、暗くなり始めている街中を歩きながら調査していくのであった。

第11話：平和な世界に流れる力（2）

「と、いう訳なの」

自室にて話をしていたさくら。

「妙な話やな・・・クロウ関係でもないのに不思議な力・・・」

そう告げたぬいぐるみのような生き物。

「どうしよう、ケロちゃん」

さくらにケロちゃんと呼ばれた生き物は、ケルベロス。

さくらをカードキャプターにして、散らばっていったカードを集めさせた封印の獣である。

今はぬいぐるみのような姿をしているが、本来はまさに獣のような姿になるのである。

「小狼の小僧も気付いてるんやろ・・・何かわからんけど警戒はしとくんやで、さくら」

「うん」

ケルベロスの言葉に頷くさくら。

その頃、一階のリビングにいたさくらの兄・桃矢とその親友・月城雪兎。

「・・・」

何故か無言の桃矢。

「やっぱりさくらちゃんが心配？」

突然そう言った雪兎。

「慌てさくらが帰ってきて、その直後にゆきが来れば何かあったと思うだろ」

そう告げる桃矢。

「ゴメン、もう一人の僕の事で桃矢は・・・」

「謝るな・・・あの時の約束を守ってくればそれでいいさ」

そう言いながら天井を眺める桃矢。

同じ頃・・・。

「またなんか調子が・・・」

そう呟く美琴。

「反応が近いから・・・能力を封じた」

あっさりとそう告げたシエル。

「で、どのへんなんや？」

尋ねるディオ。

「あの家から少なくとも三つだな・・・」

「三人つてこと？」

だがそのときシエルは、自分達の近くに魔力の反応があったことに気付いていなかった。

「お前達が昼間の力の正体か？」

「!？」

その声に驚き振り替えるとそこには小狼が立っていたのだった。

「ユエの作戦通りだな・・・」

そう呟く小狼。

「作戦つて・・・」

「どんな手段にしろ俺達がお前の仲間のあとをつけていることを予測してか？」

そう告げるシエル。

「少し違うけどな・・・」

そう言いながら剣と札を構える小狼。

「数はこつち有利なんやけどな・・・雰囲気的に不利っぱいな」

そう告げたディオ。

「ちょっとシエル・・・封印解除して」

小声でシエルに話しかける美琴。

「あまり大事にはまだしたくないが・・・」

だが、そんな行動を許す小狼ではなかった。

「何かしよつとすれば合図代わりの一撃を放つ。その意味は・・・
わかるだろ」

そう告げる小狼。

「ディオ・・・美琴・・・」

この状況にシエルは、手短に何かを二人に伝えた。

「ほな・・・」

「やるしかないわね」

睨み合う両者。

そして、最初に動いたのはディオだった。

「一発いくで」

と、ディオは目の前にホールを出現させた。

だが、その直後に小狼は上空に札で火を放っていた。

「ディオ、美琴」

シエルの言葉と同時に行動に出る美琴とディオ。

「このっ！」

美琴は弱めの電撃で宙の火を砕き、ディオはホールを使い小狼をホール内に入れてしまった。

「さくら！すぐ外や！」

家の中から聞こえてきたその声。

「俺としたことが・・・あいつの挑発に・・・」

そう告げるシエル。

と、窓を開けさくらがそこから飛び出してきた。

「リリース！そして、フライ！」

先端に星がついた杖を持ち、一枚のカードの力を発動させるとさくらの背中に羽が現れ宙を舞った。

そして、これらの魔力を感知して表情を変える雪兎。

「ゆき……」

「うん……桃矢はここに……」

そう告げると立ち上がる雪兎。

「ディオ、引くぞ」

そう言ったシエル。

「なんや、えらいグダグダやなつと」

と、ディオ新たなホールを宙を舞うさくらの真上に開いた。

そして、ホールから落ちてきた小狼は……そのままさくらと接触。

「ほえっ……」

いきなりの出来事ということも相まって、そのまま一緒に落下していくさくら。

「ディオ……やりすぎじゃ……」

そう思ってしまう美琴。

大地に落下した二人は衝撃の影響で目を回していた。

「何しとんねや、さくら」

窓から飛び出してきたケルベロスは、真の姿となりシエル達に向かっていく。

「させないわよっ」

少し強めの電撃で、ケルベロスを弾き飛ばした美琴。

「美琴の電撃もやりすぎやろ・・・」

「ディオ、急げ」

シエルに急かされ、退避するためのホールを開くディオ。

「ここで捕まえる」

と、今度は長い銀髪の青年がディオにその腕を伸ばしてきた。

「もう、面倒やな!」

と、周囲にいくつものホールを作り出したディオ。

「!?!」

この状況に警戒したのか動きを止める銀髪の青年。

そしてその間にシエル達は無事に退避することに成功したのであった。

第12話：二度目の対峙

さくら達と接触したディオ達は、何とかその場から脱出しマルク達の元へ帰ってきていた。

マルク「随分とあわててるな…よほどの相手だったのか？」

そう聞いてきたマルク。

ディオ「まあ、色々とやな…」

美琴「大体こそこそするのが何かいやなのよ、やるなら正面からいけばいいのよ」

そう言った意見を述べる美琴。

リュウキ「我々はこの世界の人間じゃない…それにこんな話を信じるとすれば、それは普通の人間じゃないだろうっからな」

マルク「…美琴の意見も一理はある…お前の世界じゃ裏で動いてみたが…今回は表から動いてみるか」

そう決断するマルク。

マリアン「よろしいのですか？まだ向こうの人達の事…」

マルク「何とかなるだろ…それに俺もこの目で相手の力を見ていた方がいいだろ」

ディオ「こうなるとその目的しか頭がないしな、マルクは」

そう告げるディオ。

リュウキ「では、今度は私も付き添いますマルク様」

マルク「明日のこの時間ぐらいに向かう…準備はしておけ」

そう言う事で今日の行動を終えさせるマルク。

同じ頃…さくら達はというと。

ケルベロス「一体何やったんや、っていうか何で捕まえへんかったんやユエ！」

そう叫ぶケルベロス。

ユエ「あの力は危険だった…転移系の力のようだったが…」

桃矢「とにかく家に入れ。そんな姿で外にいたらあれだろうが」

と、家の中からみんなを呼ぶ桃矢。

すると、ケルベロスは仮の姿へと戻っていった。

ケルベロス「ユエはさくらと小僧を部屋に連れて…」

と、ケルベロスが言い終わる前に二人を抱えてユエはさくらの部屋へと向かった。

ケルベロス「って、またんかい！」

慌てて後を追うケルベロス。

桃矢「今の俺には…何の力にもなれない…だから頼んだ…ゆき」

そう呟く桃矢。

そして…さくらの部屋では…。

さくら「ごめんね、ケロちゃん…ユエさん。あと、小狼君」

とりあえず謝るさくら。

ケルベロス「それは済んだ事や…これからやらなあかんのは…」

ユエ「次に奴等と出会ったときだな…」

そう告げるユエ。

小狼「この中じゃケルベロスが一番さくらと一緒にいれるんだ…向こつも学校の時間帯に無理やりは来ないだろうから…」

ユエ「どちらにせよ誰かが警戒をしなければならぬ」

さくら「私も自分自身ぐらいは守れるように頑張るから、絶対大丈夫だよ」

ケルベロス「ほな学校は小僧に任せる。さくらも学校が終わったらすぐ戻るんや」

さくら「うん」

そして…時は翌日…。

さくらはいつものように学校生活を送っていた。

知世「私の知らない所でそんな事があつたんですね」

そう言ったのはさくらの親友である大道寺知世。

ちなみに知世はさくらがカードキャプターをやり始めたころからその事を知っている人物である。

小狼「ケルベロスは今どうしてるんだ？」

さくら「街中を調べてるって言ってたけど…何か見つかるのかな」

知世「さくらちゃん、私に何かできる事がありましたら遠慮なく言ってください」

さくら「知世ちゃん…」

知世「さくらちゃんの為に創作した素晴らしいお洋服を着て久しぶりにビデオにおさめなければいけませんわ」

小狼「…相変わらずだな大道寺は…」

意識が別世界に行っている知世に少し呆れている小狼。

そして、学校の授業も終わりに近づいてきた時間。

マルク「準備は出来てるか？」

リュウキ「こちらは問題ありません」

ディオ「ウチと美琴もオッケーや」

マリアン「マルク様もみんなもあまり無茶はしないようにお願いしますね」

マルク達にそうお願いするマリアン。

シエル「こういう風な展開になるかわからないが…美琴が鍵になるかもしれないな」

美琴「別世界の私にあまり期待しないでほしいんだけど」

美琴がそう言つと

マルク「俺達だってこの世界からすれば別世界の人間だ…関係ないだろ。じゃあ、行くぞ」

マルクの言葉で出陣するメンバー達。

そして、こちらはさくら達。

小狼「本当にいいのか？」

さくら「家ならケロちゃんもいるし、お兄ちゃんと一緒に雪兎さん

も来るだろうから…」

知世「もしいらっしゃるのでしたら一度家に帰られてからの方がよろしいと思いますわ」

小狼「わかった…ケルベロスだけに任せるのはちょっと心配だけど…気をつけるよさくら」

そんな訳で一度小狼は家に戻るために二人と別れた。

知世「私も一度家の方に戻りますわ。さくらちゃんのお洋服とビデオを持ってきませんと」

さくら「あはは…」

一度木之本家まで行った知世はケルベロスにさくらを託すと自宅へと戻っていった。

ケルベロス「あのとき感じた力が感知できんのや…とりあえずユキウサギ…いや、ユエがここに来るまで家の中に…」

マルク「せっかく客人が来たんだから…少しぐらいの雑談は有りじゃないか？」

そう言っつてマルク達がさくら・ケルベロスの前に姿を現したのであった。

第13話：さくらからの試練

ケルベロス「接近しとったのに気付かへんかった!？」

さくら「私も全然…」

二人が驚いていると

マルク「別に俺達は特別な力を持っているわけじゃないしな…デイオや美琴は別だが…それも力を使ってなければ感じ取れないだろ」

シエル「美琴に関しては現在能力を封じているから元々感じ取れないがな」

美琴「すっかり現状の能力状況になれてる私って…」

少々涙目の美琴。

さくら「ケロちゃん…今から雪兎さんの所に行って知らせてきて」

小声でケルベロスに用件を伝えるさくら。

ケルベロス「何言ってるのや…まだ小僧も来とらんのや…さくらを一人には…」

さくら「私なら絶対大丈夫だから…お願いケロちゃん」

ケルベロス「…絶対に絶対やで!」

そう言つと一目散に飛んでいったケルベロス。

それを静かに見送っているマルク。

さくら「追わないんですか？」

さくらがそう尋ねると

マルク「俺的に興味があるのはお前だしな…情報をみると…」

さくら「貴方達の目的って何？」

マルク「さっき言つただろ…と、詳しくは話してないか…俺はお前が欲しい」

さくら「ほえ…って…」

いきなりそんな事を言われて驚いて何が何だかわからなくなっていたさくらだが、あとになってその意味を理解した。

さくら「私が欲しいって…」

リュウキ「正確には貴方の力を貸していただきたい…そう言つ事です」

美琴「ディオ…あんな子まで…本当にやるつもりなの？」

後ろ側にいる美琴は小声でディオに尋ねる。

ディオ「ウチには何も言われへん…マルクの決定は絶対やしな…」

いつもの明るい感じでそう告げるディオ。

シエル「大体の答えはわかっているが…貴方の答えを聞きたい」

さくら「……」

しかし無言のままのさくら。

と、その時

小狼「火神招来！」

その声と共にマルク達にはなれた炎。

リュウキ「マルク様！」

と、飛び出したリュウキが装備している剣で炎を真つ二つに切り裂いた。

さくら「小狼君と知世ちゃん」

知世「これは一体どういう状況になっているのですか？」

小狼「離れるさくら！」

小狼も剣を構え、今にも戦いを始めそうな雰囲気を出していた。

ディオ「…二つやな」

突然そう呟いたディオ。

すると、上空から銀髪のユエと真の姿になったケルベロスが飛び込んできたのだった。

ケルベロス「すまん、遅なっただわ」

ユエ「また会ったな…」

鋭い視線を送るユエ。

シエル「全員揃ってしまったようですな、マルク様…」

美琴「で、どうするわけ？この状況で…」

マルクに聞く美琴。

さくら「みんな、少しだけいい？」

さくらはケルベロス達、そしてマルク達にそう言った。

ケルベロス「どないしたんや？さくら」

さくら「あの人達とさっき少し話した事…みんなにも知っておいてもらいたいから」

そして、さくらはその事をケルベロス達に話した。

ケルベロス「そんなのあかんやろ！」

ユエ「さくらは我らが主…連れていかれては困るのだが…私にとっても…仮の姿にとっても…」

知世「さくらちゃんがなくなるなんて…」

小狼「あいつ等…」

各々の気持ちをしっかりと確認しているさくら。

さくら「みんなの気持ちはわかるよ…クロウさんのカードばらまいてカードキャプターになってから色々大変だったけど…でもこれで良かったと思う…クロウカードも自分のカードにして…」

ケルベロス「何が言いたいんだ…さくら…」

さくら「あの人達は私の力を望んでる…私の魔力を、私のカードの力を…」

ユエ「主さくら…お前はその者達の所に行く…そう言っているのか？」

小狼「さくら！」

みんなが見守る中、マルク達の方を向くさくら。

マルク「そう言う答えで良いのか？」

さくら「私で役に立てるならそうしたい…誰かの為に動けるなら私のカード達も…でも…私は…私達はまだ貴方達の事を何も知らない」

ディオ「で、どうするんや？」

さくら「私からの試験って言うか試験？かな…それで見極めたいの」

マルク「年は下の方でもその心は大人のようだな…それで、お前の試験…どうすりゃ合格出来る？」

さくら「私に触れる事が出来たら…で、どうかな…」

美琴「でも、それって…」

美琴はディオの方をちらつと見た。

マルク「俺とさくらだったか…お前の一騎打ちか？」

さくら「何人でも…その代わりこっちも小狼君、ケロちゃん、ユエさんも参加するよ」

リュウキ「チーム戦的な事か…」

ディオ「せやな…シエルは戦えへんし人数は4VS4でええんとかやうん」

ケルベロス「人数は一緒やけど…こっちの方が不利やろ…」

さくら「もう一つ…制限時間は丸一日…今度の土曜日の夕方から開始…そして、小狼君達は私が必要とした時しか参加しない…」

小狼「そんな不利すぎる条件…」

さくら「ごめんね、でもこれは私にとっても試練になるから…」

その瞳は揺るがない決意がたぎっていた。

ユエ「主の意思は固い…なら主に従うのが…」

ケルベロス「ユエ…」

マルク「なら、その日まで待機だな…楽しみにしてるぜ」

そう言うとマルクはディオに合図してゲートを使いすぐにこの場から立ち去っていったのだった。

小狼（さくらは…最初からあいつ等と一緒にいくつもりなのか…だ
としたら…俺は…）

さくら「…」

そんな中、さくらは爽やかな表情で空を見上げていた。

さくら「よし、頑張るぞっ」

思い切り意気込むさくら…そして…。

第14話：永い永い試練のスタート

割と何事もなく土曜日を迎えたこの世界。

マルク達は準備を終え、出発する直前だった。

そして、木之本家では…。

桃矢「…」

さくらと向かい合っている兄である桃矢。

さくら「あのね、お兄ちゃん…」

桃矢「俺は心配なんかしてないぞ。怪獣さくらなら心配するだけ無駄だからな」

さくら「なっ、さくらは怪獣なんかじゃ…」

さくらがプンスカしてそう言うと、そつと桃矢がさくらの頭に手を置いた。

さくら「お兄ちゃん？」

桃矢「お前が納得いくようにやってこい…それならゆきの奴も納得するんだろ」

そう言う手をとける桃矢。

さくら「…じゃあ、行ってきます」

そう言い外へ駆け出していったさくら。

その様子を二階のさくらの部屋から眺めているケルベロス。

ケルベロス「さくらからルールの詳細聞いてびっくりや…ほんまに…なんやな…さくら」

そう呟くケルベロス。

そして、さくらは知世の家へと向かっていた。

知世「お待ちしてましたわ。準備も万全で…」

と、知世の手にはさくら用のコスチュームが握られておりその隣には小狼の姿もあった。

さくら「小狼君…」

小狼「…」

知世「それではあの人達が来る前に御着替えを済ませちゃいましょう、小狼君はこちらでお待ちくださいね」

そう言うと部屋を出ていったさくらと知世。

小狼「もしさくらがあいつ等と一緒に行く事になったら…俺は納得できるのか…」

そんな事を考える小狼。

マルク「ん？」

と、木之本家へとやってきたマルク達はその場にいたケルベロスを見つけた。

ケルベロス「待合場所が変わったからな、案内するからついてこいや」

それだけ伝えると飛んで行ってしまうケルベロス。

美琴「何か態度悪いわね……」

ディオ「まあ、仲間がかかつとるしな……ほな、追いましょか」

そんな訳で、ケルベロスはマルク達を大道寺家へと連れてきた。

大道寺家の家の前で向かい合うさくら達とマルク達。

マルク達がやってくる間に、雪兎も合流し今はユエの姿になっている。

さくら「あの後準備が出来たのもう一度ルール説明を……」

さくらは詳細を説明した。

マルク「金色のカードでケルベロスが助っ人に、銀色のカードでユエが助っ人に、銅色のカードで小狼が助っ人にか……それぞれ1時間まで……本当にそんなルールで良いのか？そっちも手加減無しで構わ

ないが」

そう言うマルクであるが、さくらはそれをお願いしますとそう告げた。

リュウキ「マルク様…」

ケルベロス「主であるさくらに従うのがウチらやしな…とりあえず今から10分…さくらには逃げ隠れする時間を与える。それぐらいはしてもらわんとすぐ終わってまうやる」

マルク「ああ、それは構わない」

そして、マルク達にはさくらを見ないようにしてもらいさくらは【^{フライ}飛】のカードを使い飛び立っていった。

ケルベロス「カードを使えばすぐに魔力で伝わるようになってるとはいえ…見守ることすら出来へんのか…」

ユエ「さくらを追うのは簡単だ…だがそれは相手にさくらの位置を知らせるのも同然…」

知世「せっかくのチャンスなのに…」

少々残念そうな知世。

マルク「じゃあ、俺達も出陣と行くか」

そう言いながら歩み始めるマルク達。

ケルベロス「小僧と知世は背中に乗りい…やっぱりじつとはしれられへんわ」

ユエ「…それは私も同じだな」

そう告げると共に高く宙を舞うケルベロスとユエ。

そして、こちらはさくら。

すでに飛行は終えており、出来る限り魔力を外に出さないようにしていた。

さくら（…街から離れることになるのはわかってたから…後は…）

さくらがそんな事を思っていると

ディオ「このへんにおるような気がするんやけどな」

と、ディオの声が何処からか聞こえてきた。

周りは自然に囲まれており、その茂みに潜んでいたさくら。

さくら（…私の魔力を追って…でも、どうしてこんなに早く…それにここに着いてからは魔力を抑えてたのに…）

不思議に思うさくら。

美琴「ディオ、マルクは何処まで私の能力制限を解除してるのよ」

ディオ「１段階ぐらいやろ…一応マルクの作戦もあるんやしな」

さくら（作戦…そういえば他の二人の気配がない気がするけど…）

と、その時さくらの背後にあった木に小さな電撃が命中した。

さくら（！？）

美琴「能力が多少なりとも戻ってるから…その力である程度は探れるの…こんな所で電撃やっていると燃やしちやいそうだから…出てくる事を勧めるわよ」

そう告げた美琴。

と、美琴の言葉を受けて星の杖を構えたさくらが二人の前に姿を現したのであった。

第15話：開戦！マルクの狙い

さくら「ケロちゃん達も凄いけど、異世界の人達って凄いね」

感心しているさくら。

美琴「で、どうするわけ？ディオ」

ディオ「どうもこうも…マルクのやるようにや」

そう言つとさくらの前に立つディオと美琴。

さくら「絶対に負けないもん」

そう言いながらさくらは一枚のカードを取り出した。

さくら「ウインディ風！」

さくらが星の杖で風のカードに触れると、出現した風の精霊。

その力は素早く美琴とディオ目がけて飛んできていた。

美琴「何、これ…」

身動きが取れなくなる美琴。

しかし、ディオはと言うといつの間にか空間にホールを残していなくなっていた。

美琴（最初にこの条件でやるって言った時…ディオがいればすぐ終わるって思ったのよね…つまり…）

風のカードに捕まりながらそんな事を考えていた美琴。

そして、さくらの頭上に開かれたホール。

ディオ（マルクには悪いんやけど…これで成功なら…）

だが、その直後鋭い衝撃がディオを襲っていた。

ディオ「なっ!?!」

そして、そのまま横に飛ばされ木にぶつかったディオ。

さくら「あう、やりすぎたかな」

ちょっと心配な表情を見せるさくら。

ディオ「今の…美琴の電撃みたいやったな…」

さくら「これ、雷サンダーのカード…ちなみに貴方の力はケロちゃん達から話を聞いて理解してたから…きつとそう言う風に来るって…」

そう述べるさくら。

美琴「ディオの行動を読まれてた…」

さくら「ごめんね、私も本気でやらないとケロちゃん達に怒られちゃうから」

と、さらにカードを取り出したさくら。

美琴「ディオ、気をつけなさいよ！」

ディオ「動けへん美琴に言われたくないんやけどな」

そう言いながらさくらの動きに注目しているディオ。

さくら「^{スノウ}雪！」

さくらがカードの力を発動させると、ディオ達に向かって吹雪が放たれた。

美琴「って、何で吹雪！？」

ディオ「こんな事も出来るんかいな…せやけど流石に…ホールで防ぎきれへんで…」

いくつかホールを作り壁によつにしてはいるが、全てを防ぎきれず身体は吹雪の影響を受け始めていた。

さくら「しばらくしたらおさまるから…^{フライ}飛」

そして、飛のカードにより低空飛行しながらこの場を去っていったさくら。

美琴「いつの間にか私の拘束が消えてる…ディオ！私達をホールで…」

ディオ「ウチもそう考えとつたところや！」

そう告げるとディオは自身と美琴をホールの中へ取り込んだ。

そして、すぐ近くの吹雪の影響がない場所へホールを開き何とかさくらの攻撃から逃れることに成功したのだった。

ディオ「万能型の戦いやな…」

美琴「…」

ディオ「どないしたんや？」

無言の美琴を心配するディオ。

美琴「あの子…私がレベル5の力を使えたとして…勝てたかなって…」

ディオ「いつになく弱気やな…あの凄まじい超電磁砲レールガンやつたら…」

美琴「あの子にはまだまだ隠された力があると思う…マルクの作戦はわかるけど…甘く見てたら作戦も何もなくなるわよ」

美琴の話に何かを考えるディオ。

ディオ「なるようにしかならへんで…まあ、ウチらの最初の役目は終えたんやし…マルク達と合流しよか」

そう言うのと目の前にホールを開くディオ。

美琴「まあ、レベル5の能力を使えたとしても…あの子相手に本気でやれなかったと思うけどね…」

そして、ディオと美琴はマルク達のいる場所へとホールで移動していったのだった。

第16話：マルクの初陣

マルク「まあまあだったな」

戻ってきたディオと美琴にそう告げるマルク。

美琴「マルク、本当にあの子を仲間に入れるつもりなの？このやり方結局…」

マルク「こういうやり方にしたのは向こうだしな…ただ俺もそのまま向こうの提案に乗ったつもりもないしな」

ディオ「それはええんやけど…次はどうするんや？もう暗くなってるしな…」

すでに時は夜を迎えており、辺りは闇に包まれていた。

マルク「俺が出る…陰からのサポートはディオに任せる」

リュウキ「マルク様、サポートならば…」

そう告げるリュウキ。

マルク「お前は強いが…勝つことだけが勝負じゃないしな…行くぞディオ」

そう言うとマルクとディオは外へと出ていった。

マリアン「マルク王子は強引なんですから…」

シエル「本気の戦闘ならリュウキの右に出る者はいないだろうがな
…今はまだ大きく動く時ではない…それがマルク様の作戦だ」

美琴「…仕方ないわね…私は明日に備えて休んでおくから…」

そう言う奥の部屋に引っ込んでいった美琴。

そして…。

小狼「大丈夫か？大道寺」

知世「はい…ですが、さくらちゃんはどちらに行かれたのでしょうか」

ケルベロス「この暗闇やと見つけるのは困難や…それより小僧はともかく…」

背中の中を見せるケルベロス。

知世「家の方にはちゃんと連絡は入れてありますから、心配なさいないでください」

ユエ「どちらにしても飛び続けていられるわけじゃない…降りて交代で体力の回復をするべきだ」

冷静にそう判断するユエ。

ケルベロス「せやな…さくらも心配やけど…ウチらの主はそう簡単に負けへんわ」

そう言う訳で地上に降りる事にしたケルベロス達。

そして、暗闇の中…身を潜めているさくら。

さくら「…お父さんにはちゃんと話してなかったから心配してるよね…」

と、密かに兄・桃矢に渡されていたおにぎりを食べていたさくら。

だが、さくらは近くに人の気配を感じその動きを止めた。

さくら（あのディオさんって言う人の力…あの力があれば私の魔力を追って近くまで来ることは可能だよね…）

隠れている場所からじつと様子を伺うと、そこにはマルクが立っていた。

マルク「この辺りで良いか…」

と、マルクは懷から丸い何かを取り出した。

さくら（なんだろ…ボールじゃないし…）

マルク「吹き飛ばせ！」

そう言うつと丸い何かを投げ飛ばしたマルク。

さくら（吹き飛ばって…）

とっさに杖を持ち行動に出ていたさくら。

さくら「^{シールド}盾」

カードの力を使うと、マルクが投げた先にシールドを展開し防いだ。

さくら「…あれ？」

特に何も起きず不思議がっているさくら。

マルク「1vs1で向き合つのは初めてだな…」

さくら「…もしかして今の…」

マルク「爆弾とかって思ったか…これはおもちゃだ…お前を呼び込むためのな」

そう言つと今度は小刀のような武器を取り出したマルク。

さくら「それが貴方の本当の武器…」

マルク「お前の武器も見せてもらったからな…こいつが俺の…【変幻刀】と言つ」

そう説明したマルク。

さくら「戦つ覚悟は出来てるよ…」

星の杖を構えてそう言つさくら。

マルク「なら、行かせてもらっぜ」

変幻刀を構えさくらに向かっていくマルク。

小刀的な変幻刀は刀身が短い。

しかし、さくらは油断することなくとあるカードを取り出し発動させた。

さくら「劔^{ソード}」

振り下ろされたさくらの劔を変幻刀で上手くしのぐマルク。

マルク「リーチじゃお前が上か…けどな、何でこいつが変幻刀と
言うか…見せてやるよ」

と、前に向けて変幻刀を構えるマルク。

さくらが警戒しつつ見ている前で、小刀だった変幻刀はさくらの劔
と同じような劔状へと変化していったのだった。

第17話：二つの決意

さくら「武器が変化した…」

マルク「だからこそその変幻刀だ」

共に相手を見つめ動きを警戒していた。

マルク「いつでもいいぜ… かつてきな」

さくらに先攻させるような発言をするマルク。

マルク（あいつは攻撃も防御も… 恐らくは補助的なものも全て持っている… 正直 1 v s 1 じゃ勝てないだろうな…）

しかし、さくらも攻撃をしかけずこの均衡を保っていた。

マルク「このまま無駄に時間を過ごしたくないものだがな… まあ、お前… さくらか… さくらにしてみたら良い時間稼ぎだろうが…」

さくら「ケロちゃん達と約束はしたから… 一応… 例え結果がどうなっても私は全力でやるだけだよ」

マルク「全力で勝ちに… いや、丸一日逃げ切るってことか… なら… これ以上距離を詰めないなら話は出来るな… さくら」

そう言うマルクはいきなり変幻刀を元の小刀モードに戻した。

さくら「私を油断させる作戦なの？」

マルク「話をしたいのは本当だ…別に勧誘の話じゃない…俺もちまちましたやり方は合わないしな…」

さくら「でも…じつと動かないで気配を消しているけど…僅かに感じてるよ…貴方の仲間がいる」

ディオ（能力使ってへんのに…わかるんか…あの子は…）

マルク「心配ない…お前もあいつの能力はすでに知っているし…攻略法もあるんだろ…それにそう言う不意打ちで勝とうとも思わないしな」

さくら「?…でも、最初に来た時は…」

マルク「美琴とディオには様子見ってことで行かせた…出来る限り本気でな…まあ、あの場で簡単にさくらが捕まるようなら捕まえていたが…お前は上手く逃げ切った…」

さくら「それで…どうしたいの?」

静かに冷静に尋ねるさくら。

マルク「ああ…」

近くで隠れていたディオは二人の話が聞こえていた。

ディオ「マルクのことやからって思ってたんやけど…その通りやな」

そう呟くディオ。

と、話を終えたのかいつの間にかマルクはディオの元に来ていた。

マルク「戻るぞ…リユウキ達と話をする」

ディオ「ほんまにええんか？今向こうに戦力増やされたら勝てへんけど…チャンスやる？これから夜中やし」

マルク「必要はねえよ…それを今確認したからな…俺が仲間にしたと思うだけはある…力だけじゃなく精神もな」

じつとこつちを見ているさくらの方を向くマルク。

と、さくらは星の杖で【飛^{フライ}】を発動させ飛び立っていった。

そしてマルクもディオの能力ですぐに仲間達の元へと戻っていった。

時は夜中…日付はすでに変わっていた。

さくら「ケロちゃん、ユエさん、小狼君、知世ちゃん」

地上にいた四人を見つけ、空から降りてきたさくら。

ケルベロス「どないしたんやさくら…こんな所におったら…」

ユエ「何があった？」

すぐさまそう聞いてきたユエ。

さくら「あのね…」

先程マルクとの話の内容を聞かせるさくら。

小狼「その条件をさくらが受けたってどうか向こうが受けたのか」

驚いている小狼。

ケルベロス「何考えとるんや…楽勝で勝てるからって事か…」

ユエ「相手に関しては向こうの問題だ…だが、今詳しく知るべきは…」

さくらを強い視線で見ているユエ。

知世「さくらちゃんお一人で今日の夕方まで逃げ切るおつもりだったんですか」

さくら「うん…私が考えていた事…マルクさんはわかってたみたいだった…気のせいだと思うけど」

ケルベロス「向こうの考えもわからんけど、さくらもさくらや。夜中もサポートなしにやるなんて無茶や」

ユエ「ならば解散しよう…本当に向こうが仕掛けてこないのなら今は休息にあてるべきだ」

小狼「信用できるのか？あいつ等はさくらを連れていこうとしている奴等だぞ」

知世「私は許可をもらっていますから、今日はさくらちゃんの所に

お泊まりさせていただきますわ」

さくら「うん、いいよ知世ちゃん」

ケルベロス「せやな…夜明けまではこっちでさくらを守る…その後はお前に任せる、ユエ」

ユエ「わかった…」

それを了承すると飛び去っていくユエ。

小狼「気をつけろよさくら…俺も朝すぐに向かう」

さくら「うん、ありがとう小狼君」

そんな訳で不安が残る中自宅へと戻っていったさくら達。

そして、この話はこちらでも…。

シエル「だとすれば全面对決…」

リュウキ「よろしいですね、マルク様」

マルク「今から攻めにいったら俺達は悪人みたいなものだから…話をした通り…その限られた時間で勝負する…ハードルが高いほど手に入れた時の喜びは大きいだろ」

マリアン「本日も大変そうですね、私の仕事も…」

ディオ「戦わへんのに何かあるんか？」

マリアン「疲れた人達に癒しを与えるのも私の仕事ですから…」

そして、別室のベッドで横になっていた美琴も聞こえてきていた会話を耳にしていた。

美琴（……）

そして、静かな夜は過ぎていき…太陽が再び世界を照らし始めるのであった。

第18話：1時間

太陽が世界を照らし、朝を知らせてくれていた。

さくら「うーん…」

安心していたからなのかぐっすりと休めたさくら。

ケルベロス「何や…よく眠れとったみたいやな」

と、フラフラしながら飛んでいるケルベロスがそう言った。

さくら「ケロちゃん！？大丈夫…じゃないよね」

知世「おはようございます、さくらちゃん」

さくら「知世ちゃん、おはよう」

目を覚ました知世に挨拶を返すさくら。

ケルベロス「あいつ等を警戒して起きとったからな…ユエと小僧が来たら…ゆっくりと…休む…」

そう言いながら力尽き床に転がってしまったケルベロス。

知世「さくらちゃんと心配してずっと起きていらしたんですね」

さくら「もう…大丈夫だって言ったのに…」

さくらはケルベロスを抱えると、ケルベロス専用のハウスの中のベッドに寝かせた。

桃矢「おい、起きたなら降りてこい…父さんが朝食用意出来たってさ…」

さくら「あつ、うん」

そんな訳で知世を加えての朝食に向かうさくら。

同じ頃…。

マルク「今日の夕方…結果が出るな」

美琴「で、まだ動かないんでしょう…」

リュウキ「目的の時間まで自身を高める」

ディオ「しっかり準備せえへんとな…向こうは手強いで」

そう告げるディオ。

マルク「さて…どうなるか楽しみだな」

それから何事もなく数時間があったという間に過ぎていった。

ケルベロス「よっしゃ！全快や」

ゆっくりと休んでいたケルベロスはどうやら元気になったようである。

ユエ「そろそろ残り1時間になるな…」

小狼「いよいよか…さくら！」

さくら「うん…ここにもお兄ちゃん達に迷惑かけちゃうから…」

と、さくら達は静かに移動を開始した。

桃矢「…ゆき…」

そんなさくら達を見送る桃矢。

そして、マルク達の方でもシエルの発明によるエネルギー探知でさくら達の移動を確認するとさくら達が向かった先へとマルク達も行動を開始した。

知世「あの方達が来られたようですわ」

さくら達が学校のグラウンドにやってきていた。

ユエ「学校全体に特殊なエリアを形成した…関係者以外は入れないし中の様子にも気付かない」

さくら「ありがとう、ユエさん」

そして、そのエリア内に入り込んだマルク達。

マルク「気がきく事をやるみたいだな」

さくら「これ…使っよ」

残り約1時間…。

さくらは三枚の助っ人カードを発動させた。

美琴「あまり乗り気じゃないんですけど…」

シエル「今、能力の制限は全解除してある…久しぶりに暴れてくる
といいさ」

ディオ「まあ、サポートはウチがするから問題ないやろ」

美琴「何でディオとコンビになってるのかしらね…」

マルク「じゃあ、始めるかさくら!」

さくら「絶対負けないよ」

向かい合うマルクパーティーとさくらパーティー。

知世「それでは僭越ながら私が開始の合図を…」

そして、知世の合図と同時に全員が動き始めるのであった。

固まらないように別れる両パーティー達。

ディオ「ほな、全力やな」

美琴「まだ私達が相手する実力もわからないのに…ね…」

ディオ・美琴の前に立ちはだかるはケルベロスとユエだった。

ケルベロス「ここは自分がとめたる…ユエはさくらのサポートにも回ってくれ」

ユエ「そうしたいのだから…相手も二人…ならば先にこつちだ」

そして、こちらではリュウキと小狼が互いに剣を構え睨みあっていた。

リュウキ「覚悟はいいか？」

小狼「さくらの為にもここは通さない」

そして、次の瞬間には両の剣はぶつかり合っていた。

その間、両パーティーのリーダーであるマルクとさくらは中央で向かい合っていた。

マルク「こうするのは二度目だが…」

さくら「貴方の武器は前に見せてもらったし…驚かないよ」

マルク「変幻刀は応用がきく。見切ったつもりにはならない方がいい」

今回さくらは【剣】^{ソード}の力は使わず、星の杖のまま構えていた。

マルク「さて…俺達の元にたどり着ける仲間は…両者どれぐらいだ

ろくな
」

さくら「私はみんなを信じてる…そして、みんなも私を信じてくれる」

マルク「…変幻刀…【槍】」

と、マルクは変幻刀を槍の形態に変え構えるのであった。

第19話：譲らない想い

移動しながら距離を保ち、牽制し合うマルクとさくら。

マルク（さくらの力はまだ全て見ていない…遠距離戦も問題なくやれると考えておいた方が良さな…）

さくら（槍なら間合いを取りながら攻撃できる…なら私は…）

互いに相手の動きを見ながら、次の自分の動きを考えていく。

美琴「近付かせはしないわよ！」

辺りに放電し、ケルベロスとユエを近寄らせない美琴。

ケルベロス「あの姉ちゃん…サンダーのカード並みやないか」

ユエ「異世界にはまだ知らない物がたくさんあるようだ…だが…」

高く飛びあがるユエ。

ディオ「にがさへんよ」

と、空中に複数出現する時空の穴。

ユエ「ちっ…」

ケルベロス「攻防のバランスがとれてるやないか…こっちも協力してかからんな…」

そして、こちらは剣同士をぶつけあっているリュウキと小狼。

小狼（力は向こうが上だけど…）

小狼は炎や雷の力をうまく使い、リュウキと互角に渡り合っていた。

リュウキ（美琴とは違い俺は接近戦タイプだからな…中々攻めきれないか）

両チームの仲間達が戦いを繰り広げている中、マルクVSさくらの方も新たな動きを見せていた。

さくら「ファイヤー【火】」

先に仕掛けたのはさくらであった。

マルク「炎の力が…」

容赦なくマルクに放たれる火炎。

マルクは槍を回転させながら、炎をしのぎさくらに向かっていく。

さくら「ドリー【樹】」

地面から大きな樹が出現し、マルクを捕らえるべく動き出す。

マルク「変幻刀…双刀！」

と、槍からさらに変化し二つの小刀へと変わった。

さくら「二つにもなるの？」

マルク「だから見切ったつもりにならない方がいいと…いった！」

ウツドの枝を次々と切り裂いていくマルク。

さくら「だったら…」

ウツドの処理をしながらも、さくらの動きを見ているマルク。

さくら「【^{パワー}力】

と、自身に影響のあるカードを使い強化させたさくら。

さくら「これで…」

だが、その直後いきなり足元に攻撃を受けよるけるさくら。

さくら「えっ…」

そして、次の瞬間星の杖に衝撃がはしりさくらは星の杖を落としてしまった。

マルク「変幻刀…双長刀」

一本の刀が星の杖の前に突き刺さり、もう一本はさくらの胸元に突き付けられていた。

さくら「！？…さっきの攻撃…それに…」

マルク「色々聞きたい事はあるだろうがな…とりあえず俺達の事を認めとけ…それに大分移動したからな…仲間とも離れた…今なら言える事もあるだろうしな」

さくら「…」

マルクの言葉に無言となるさくら。

さくら「いつからって聞くのは変だよね…貴方達は私を仲間にしようとしている」

マルク「…お前は初めから俺達の仲間になる事を拒否していたわけじゃない…仲間の事を思えば多少はあるだろうが」

さくら「みんな私の為に頑張ってくれた…カードさん達も…小狼君やエリオル君も…ケロちゃん達も…私がここからいなくなったら…またみんなに頑張ってもらわなきゃいけないかもしれない…」

マルク「だから俺達の実力をはかるためにこれを提案した…これでお前が負ければ…か」

と、カードの効果が切れたのかさくらの強化能力が消えていった。

さくら「貴方の武器は私のカードさん達と同じ…たくさん種類がある…貴方は油断しないで、私がちょっぴり油断しちゃった…だから負けたのかな」

マルク「本気で仲間になりたくない奴だったら初めから本気で俺を潰しに来てただろうからな…そのちょっぴりの油断はその部分だ」

さくら「私達の決着はついたけど…みんなはまだ戦ってる…貴方も私の仲間も…貴方と私の為に必死になってる…」

マルク「お前の仲間も俺の仲間も…主思いつてやつか」

と、ゆっくり空を見上げるさくら。

さくら「いつの間にかもう制限時間近くなってたんだね…」

マルク「このままおしゃべりして時間潰すのか？」

さくら「そんなことしないよ…言ったでしょ決着はついたって…私の負けだよ」

マルクに対して笑顔を見せ、自身の敗戦を告げたさくら。

そして、マルクは変幻刀を元に戻し鞘に納めるのであった。

第20話：さくらとマルクと新たな出発

知世「みなさん、制限時間ですよ」

と、戦っている者たちに呼びかける知世。

ディオ「制限時間って…そんなのあったな…」

美琴「あんだね…戦いに集中しすぎて忘れてるんじゃないわよ…つて、マルクの姿が見えないけど…」

ケルベロス「さくらもや…どこまで行ったんや」

ユエ「心配はいらない…直に戻るだろうからな」

とある方角を見ながらそう告げるユエ。

ディオ達が戦いを終えた頃……。

マルク「少し強くやり過ぎたか？」

さくら「私も【力】^{パワー}のカードで力任せに行こうとしてたし……それよりケロちゃん達なんて言うかな……」

それが心配になっていたさくら。

マルク「あれから一時間経ってるなら向こうも終わってるだろうかな……戻ろっぜ」

マルクにそう言われ、さくらは星の杖を星の鍵に戻すと仲間達のもとへ向かった。

リュウキ「マルク様！」

小狼「さくら！」

先程まで戦っていた二人が、即座に駆け寄った。

ケルベロス「なんや、怪我はないみたいでよかったな」

知世「それで勝負はどちらの勝ちになられたのですか？」

知世の質問に、リュウキや小狼達は無言でマルク&さくらを見た。

さくら「ゴメンねみんな、負け・・・ちゃった」

そう伝えたさくら。

小狼「さくら・・・」

ディオ「さすがやな、マルクは」

美琴「・・・決着ついたならとりあえず彼女を借りていくわよ」

ユエ「さくらをどうするつもりだ？」

美琴「手当てに決まってるでしょ。女の子の手当ては女の子がしてあげなきゃ」

小狼「それは・・・」

何故か顔を赤くしている小狼。

知世「でしたら私もお手伝いいたしますわ」

そんなわけで、裏の方へ消えていった美琴達。

マルク「今日は戻る。さくらはあとでディオに送らせる・・・それでいいか？」

ケルベロス「言いたい事は色々あるんやけどな・・・さくらが決めたことやし・・・」

マルク「なら治療が終わるまで待つてればいいさ。ディオ！美琴を頼むぞ」

ディオ「了解や、マルク」

そんな訳で、リュウキと共に行ってしまったマルク。

さくら「あの・・・ありがとうございます・・・」

美琴「本気でやりあったの？」

さくら「ほえ？」

いきなりそう聞かれて驚くさくら。

知世「それはどういう意味なのですか？」

美琴「マルクが女の子を傷つけるとは思ってたないけど、さくらは・
・」

さくら「そうだよね・・みんな頑張ってるのに・・でも自分の中にある気持ちを隠しきれなかったの。自分の力をもっと役立てられる場があるって知って・・」

美琴「・・・さくらは私と違う・・私は仲間から離れることを選べなかった・・」

さくら「とりあえず戻ろう、あんまり遅いと心配かけちゃうから」

そんな訳で元いた場所に帰るとケルベロス達とディオが待っていた。

美琴「あんたもいるのね・・」

ディオ「ウチがおらへんとすぐに戻られへんやろ」

小狼「さくら！怪我は・・」

知世「大丈夫ですわ。今のさくらちゃんは・・」

そう言いながらその表情はどことなく暗かった知世。

さくら「知世ちゃん・・」

美琴「さくら、また明日ね」

さくら「はい、今日はありがとうございました」

ケルベロス「なんでさくらがお礼を言うてるんや」

ユエ「では、私も明日家の方に来るとしよう…話をしないといけな
い人もいるからな」

そう言うと飛び立っていったユエ。

小狼「その人はさくらの…」

さくら「わかってるよ小狼君…私達も帰ろうか」

そんな訳でそれぞれ思い思われつつ、この場を離れていった。

そして、翌日…。

桃矢「…」

二階から聞こえてくる物音とさくらとケルベロスの話声に反応して
いる桃矢。

雪兎「やっぱり気になるよね、桃矢」

桃矢「別に俺は…」

そう呟く桃矢に

雪兎「ごめん、僕がしっかりしてないばかりに…」

桃矢「さくらが自分の意思で決めたことならそれはお前のせいじゃないだろ。それに力を失った俺には…」

そして、二階では…。

ケルベロス「…」

何やら準備をしているさくらを微妙な表情で観ているケルベロス。

ケルベロス「今日行くつもりなんか？」

さくら「もう決まったことだしね…雪兎さんも来てくれてるし…」

ケルベロス「まだ小僧は来とらんけどな…」

さくら「マルクさんや美琴さんと話をして…大丈夫だって思ったから…それに私の…クロウさんの力ももっともっと誰かの力になれるって…」

ケルベロス「最初から話してほしかったんやけどな…小僧やユエはともかく…」

さくら「ごめんねケロちゃん、でも…」

と、その時呼び鈴が鳴る音が聞こえてきた。

ケルベロス「小僧が来たんか？」

さくら「知世ちゃんか小狼君だよな」

とりあえず準備を中断して玄関に向かうさくら。

桃矢「…」

さくらが玄関の扉を開くと、そこに意外な人物がたっていた。

エリオル「お久しぶりですね、さくらさん」

さくら「エリオル君!？」

雪兎「あの子は…」

桃矢「まさかあいつまで来てるんじゃないよな」

スピネル「心配は無用ですよ、私が留守番をしてるように説得させてきましたから」

ケルベロス「お前はおるんかい」

さくら「でも、どうして…」

エリオル「さくらさんの大切な方から連絡を頂きまして…全ての事情も聞いています」

さくら「エリオル君…」

いきなりの事態でちよつと戸惑っているさくら。

エリオル「僕は構いませんよ…クロウカードは今やさくらさん専用のカードになりましたし、さくらさんがそう決めたのなら僕は異論

しませんよ」

さくら「…あつ…」

と、後ろに更に二人の姿が見えて思わず声を出したさくら。

小狼「ちゃんと気持ちの整理をつけなきゃいけないしな」

ケルベロス「小僧と知世も来たことやし、全員揃ったな」

雪兎「桃矢はどうする？」

桃矢「お前が見送ってくれりゃいい」

そして、さくらが準備を終えて荷物を持ってくると同時に外に時空のホールが開いた。

マルク「よう…って、全員集合か」

リュウキ「見知らぬ顔もありますが…」

エリオル「柊沢エリオルと申します。さくらちゃんとは同じような感じですね」

マリアン「事情はご存じなようですね」

美琴「昨日より良い表情じゃない」

さくら「みんなの事思うとそうでもないんですけど…」

ユエ「一つだけ誓いを立ててもらっ」

と、いつのまにか雪兎はユエになりマルクたちの前に現れた。

マルク「何だ？」

ユエ「私は桃矢にさくらを守ると誓った…お前がさくらを連れていくのならばその誓いも継いでいけ」

ケルベロス「ユエ…」

マルク「元よりそのつもりだ…仲間を蔑ろには出来ねえだろ」

知世「さくらちゃん、これも持っていてください」

さくら「カバンだよね…」

知世「色々と役立つものを入れておきましたので…例え遠く離れていても私達は友達ですわ」

小狼「さくら…」

さくら「いつになるかわからないけど戻ってくるから」

マルク「心配しなくても戻りたくなったらここにホール開けばいつでも帰れるし、何かあればさくら連れて駆けつけてやる」

マリアン「この通信カードを…」

小狼「大道寺がもっていればいい、俺も…日本に留まっているかど

「うかわからないからな」

「さくら」…」

ディオ「そろそろ戻るんやろ」

マルク「そうだな…さくら…準備は良いのか？」

さくら「じゃあ…みんな色々迷惑かけちゃったけど見送ってくれてありがとう」

ケルベロス「迷惑とか思ってないわ。さくらが帰ってくるまでこの世界ぐらい守れるしな」

エリオル「戻ってきた際には異世界のお話を聞かせてください」

小狼「俺はもっと強くなる…さくらが帰って来た時にびっくりするぐらいに」

さくら「うん、私も成長して帰ってくるから約束だね」

マルク「じゃあ、ディオ！」

ディオ「了解や！」

大きく広げられたディオの時空ホール。

仲間たちに見送られさくらはマルクたちと共にこの世界を離れていた。

スピネル「本当によかったのですか、エリオル。カードの主をこの世界から引き離しても…」

エリオル「この件で何かが起きるかは僕にもわかりません。ですが、これがきつかけでさくらさんが更に成長すればいいと思いますよ」

笑顔を見せながらそう告げるエリオル。

そして、マルク達はさくらを加え次なるストーリーへと歩んでいくのである。

* キャラ紹介* 超電磁砲／CCさくら

御坂美琴

とある魔術の禁書目録の登場キャラクターであり、とある科学の超電磁砲の主人公

レベル5のエレクトロマスターで、ジャッジメントではないが何度か悪い奴をやっつけている

同室の白井黒子、黒子のジャッジメントつながりで初春飾利、その友達佐天涙子とよく一緒にいる

上条当麻をライバル視しており、何度も挑むが…。

白井黒子

美琴と同室でお姉様として慕っている

レベル4のテレポーターで、ジャッジメントとして活躍している
性格的には少し危ない所も見受けられるが、美琴や仲間達とは上手くやっている

上条当麻

とある魔術の禁書目録の主人公で、超電磁砲にも登場している
生まれつき右腕に【幻想殺し】と呼ばれる力があり、異能の力を打ち消せる

ライバル視されている美琴のレベル5クラスの電撃も防げるため、挑まれては回避し続けている

初春飾利

黒子と同じジャッジメントに所属している

とはいえ黒子と違い、その仕事は外よりも中で発揮される
そちら側の仕事では上位レベルの力を見せる

原作では能力は明らかになっているが、この現在ではまだ未発表設

定です

佐天涙子

美琴達の仲間の中で唯一の無能力者

普段から明るく美琴に尊敬の心を見せているが、逆に無能力がコンプレックスになっていたりする

ある事件で能力を得るがそれにより友達を巻き込んでしまい、それにより能力より大切なものに気付いた

固法美偉

黒子や初春の先輩になるジャッジメント

レベル3の透視能力を持っており、美琴のような攻撃系の能力ではないが身体能力もそこそこあるので能力との併用である程度は戦える

木之本さくら

カードキャプターさくらの主人公

クロウカードをばらまいてしまったことにより、封印の獣ケルベロスによりカードキャプターとしてカードを集めることとなる

この現在では自身のカードをさくらカードに全て変えたあとの話であるため初期の頃より魔力値は高い

半ばマルク達の仲間に入る事を決めていながら試練と称してマルクと戦った

様々な属性を持つカードを扱えるため、応用のきく戦いができる

ケルベロス

クロウカードの守護者の一人で、さくらがカードの封印を解いたことにより外の世界に出てきた

大阪弁でしゃべり、普段はぬいぐるみのような姿をしているが本来の姿は封印の獣と呼ばれるに相応しい姿となる

月城雪兎／ユエ

さくらの兄・桃矢と同じ学校にかよる雪兎。しかしそれは仮の姿で本来はユエと呼ばれる守護者の一人で審判者
ケルベロスと比べるとクールな性格

さくらカードの一件で色々あるが、結局は普通の生活に落ち着いている

大道寺ともよ

さくらのクラスメイトで大親友

初期からさくらがカードキャプターをやっている事を知り協力している

半ば強引に自作の衣装を着せて、ビデオ撮影を行っている

歌がとても上手くその関係のクロウカードの影響を受けたこともある

木之本桃矢

さくらの兄。普段から魔力を持っていてさくらのやっている事も気付いていた

後に、雪兎の事情を知りとある約束と共に魔力を与えた

それにより今まで感じ取れていたものが感じられなくなった

李小狼

さくらのクラスメイトで、香港からやってきた

当初はさくらを敵視して、クロウカードを取り合う感じになっていたが

さくらがカードの主となってからは、協力している

クロウカード以外でも、護符による攻撃・支援が可能である

柊沢エリオル

イギリスからやってきたさくらのクラスメイト

その正体はクロウの生まれ変わりで、強力な魔力を持っている

さくら達に対して裏で事件を起こし、最終的にさくらにクロウカードを全て自分のカードに変化させた

この現在では知らせを受けてただやってきただけである

スピネル・サン

エリオルによって創られた従者

普段はケルベロスみたいな感じの姿だが、本来はこれまたケルベロスみたいな獣の姿となる

この現在ではエリオルについてきただけである

第21話：異世界の中の異世界の存在

いつものように朝を迎える。

違う所があるとすれば、前回仲間となった木之本さくらがいると言
うこと。

そして、そのさくらは美琴と同室で過ごしていた。

美琴「んつ…と、あれ…さくらは…」

目覚めた美琴は、部屋の中にさくらがいないことに気付いた。

マリアン「おはようございます、美琴さん」

美琴「あつ、おはようございます。あの、さくら見かけませんでした？」

マリアン「さくらちゃんなら食堂の方ですよ」

そんな訳で美琴も私服に着替えると、食堂へと向かった。

さくら「おはようございます」

と、朝食を作りながら挨拶をしてきたさくら。

ディオ「つまりそういうことやな」

美琴「なんであんたはマイペースなのよ」

マルク「マリアンが支度している時に起きて来たんだよ。向こうでも家事とかやってたから手伝うってな」

そう説明するマルク。

美琴「むっ……」

自分より年下のさくらの頑張りを見て何か悔しい気持ちになっている美琴。

シエル「朝から賑やかだな……こっちは眠いんだが」

マルク「次の世界……か？」

シエル「リュウキは特訓中みたいだしな、朝食時にそろってからでいいだろ」

それからしばらくして、さくらとマリアンの朝食の準備も終えリュウキも合流した。

ディオ「それにしても忙しいものやな……まあ、異世界なんていくらでもあるんやろうし仕方ないんやけどな」

シエル「今度の世界、また同行させてもらう。気になる事があるかな」

美琴「どういふことよ」

シエル「次の世界……その世界の中にさらなる世界がある……詳しい事

は行ってみないとわからんがな」

そう告げるシエル。

さくら「どんな世界かな…」

美琴「あんまり戦いとかない世界だと良いんだけどね」

リュウキ「鍛錬さえしていれば不測の事態にも対応出来る。軟弱なディオは無理だろうがな」

ディオ「そこでこっちに攻撃してこんどいてや…まあ、ええけど…」

マルク「さくらにとっては最初の異世界だ、美琴も付き添いで来てくれ」

美琴「私が断つても、ディオが無理やり連れて行きそうだから最初から行くわよ」

諦めた表情でそう言う美琴。

シエル「では、準備に入ろうか…」

マリアン「今回は私がお留守番をしておきますね」

マルク「ああ、すまないなマリアン」

そんな訳で朝食も終わり、一度解散したマルク達。

そして、再び集まる直前シエルは美琴・さくらの部屋にやって来て

いた。

美琴「いきなり部屋に来るからデイオかと思った…」

シエル「美琴に話がある…現実性がないから話しておくか迷ったが…」

さくら「？」

不思議な表情を見せるさくら。

シエル「お前の超電磁砲レールガンが次の世界で強化出来るかもしれないからな」

美琴「本当に？」

シエル「現実性はない…強い期待はしない方がいい…」

美琴「わかった。ありがとうシエル」

お礼を言う美琴。

シエル「そういう約束だったろうからな…あと、さくら…」

さくら「はい？」

シエル「美琴やさくらに限らず、これから仲間になっていくメンバー全員に言えることだが…マルクはお前達をより強くあろうとさせる。この世界に残る残らないに関係なくな」

美琴「私の場合は無理やりで、さくらは自分からこっちに來たんだけど…最終的なマルクの目的は何なの？」

シエル「さあな。恐らく誰も知らないだろう…と、そろそろ集合する時間だ…先に行ってるぞ」

そして、退室していったシエル。

さくら「…とりあえず行きましようか」

美琴「そうね、どういふ思いがあるにしろ…私達は私達でやっていけばいいんだから」

そんなこんなで、出発メンバーがそろいディオがホールを開いた。

マルク「それじゃ行くぜ」

そして、マルク達は異世界へと到着した。

さくら「いたって普通ですね」

美琴「うゝん…」

ディオ「どないしたん？」

美琴「マルク、今私少しぐらい封印解放してるんでしょ？」

マルク「ああ、念のためにな…何か感じたのか？」

美琴「なんだろ…何か私の力に引っかかる感じが…」

そう呟く美琴。

と、その時

『貴方達、一体何者なの!』

マルク「!？」

声がして辺りを見渡すマルク達。

すると、木の上に一人の女の子が立っていた。

リュウキ「…」

武器に手をかけていたリュウキは、その姿を見て止めた。

さくら「もしかしていきなり現れたのを見たんじゃない」

美琴「ありきたりだけどね…でも…」

と、美琴はわずかな電撃を一瞬放った。

その瞬間、何もない所から何かが飛び出し女の子がいる木の下に着地した。

ディオ「なんや、あの生き物は…」

さくら「狐さん？」

レナモン「留姫、私が隠れていた位置が見破られた…普通の人間ではない」

留姫「答えなさい、貴方達は何者？」

ディオ「どないするんや、あっちの生物もなにできよるかわからんし」

マルク「留姫だったか…俺達が答えたらお前も質問に答えてくれるのか？」

留姫「貴方達にそんな権限はないはずよ。私達が一番近くにいたからすぐに来ただけ…だから怪しい貴方達を逃すわけにはいかない、レナモン！」

と、何かを取り出し構える留姫。

そうするとレナモンが光に包まれていった。

レナモン「レナモン進化！」

キュウビモン「キュウビモン…！」

リュウキ「マルク様、ここは私が…」

剣を構え前に出るリュウキ。

キュウビモン「私も出来る限り攻撃はしたくない、ここは大人しく…」

マルク「先に仕掛けてきたのはそっちだしな…リュウキ、手加減してやれよ」

リュウキ「了解した」

そして、キュウビモンへ向かっていくリュウキ。

だが、次の瞬間

健良^{ジエンリヤ}「待って、留姫」

留姫「ジエン!？」

テリアモン「何とか間に合ったね」

美琴「別の人達が」

啓人「僕達もいるよ、留姫」

さくら「あっちからも…」

健良「戦っちゃダメだ、リアライズしたデジモンならともかく…」

留姫「でも…」

鎮宇^{ジャンユ}「遅くなつてすまない、直接現場を見たくてね」

山木「時空の乱れをキャッチしたが、デジモンがリアライズしたものと違ったからな…」

マルク「大勢登場だな…リュウキ、下がれ」

リュウキ「はい」

武器を戻し後方へと移動するリュウキ。

健良「留姫も…」

留姫「…戻ってキュウビモン」

留姫がそう指示すると、キュウビモンはレナモンへと戻っていった。

鎮宇「話を聞かせてくれないか？君達の事、何故この世界に現れたのか」

シエル「ならそっちも教えてくれるか？この世界の中にある別世界について」

山木「お前達の目的はデジタルワールドか？」

マルク「デジタルワールド…それが異世界の中の異世界か」

健良「父さん…」

鎮宇「話は場所を変えてしよう…この人数で道端で話をするわけにはいかないからね、山木君…」

山木「場所はこちらが提供しよう…迎えの車もすぐに到着させる」

そんな訳で、山木が用意した車に乗りとある場所へと連れてこられ

たマルク達。

だが、そんな中新たに二つの反応が出現している事にまだ誰も気付いていないのであった。

第22話：繋がり

マルク「まあ、簡単に説明するとそんな感じだな」

留姫「冗談じゃないわ。何で私達が！」

かなり怒っている様子の留姫。

シエル「にしても、これが元々データとはな…」

シエルは間近にいる啓人・健良・留姫のデジモン、ギルモン・テリアモン・レナモンを見ながらそう呟いた。

山木「今はこっちの…リアルワールド現実世界もデジタルワールドも彼等の活躍で平和を取り戻した」

鎮宇「健良達のデジモンも一度はデジタルワールドに帰ったんだが、向こう側からまたコンタクトを取って来て再び両世界の扉が開かれた」

美琴「私が何か引っかけたのはこのデジモンって言う存在だったのね…どう言う仕様がよくわからないけど」

そう告げる美琴。

テリアモン「でも、他の世界も面白そうだね」

レナモン「我々が興味を持ったとしても、留姫達は…」

啓人「そうだよね…」

山木「…他の世界では君達のような力を持った人間がいるのだな…」

マルク「俺はそんな力ないけどな」

鎮宇「ここから先の話は君達同士でやった方がいいだろうね」

健良「父さん…それって…」

鎮宇「自分で決めたのなら私は何も言わないよ…みんなはこれまで
もよくやってくれた…ワガママの一つぐらいは…」

と、その時山木の携帯に連絡が入ってきた。

山木「どうした？」

どうやら仕事関係者からの連絡のようだった。

山木「…」

電話を終えた山木は何やら無言になっていた。

鎮宇「どうしたんですか？」

山木「啓人君達、それと君達も…来て欲しい場所がある」

レナモン「何事ですか？」

山木「一つはリアライズ反応だ…だが、これから向かう所は不思議

な反応だったそうだが…君達が現れた少し前に感じたのと似たものだった」

山木の言葉に何かを考えるマルク。

マルク「行ってみればわかるんだろ…案内してくれ」

美琴「ディオ…何か知らないの？誰かが時空移動してきたって事じゃないの？」

小声でディオに尋ねる美琴。

ディオ「どないやるな…そう言うことならウチよりマルクの方が知ってそうやけどな」

そう答えるディオ。

そして、山木の案内でその場所…公園付近にやってきたメンバー。

ディオ「確かに似た感じやな…ウチの時空ホールと…」

と、公園内に突如出現した時空の穴。

そして、そこから現れた複数人の人物達。

リンク「おっと…これは意外な所に登場したみたいだな」

タイチ「一体どうしたんだって…いきなり目の前かよ」

ギルモン「感じるよ啓人！デジモンだ！」

健良「デジモン？」

と、マルク達の前に姿を見せたデジモン。

留姫「アグモン…テントモン…ブイモン…」

こうしろう「えっと…どうしましょうかリンクさん」

と、その時いきなりマルクが動き出し武器を取り出すと切っ先をリンクの首元に突き付けた。

タイチ「なっ!？」

リュウキ「マルク様!」

リンク「…」

無言で見合っているマルクとリンク。

マルク「久しぶりのくせして相変わらずだな…」

リンク「どちらかというと君より君のお兄さんのユーマとよく会ってたんだけどね」

と、武器を戻すマルク。

美琴「一触即発ばかったけど…知ってるの?」

リュウキ「ドリーム王国、国王であるリンク様です…マルク様の兄

…ユーマ様とはよく剣の腕を競われていました」

そう説明していくリュウキ。

さくら「別の国の…」

マルク「同じ世界内にある国なんだけどな…父さんの所から出て会わなくなってたんだ」

タイチ「俺達も初耳な話だけどな」

美琴「いきなり現れたけど、貴方達もマルク達みたいにいるんな世界を…」

リンク「そうだね、あまり昔の事を語るのは辛いんだけど…昔は自身の力を悪い方に使い…色々迷惑をかけたりもした…そこにいるデジモンを持つ彼等とかね」

そう言うリンク。

留姫「ちょっと待ちなさいよ。そんな話もよくわからないけど…何でパートナーデジモンを持った人が他にもいるのよ」

こうしろ「えっと簡潔に説明するとですね…この世界に通じているデジタルワールドと、僕達の世界から通じているデジタルワールドは別物の世界ということです」

健良「僕達が行ったあのデジタルワールド以外にもデジタルワールドが…」

アオイ「とにかくこんな所でこんな大勢で話してるのも迷惑だと思うけど」

と、こうしろの後ろにいた女の子・アオイがそう告げた。

山木「また色々話を聞きたいのだが…もう一つの件が残っている…」

と、再び山木に連絡が入り情報を聞いていった。

こうしろ「タイチさん、リンクさん…僕のパソコンの方にも強いデジモンの反応です」

ダイスケ「現実世界に現れたって事ですか」

驚いているダイスケ。

ブイモン「でも、現れたなら何とかして止めないと」

留姫「貴方達の手助けはいらない。大体…」

鎮宇「健良…」

健良「まだ現れたデジモンの詳細が分からない以上…僕は君達の手を借りたと思う」

留姫「ジエン!？」

レナモン「微かだが感じる力は身体中に嫌な気を流しこまれてくるような感じだ…」

ギルモン「…」

ギルモンもある一方向を睨みつけたまま唸っていた。

啓人「ギルモンも感じてる…」

マルク「ともかく移動しようじゃないか…リンク、お前がここに来たって事は…」

リンク「私は争いに来たわけじゃない…どちらかと言えば救いにだ…だから彼らが協力を拒んだとしても私達は私達で戦地に赴く予定だったよ」

そう告げるリンク。

山木「現実世界で暴れられては被害が大きくなっていく…」

ダイスケ「そう言うことなら俺のデジヴァイスの出番じゃないですか」

こうしろ「この世界のデジタルワールドに対しても有効かどうかはわかりませんが…ダイスケ君のデジヴァイスにはデジタルワールドへのゲートを開く力があります」

啓人「自由にデジタルワールドを行き来出来るなんて」

留姫「…」

ダイスケを睨みつけている留姫。

テントモン「多少目立つかもしれませんがここは飛んで行きまひよ」

リンク「高度を上げていけば問題ないだろう」

茜「タイチ君が行くつて言うからついてきたけど……」

タイチ「まあ、大人しくしとけよな。じゃあ、こうしろっ」

テントモン「テントモン進化！カブテリモン」

レナモン「幸いこの辺りに人の気配はないが…目立つと思うが」

リンク「マルク達はどうする？」

カブテリモンに載りながらそう告げるリンク。

マルク「俺達はお前達がたどり着いてからディオのホールですぐに追いついてやるから先に行ってる」

こうしろっ「わかりました、カブテリモン！」

カブテリモン「はいな！」

了承すると空高く飛び上がったカブテリモン。

留姫「私達もいくわよ！」

やけにやる気になっている留姫。

健良「でも、僕達の中に全員を乗せて飛んでいけるのは…」

マルク「なら俺達と一緒に行けばいいさ…力は温存させておいた方がいいんだろ」

留姫「むっ…」

山木「相手はデジモンだ…人の力で…例え君達が強い力を持っていたとしても…」

鎮宇「健良…気をつけてな」

健良「みんなと一緒にだから大丈夫です…」

と、定期的に山木に入ってくる情報からしばらくして上空を移動していたカブテリモンがライズ地点付近に到達したことを伝えた。

ディオ「ほな、ウチの出番やな」

みんなが通れるように大きめのホールを作り上げるディオ。

テリアモン「人なのに驚きビックリの能力だね」

レナモン「留姫、機嫌を損ねている場合では…」

留姫「わかってるわよ。他のデジモン達に負けてられないんだから行くわよレナモン」

と、一足先にホールに飛び込んでいった留姫。

そして、マルク達が目的地に到着しその場の様子を見て啞然となった。

何故ならそこには、予想外のデジモンの姿があったからである。

第22話：繋がり（後書き）

この話から登場するドリーム王国の人達について

この【新生】を書く前、以前使っていたPC（現在故障中）で数年前から公開するつもりのない小説として夢世界の集いを書いていてその時のキャラクター達です。

【新生】同様に異世界に向かい仲間を増やしていくリンク達のストーリーなのですが、その話の中で第22話に出てきた

- デジモンアドベンチャー02（八神タイチ達）

- ウェブダイバー（有栖川アオイ）

- エターナルハート【君が望む永遠・マブラヴを合わせてみたタイトル】（涼宮茜）

等々が登場しています

これからも他の世界等で出てきますが当時書いていた時と大体同じ設定でやるので、本来あり得ない組み合わせとかが起こりえますがスルーしてあげてください

ちなみに…

旧の夢世界では現在登場メンバーのみでいくと

八神タイチ・涼宮茜

泉こうしろう・有栖川アオイのカップリングが誕生してます

他にもカップリングは出来てますが、それは後ほど出てくるかと…

ではでは、次の話にて…

第23話：淀みゆく進化

咆哮と共にマルク達にその姿を見せたデジモン。

ダイスケ「な、何で…」

タイチ「！？…」

啓人「どうしたんですか？」

留姫「キメラモン…完全体…色んなデジモンのパーツを組み合わされて作られたデジモンね…普通の完全体より確かに強敵かもしれないけど…」

レナモン「…究極体に進化できる我々三体でかかれば問題はない…だが」

キメラモンを見上げレナモンは何かを感じていた。

ダイスケ「倒したんだ…俺達の世界のデジタルワールドで」

タイチ「確かに倒した…だが、ここと俺達の世界のデジタルワールドはパラレルワールドのようなもので同じデジモンも存在する…」

こうしろう「ですが…キメラモンは作られたデジモンです…自然的に…それもこちらの世界のデジタルワールドからやってくるなんて…」

健良「僕達にはよくわからない話だけど、とりあえずはデジタルワ

ールドに送るのが先だ」

タイチ「ダイスケ！」

こうしろ「パソコンのスタンバイ、オッケーです」

ダイスケ「デジタルゲートオープン！」

デジヴァイスを掲げるとパソコンの画面が輝きだし、キメラモンの中に吸い込み始めた。

しかし、咆哮を上げ抵抗するキメラモン。

タイチ「吸い込まれない……」

ギルモン「啓人！よくわからないけど、やろう！」

啓人「そうだ、まずはあいつをデジタルワールドに……よし、進化して……」

だが、その時突然上空から何かが飛んできてキメラモンを殴り付けた。

美琴「今度は何……」

留姫「サイバードラモン……って、事は……」

不機嫌な目つきをして後方を見る留姫。

リョウ「相変わらずだな、留姫は」

啓人「リヨウさん」

サイバードラモン「適当にやったがこれでよかったのか？」

と、殴られた勢いによりキメラモンはパソコンを通じてデジタルワールドに飛ばされていた。

こうしろ「成功です」

レナモン「後は我々がデジタルワールドに行くだけだが…」

アグモン「この画面から同じようにデジタルワールドに…」

と、その時近くの大地に突然ホールが開いた。

健良「あれは…僕達の世界での…」

リヨウ「そう言えば後で手伝いをやるとか何とか言ってたな、あの人」

啓人「山木さんが？」

リンク「さて…私も向かうが…マルク達はどうする？」

マルク「いい機会だ…俺は戦えないが…見ていつてやる」

こうしろ「あのデジタルゲートを通れば僕のパソコンも持ち運びできますね…行きましょう」

そんな訳で、ここにいる全員は山木達フォローしてくれる大人達が開かせたゲートを通りデジタルワールドへ飛び込んでいった。

リンク「タイチ！今度はデジタルワールドが壊されないようにしなきゃいけない」

タイチ「わかってる…デジタルワールドに来たならアグモンも本気でやれる」

アグモン「いつでも行けるよ」

ブイモン「俺は役に立てないからダイスケ達の守りに専念するよ」

テントモン「ワテらも参戦しまひよ」

こうしろう「相手が完全体なら何とかかりますね」

テリアモン「僕達の世界のデジタルワールドでの戦いだしね、負けてられないよジェン」

留姫「当たり前でしょ、レナモン！」

ギルモン「啓人！」

啓人「うん、行くよ！ギルモン」

そして、それぞれのデジヴァイスが輝きだし力が解き放たれていた。

アグモン「アグモン、ワープ進化！」　ウォーグレイモン「ウォー

グレイモン！」

ダイスケ「デジメンタルアップ！」

ブイモン「ブイモン、アーマー進化！」 ライドラモン「轟く友情、
ライドラモン！」

テントモン「テントモン、進化！」 カブテリモン「カブテリモン！」

カブテリモン「カブテリモン、超進化！」 アトラークブテリモン
「アトラークブテリモン！」

啓人・健良・留姫・リョウ「マトリクスエボリューション！」

ギルモン「ギルモン、進化！」 デュークモン「デュークモン！」

テリアモン「テリアモン、進化！」 セントガルゴモン「セントガルゴモン！」

レナモン「レナモン、進化！」 サクヤモン「サクヤモン！」

モノドラモン「モノドラモン、進化！」 ジャステイモン「ジャステイモン！」

進化という力で、その姿を変えていったデジモン達。

マルク「凄いものだな……」

ディオ「大きさは様々やけどな…せやけどこれなら簡単に倒せるや

ろ…あの緑色のでっかい奴とかで吹っ飛ばすんやったらな」

そう告げるディオ。

だが、その時こうしろうが自分のパソコンの中の異常に気付いた。

ダイスケ「こうしろうさん？」

こうしろう「僕のパソコンの中の…デジモンのデータが一部崩壊してます…まるで何かに噛み砕かれたみたいにデータの残骸が…」

健良『みんな！キメラモンの様子が』

セントガルゴモンと一つになっている健良が突然そう告げた。

と、キメラモンの身体が黒い霧に包まれていっているのである。

タイチ「この嫌な感じ、リンク！」

リンク「みんな一度キメラモンから離れるんだ」

リュウキ「確かに禍々しい力があのモンスターを包み込んでいる」

留姫『今のうちに総攻撃で倒せないの？』

サクヤモン「しかしあの黒い霧は…」

こうしろう「もしかしてパソコンの中のデータを…飛ばされながらも食い散らして…」

そして霧の中で、姿を変えていくキメラモン。

ライドラモン「あれはもう、キメラモンじゃない」

そして衝撃波と共に吹き飛んだ黒い霧。

タイチ「こうしろっ！あいつのデータを・・・」

ギガデモン「必要ない・・・我はギガデモン。最強の暗黒デジモンなるぞ」

セントガルゴモン「こいつでかい・・・」

ディオ「一番でかいあの緑より一回り小さいぐらいやけど・・・」

ジャステイモン「感じられるこの力は、危険だ」

そして、デジタルワールドでの大決戦がここで始まるうとしているのであった。

第24話：絶望…超越の進化

タイチ「ギガデモン…」

サクヤモン「対峙しているだけで感じるこの威圧感と邪悪な力…」

デュークモン「怯んではいけない！ここで負けることはデジタルワールド…そして、啓人の世界の危機につながる」

そう叫ぶデュークモン。

健良『セントガルゴモン、ギガデモンより大きな僕達が先陣をきつていくべきだと思うけど…』

セントガルゴモン「わかってる…僕達が道を切り開く…みんな続いて！」

と、戦闘を開始していくセントガルゴモン。

セントガルゴモン「バーストショット！！」

身体のあるあらゆる場所から放たれる攻撃は、瞬く間にギガデモンに直撃し爆煙で見えなくなってしまった。

と、飛び上がり爆煙から脱したギガデモン。

ウォーグレイモン「次は…」

デュークモン「こちらの番だ」

ギガデモンを挟むように、空中に跳び上がったウォーグレイモンとデュークモン。

ウォーグレイモン「ガイアフォース！」

デュークモン「ロイヤルセイバー！」

二つの技の挟み撃ちにより、両者の技をそのまま受けてしまったギガデモン。

タイチ「よし、いいぞ！」

マルク「リンク…この戦い見てると俺達が蚊帳の外なのはわかるけどな…」

リンク「経験は浅くとも勘の鋭さはユーマと同じですね…まあ、私も気付いてはいますが…ただ…戦っている当人たちはそれどころではないでしょう」

ギガデモン「流石は究極体の攻撃…凄まじいものだ」

と、爆煙の中から聞こえる声。

セントガルゴモン「効いてない…」

啓人『でも、全部直撃だったのに』

ギガデモン「キメラモンと呼ばれていた当時…君達がその実力を発揮していたのなら、我は完全に消滅していただろう」

こうしろっ」「…では、今まで密かに生存していたと…」

尋ねるこうしろっ。

ギガデモン「その表現は少し違うな…私は残りかすかな闇の残留思念のデータとしてデジタルワールドを…そして、そこから現実世界を見てきた…ヴァンデモン…しつこさで言えば奴が上だろう」

ダイスケ「ヴァンデモン…確かに強敵だったよな」

タイチ「俺達は三度対面したことになるけど…」

留姫『だけどこのデジタルワールドとのつながりはないはず…なぜこっちのデジタルワールドに…』

ギガデモン「ブラックウオーグレイモン…そして、君達や及川と言う人間の力によりデジタルワールドはより良き世界となった…だが他の世界にもデジタルワールドが存在することを我は知った…そして、時折現れる時空の歪みを利用して我は世界を越える事が出来た」

マルク「それは俺達の責任か？」

リンク「私達にも関係はあるだろうな…とくに私達はタイチ達との接点がある…」

ギガデモン「そして、我はさらに知ることとなった。まだ他のデジタルワールドが存在する」

タイチ「俺達やここ以外のデジタルワールドが…」

リヨウ『俺達も彼らを直接見てるわけだから、嘘だとは思えないが…』

ギガデモン「お前達には礼をしなければならぬ…一つは究極体になれたことで人の知能を手に入れる事が出来た…そして…」

さくら「…なんか…身体が震えてきちゃう…」

美琴「私も色んな相手と戦ったことあるけど…何よあれ…」

マルク「ディオ、もしもの時は戦えない人間達を強制的にこの場から引き離せ。一瞬でも遅れるな」

真剣な表情でそう告げるマルク。

ディオ「言われんでもな…やばい感じなのは嫌っちゅうほど感じてる…」

ギガデモン「これより我は…この世界のデータを取り込み、更なる進化を可能とした」

タイチ・こうしろう「なっ…」

ウオーグレイモン「どうということだ…」

健良『ロードだ…僕達の世界のデジタルワールドではロードっていう事が出来る』

啓人『でも、ギガデモンが他のデジモンのデータを取り込んだよう

には…』

リョウ『いや、この世界には本来取り込むことのない屑のデータが転がっている…それを俺達が気付かない間に吸収していたら…』

ギガデモン「その通りだ…どんなに小さなデータでも集めれば膨大な容量となる…」

ダイスケ「でも、すでにギガデモンは究極体だろ。それ以上に進化するなんて不可能だ」

ギガデモン「常識ではそうだろう…だが、暗黒の力に限界などない…我は…更なる進化を遂げる！」

と、足元から一気に湧き上がる黒炎。

タイチ「一時離れる！ウォーグレイモン」

とつさの出来事にギガデモンから距離をとる仲間達。

啓人『これってキメラモンがギガデモンに進化した時と同じ…』

デュークモン「更なる進化…止めなければならない…」

と、手に持っていた盾を構えるデュークモン。

デュークモン「ファイナルエリシオン！！」

盾から放たれる強大なエネルギー砲。

しかし、ギガデモンを囲む黒炎に触れた瞬間デュークモンの攻撃エネルギーは漆黒に変わり盾も漆黒の闇に浸食されていった。

サクヤモン「盾を手放して！デュークモン！」

デュークモン「くっ…」

盾を投げ捨てるデュークモン。

すると、あっという間に盾は漆黒に染まりそのまま消滅していつてしまった。

アトラカプテリモン「これは…」

そして、黒炎が空へ吸い込まれるように消えていくとその場にはウオーグレイモン程度の大きさのデジモンが立っていた。

留姫『小さく…なった…』

ファイナモン「私はファイナモン…究極を越えし神の獣の領域に達した者。まずはレベルの違う者達を排除しましょうか…」

と、大きく跳び上がるとアトラカプテリモンの懷に潜り込んだファイナモン。

こうしろっ「えっ…」

そして、次の瞬間アトラカプテリモンはテントモンに退化し地に伏していたのだった。

アオイ「今…何が起きたの…」

茜「レベル違いってことは…」

タイチ「ダイスケ！」

ダイスケ「ライドラ…」

ダイスケがライドラモンの方を見た時には、すでにファイナモンがすぐ側に立っていた。

そして、次の瞬間にはダイスケの側にブイモンが横たわっていたのだった。

ファイナモン「私と戦う資格があるのは究極の力を持つ者のみ…それと全力で戦えるように…」

と、ファイナモンはマルク達の方に手を向けた。

ウォーグレイモン「何を!？」

と、突然大きな結界に包まれたマルク達。

リュウキ「かなり強力なものですね…俺の一閃では傷一つつかないでしょう」

ディオ「リュウキがやりもしないで諦めるってことは本物やんな…」

こうしろう「結界の外にるのは究極体のデジモンのみ…」

タイチ「ウォーグレイモン……」

ファイナモン「では、始めよう……」

そう言い、両手を広げるファイナモンなのであった。

第25話：騎士、光龍を纏わん

デュークモン「動きを見せない…」

ファイナモン「何処からでも攻撃してきてください。安心していいですよ、攻撃したからと言って即反撃はしませんから」

余裕を見せつけているのか、両手を挙げたままそう告げるファイナモン。

セントガルゴモン「どうしようジェン…」

健良『さっきまでと体格が全然違う…バーストショットの一斉射撃で…でも、相手は究極体を超えた存在…』

ウォーグレイモン「なら行かせてもらおう」

と、ファイナモンに向かっていったウォーグレイモン。

ファイナモン「さすがは勇気の心を持つ人間のパートナーデジモン…君からも勇気の心を感じ取れるよ」

ウォーグレイモン「ガイアフォース！」

ギガデモンの時と同じく、よけることなく直撃したウォーグレイモンの攻撃。

ジャスティモン「たたみかけよう！」

と、ジャスティモンが接近戦を挑んでいった。

留姫『あのバカ！一人で突っ込んで、サクヤモン！』

サクヤモン「ええ、援護しましょう」

ジャスティモンのサポートに入るサクヤモン。

究極体の攻撃は本来なら最上級の威力があるのだが、ファイナモンの前ではそれはまるで意味をなさない力だった。

しばらくウオーグレイモン達は攻撃を続けるが、光明を見出すことは出来なかった。

ファイナモン「攻撃をするばかりでは疲れるだろう…少し見せてあげよう神となったデジモンの力を」

と、高速で移動するファイナモン。

健良『気をつけるんだ、どこに現れるかわからない』

タイチ「なんとかわからないか？こうしろっ」

こうしろっ「動きが速すぎて…それにあのデジモンのデータが本来僕のデータバンクの中に存在しないんです…もしかしたらゲンナ伊さんも知らないかもしれない…」

マルク「…完全に遊びだな、相手にとっては」

そう呟くマルクに対して、リンクは真剣な表情で戦闘フィールドを

眺めていた。

と、ウォーグレイモンの背後に瞬間的に現れたファイナモン。

デュークモン「ウォーグレイモン！後ろだ！」

ウォーグレイモン「！？」

ファイナモン「ゴッド・エンド・ノヴァ！」

と、足元から噴き出した炎がウォーグレイモンを包み込んでいった。

タイチ「ウォーグレイモン！！」

ファイナモン「全力では攻撃しないよ…そんな事をしたら退化させるどころか命を奪ってしまうからね」

サクヤモン「ファイナモン、貴方は私たちを倒すことが目的じゃないの？」

そう尋ねるサクヤモン。

ファイナモン「成長を待っている。お前達なら私と同じ領域に辿り着くものがあるかもしれない…」

啓人『それって神の獣の領域って事…』

ファイナモン「神獣体…私はそう名付けた…素晴らしきこの力…」

そう言い放つファイナモン。

美琴「マルク、あんたも世界のリーダーなら何とか知恵を出しなさいよ」

マルク「俺達の戦力の中で最強はお前の力を全開放することだがな…それでお前、あいつを倒せると思うか？」

さくら「生身の人が戦える相手じゃないですよ…」

リュウキ「デジモン…これほどまでに強く進化していけるモンスターがいる…異世界には…」

リンク「勝てる方法がないわけじゃない」

マルク「!？」

と、マルク達結界の中にメンバーの誰もがリンクの発言に驚いていた。

マルク「お前も冗談とかいうタイプだったのか？」

リンク「私の中に眠っていた力を使う…可能性があるとしたらそれだ」

こうしろう「ライティ―…光の龍の力ですね…しかし、彼の力がフアイナモンを越えているとは…」

リンク「物は試しだ…」

と、結界に手を触れるリンク。

マルク「ディオ、手を貸してやれ…一瞬でもこの結界に外へのホールを開いてやれ」

ディオ「こういうことはウチの出番やしな」

ディオはリンクの手の位置に合わせて、ホールを開いた。

ファイナモン「へえ、そんなことも出来るのか…だけど…」

しかし、開いていたのは数秒ですぐにホールは強制的に閉じられてしまった。

ディオ「なんちゅう強力な力なんや…せやけど」

リンク「助かったよ…おかげで…」

と、結界の外に出現した光の塊。

その形が変化していき、人間の姿へとなっていった。

さくら「あれ？龍じゃないんですか？」

リンク「普通の世界にも対応できるように人の姿になれるんだ…ライティー…賭けに近いんだが…」

ライティー「私はリンクのパートナーです。リンクが望むのなら、確率が低くともやりますよ」

マルク「で、どうする気なんだ？」

リンク「ライティ―とデジモンとの融合進化」

タイチ「デジモン同士のジヨグレス進化みたいなもんか？」

こうしろ「ライティ―も龍…モンスターに近いですからね…それに光のエネルギー体となれば融合も可能かもしれませんが…」

ウォーグレイモン「グツ…そういうことなら僕がやる…みんなを助けるためなら…」

リンク「タイチ、決断は私がしても？」

タイチ「俺達はリンクについていつてるんだ…反論するつもりはない」

タイチにそう言われ、一呼吸おいたリンク。

リンク「融合進化の相手は…デュークモン！」

デュークモン「!？」

啓人「えっ、デュークモンと」

留姫「ちよっと…訳のわからないことして…啓人も一緒に戦っているのよ」

そう告げる留姫。

健良「啓人、リンクさんの提案…僕達が決めるわけにはいかない…」

デュークモン「…啓人…」

と、啓人の精神世界の中でデュークモンはギルモンとなり啓人と話し合っていた。

- - - -

ギルモン「啓人がいいならギルモンもいい」

啓人「でも…ギルモンだってどうなるかわからない…データが壊れたりしたら…いつものギルモンに会えなくなっちゃったら…」

そう告げる啓人。

ギルモン「ギルモン大丈夫。だって啓人がいつも一緒にいて一緒に戦ってくれてるから…ギルモン、啓人を信じてる」

真っ直ぐな瞳で啓人を見つめながらそう言い放ったギルモン。

啓人「うん、やろうギルモン。ファイナモンを倒してデジタルワールドもリアルワールドも救うんだ！」

- - - -

デュークモン「答えは出た。その力を我が手に…」

リンク「だそうだ…頼むぞライティー」

ライティー「どうなるか私もわからないが…行くぜ」

と、ライティーは輝きと共に光の龍の姿へ変化していった。

そして、デュークモンの上空を飛び回ると急降下しデュークモンの中へと入っていった。

デュークモン・啓人「!？」

それと同時に目映い光に包まれていったデュークモン。

留姫『啓人は大丈夫なの・・・』

と、その時輝きの中より飛び出してきたデジモン。

リョウ『あれは・・・』

ファイナモン「素晴らしい力を感じる・・・名を聞こう」

静かにそう聞くファイナモン。

啓人『感じる・・・新しい力を』

ライティー『ああ、どうなるかと思いましたが・・・』

シャインデュークモン「我が名はシャインデュークモン・・・ファイナモンを滅する為に新たに生まれしデジモンだ」

光輝くボディを持ち、そう言い放つシャインデュークモンなのであった。

第26話：残された謎

ファイナモン「シャインデュークモン…私の力を試すに相応しいデジモンだ」

と、高速で動きシャインデュークモンの背後に出現したファイナモン。

ダイスケ「後ろに…って…あれ？」

次にダイスケ達が見た時は、シャインデュークモンの姿はそこには無かった。

ファイナモン「上…ですか」

シャインデュークモン「シャイニングセイバー！」

頭上から光の加護を受けたシャイニングセイバーを受けたファイナモン。

啓人『よし、そのまま追撃だ』

ライティ『…ファイナモン…何処までが本気か…』

何やらそんな事を考えていたライティ。

シャインデュークモン「シャイニングセイバー…！」

距離をとり更に攻撃を放つシャインデュークモン。

ファイナモン「ゴッド・エンド・ノヴァ」

静かに攻撃を発動させたファイナモン。

しかし、光の力を受けているシャインデュークモンは素早い動きで攻撃のエリアから脱することが出来た。

シャインデュークモン「…油断はしない方がいい」

啓人「うん…」

ライティー「中々いい心を持っているな…」

ファイナモン「私の攻撃も楽にかわし、それでいて警戒は怠らない…【強化】されて心も強くなったようですね」

タイチ「…こうしろっ…いまあいつ強化って」

こうしろっ「…リンクさん…この事…初めから…」

リンク「どちらにしてもこれしか勝つ手段はなかった」

マルク「本当に俺らだけ情けないな…ディオ…美琴…」

美琴「何やらせる気なのよ」

リュウキ「確かにこの中で一瞬の威力が一番高いのは、彼女の超電^レ磁砲^{ルガン}でしょう…」

ディオ「せやけど…」

美琴「あんな奴相手にゲーセンのコインで放つても通じないわよ」

シエル「そのコインの素材ならな…」

と、結界の中に閉じ込められてから何やら作業を行っていたシエル。

シエル「青年のおかげで…この世界のみで使えるこいつを作る事が出来たよ」

タイチ「こうしろつ…知らない間に何やってたんだよ…」

こうしろつ「ほんのわずかの可能性ですけどね…テントモンは完全体までにしか進化出来ません。だから僕もじっとしているだけじゃなくて何かやりたかったんです」

シエル「ほれ…」

美琴「わっ…と…でも、この世界でしか使えないって…」

リンク「デジタルワールド…この世界のデータをもとにして作られたからだろ…」

タイチ「その素材って…」

こうしろつ「ウォーグレイモンのドラモンキラーと同じ材質です…」

美琴「問題はここから出ることだけど…」

セントガルゴモン「そう言うことなら僕達が力を貸すよ」

サクヤモン「今の私たちではファイナモンを倒すことはできない…だから」

ウォーグレイモン「タイチ！」

タイチ「…全員の力を合わせなきゃ何とかなりそうにないな…」

リンク「マルク達の力を借りる…」

ディオ「もう一度やるんやな…この一回に全力であたったるわ」

そして、再び結界に開かれたホール。

健良『セントガルゴモン！』

と、開いたホールに両腕を突っ込み無理やり大きく開かせようとするセントガルゴモン。

健良『今のうちに中に入ってみんなを守って…あとはセントガルゴモンの火力で吹き飛ばす』

留姫『無茶苦茶言っわね…』

リョウ『重大な役目だ、気を抜くな』

そして、ウォーグレイモン・サクヤモン・ジャステイモンは開かれたホールを通って結界内に入った。

サクヤモン「出来る限り下がって」

ウォーグレイモン「攻撃の余波は全て防ぎきる」

セントガルゴモン「行くよ！」

そして、まき起こる爆煙。

ファイナモン「ほう…残っている者達もさすがですね…しかしすでに貴方の力は見えました」

シャインデュークモン「どう言うことだ…」

ファイナモン「先程も言いましたが貴方のは強化…進化ではなく強化の段階なのです」

啓人「…」

ファイナモン「光の力を受けて動きは私以上かもしれませんが、攻撃は致命傷を与えるほどではありません」

ライティー『不安な感じがしたのはそこか…』

シャインデュークモン「もう話はいい。どのみちこの力で倒すしかない」

ファイナモン「では、こちらも行きましょうか」

瞬間的に高速移動し、ぶつかり合う二体のデジモン。

美琴「煙たすぎでしょ…」

マルク「これぐらい派手じゃないと面白くないよな」

レナモン「留姫…しっかり」

テリアモン「進化解除されちゃったね」

健良「力をフルに使って、あの至近距離攻撃で僕達もダメージがあったからね」

シエル「後はお前の出番だ、美琴」

マルク「全力でも燃え尽きないだろうからな…限界超えた力でぶっ放せ」

ウォーグレイモン「タイチ、まだ動ける」

タイチ「…もうギリギリのはずだけど…最後のお前の一撃見せてくれ」

そして、前に立つウォーグレイモンと御坂美琴。

ウォーグレイモン「あのスピードに攻撃を当てるのは難しい。僕が先に行く…だから必ず…」

美琴「自分を犠牲にして戦わなくていいんだから…私だってやる時はやるわよ」

ファイナモン「どうやら…邪魔が入りそうですね…」

ウォーグレイモン「ガイアフォース！」

ファイナモンに向かいながら攻撃を放つウォーグレイモン。

ファイナモン「貴方の努力は認めますが…」

と、ガイアフォースを弾き飛ばすファイナモン。

ウォーグレイモン「ブレイブトルネード！」

と、高速回転しファイナモンに突っ込んだウォーグレイモン。

シャインデュークモン「ダメだ、突っ込んでいったら」

ファイナモン「なら見せてあげましょう…二つ目の技…ゴッド・エンド・クロス」

と、両腕に強力なエネルギーを纏いウォーグレイモンに振り下ろしたファイナモン。

タイチ「ウォーグレイモン…」

マルク「デジモンしか見えていないなら…こっちの勝ちだ」

ファイナモン・シャインデュークモン「!？」

と、いつの間にかファイナモンの懷に潜り込んでいた美琴。

美琴「限界振りしぼって力使ってくれた誰かさん達に感謝して、今

まで以上の一撃をおみまいするわ!」

ファイナモン「グウツ…この力…人間の貴方が…」

斜めから撃ち放った超電磁砲^{レールガン}により、宙に飛ばされるファイナモン。

だが、そのチャンスをシャインデュークモンは見逃さなかった。

再びファイナモンの頭上に出現すると、装備している槍を構えた。

ファイナモン「その速度のみの強みのはずでしたが…どうやら私の負けのようですね」

シャインデュークモン「シャイニングセイバー!」

超電磁砲^{レールガン}の威力とのぶつかり合いでいつも以上のダメージを受けるファイナモン。

そして、ファイナモンの身体ごと槍を大地に向け投げつけ残っている盾に力を込めていくシャインデュークモン。

啓人『まだ力を残しているのは僕達も一緒だ』

シャインデュークモン「ファイナルシャインエリシオン!」

ファイナモン「…」

そして、静かにシャインデュークモンの攻撃を受けたファイナモン。

ディオ「よっと…っと…」

再びホールで美琴をこちら側に移動させ受けとめるものの一緒に倒れてしまったディオ。

美琴「限界超えてるんでしょ、あんた」

ディオ「バテバテやな…」

シエル「データの世界だからこそ…中々の威力だな…せつかくのコインは何処かにいつてしまったが」

そして、動かなくなったファイナモンの元に啓人とギルモンとライティーが寄った。

ファイナモン「素晴らしかったですよ…ですが私を完全消滅に至らなかったのは残念でした。私のこの力は更なる力を求め次の世界へと導かれるでしょう」

啓人「次の世界って…別のデジタルワールドって事…」

アグモン「そんな事…何度やったって僕達が倒す」

力尽きて寝そべったままそう告げたアグモン。

ファイナモン「次に出会う時…楽しみかもしれませんね…今は静かに消えておきましょう」

そう言い残し、ファイナモンの身体はこのデジタルワールドから消えていったのであった。

第27話：更なる高みを目指して

完全に倒す事は出来なかったものの、二つの世界の危機を乗り越えた戦士達。

そして、今現在…啓人達のリアルワールドにてパーティーを行っていた。

留姫「って…こんな事していいわけ？ファイナモンは完全に倒してないでしょ」

ジューズを飲みながらそう告げる留姫。

健良「確かにそうだけど今の僕達にはそれが限界だったと思う…実際シャインデュークモンだけでも倒せなかったかもしれないんだ」

冷静にそう分析していた健良。

リョウ「それはそうとその啓人の姿が見えないが…」

テリアモン「それならさつき」

そう告げるテリアモン。

リンク「まあ、リーダー格の人に聞いてもらうのが一番だろうしね…マルク」

マルク「それはいいとして…何でお前の所の仲間まで全員集めてるんだよ」

少し怒ったように告げるマルク。

リンク「彼等もまた色々と考えた結果私の世界にやって来ていた…君も同じように仲間を集めているのなら…まあ、理由はわかると思うけど」

美琴「言っとくけど私は強制なんだからね」

さくら「私は…その通りですね」

ディオ「この世界の一件も片付いたんやし…早いとこ話をやな…」

マルク「わかってるさ…」

啓人「僕達の誰かを仲間にですよね…」

ギルモン「仲間増えるの？」

啓人「でもそれはこの世界を離れるって事…」

マルク「そうだ…戻れなくなるわけじゃないしな…」

タイチ「ファイナモンの件もある…慎重に決めた方がいいぜ」

そうアドバイスするタイチ。

ブイモン「どうしたんだ？ダイスケ」

何やら考え込んでいるダイスケに気付いて声をかけるブイモン。

ダイスケ「マルク…さん…俺を連れて行ってくれませんか。ブイモンと一緒に」

こうしろ「ダイスケ君!？」

ダイスケ「俺達今回の戦いで何一つ役に立っちゃいねえ…ケンとワームモンがいなきゃ完全体以上の進化も出来ない…でも、もし強くなれるんだったら…」

啓人「…ギルモンはどう思う?」

ギルモン「ギルモンは啓人の言う通りにする。啓人が行くならギルモンも行く」

啓人「でも、僕だけで決めることは出来ないよ。ジエンや留姫達にも…」

留姫「ちゃんと聞いてるわよ…全く」

レナモン「仲間だからな」

健良「僕達も少し考えたんだけど…僕達の中で更に進化できる可能性があるのはギルモンだと思う」

啓人「ギルモンが?」

リョウ「あの光の龍がきっかけでその進化に目覚める可能性があるって考えただけだな…」

啓人「みんな…」

マルク「まあ、俺は誰でもいいけどな…俺達の力になってくれるのなら…」

美琴「…一応私の望みも少し叶えてくれたわけだしね…強化超電磁砲…」

タイチ「ダイスケ!」

ダイスケ「タイチさん?」

タイチ「マルクの世界に行く役目…俺に譲ってくれないか」

茜「タイチ君!」

これに一番驚いたのはタイチの人生パートナーの涼宮茜。

アオイ「こうしろっ君…」

こうしろっ「…あの時はファイナモンを倒すために一番いい選択をしました…ですが僕達の中で一番経験を積んでいるのはタイチさんのアグモンです…」

アグモン「僕も…その神獣体になれる可能性があるって事…」

ブイモン「ダイスケ!俺も悔しいぜ…だけど…」

ダイスケ「初めから…わかってたさ…俺だってタイチさんが一番相応しいのは…」

リュウキ「他の世界の人達も色々大変みたいですね」

マルク「ゴタゴタは俺達には関係ないが…」

留姫「啓人がいない分ぐらい、私とレナモンでカバーできるわよ」

健良「僕達の事を考えてくれると思うけど、気にせず自分の思うままに行動してほしいんだ」

リンク「タイチ…それでいいんだな」

タイチ「ああ、俺達もデジモンをパートナーに持つ先輩としてやらなきゃいけないんだ」

茜「それはいいけどさ…私に何の相談もなく」

何やら恐い表情になっている茜。

アグモン「タイチ」

タイチ「悪い茜…それでもついてきてくれるなら…」

茜「私より一つ年下だけどそれでも私より運動できる…あの人の代わりに私に優しくしてくれた…そんなタイチ君に私はずっとついて行ってくて決めたんだから…」

タイチ「忘れてないさ…あの事もな」

茜「…」

何やら顔を赤く染めている茜。

アオイ「何だかい感じね」

こうしろ「一応僕達も付き合っている関係なんですけどね…」

テントモン「頑張りなはれ、ワテが見守ってるさかいに」

タイチ「ダイスケ…何かあったら俺達の世界にいるヤマトやケン達と乗り切ってくれ」

マルク「リンク…久しぶりに再会したんだ…」

リンク「そうだね…またこれからも異世界で出会う事もあるだろうし…互いに助け合っていけるように」

マルク「それはいいとして、俺だっていつまでもユー・マ兄貴に剣の腕で負けたままじゃないんだ。お前にだって…」

そう言い放つマルク。

リンク「じゃあ、その時が来たら相手をしてあげるよ。それにユー・マとも久しぶりに剣をまじえたいしね」

リュウキ「…」

ディオ「いや…リュウキは対抗せんでええって」

そんな訳で、タイチ・アグモン・茜…そして、啓人・ギルモンを自

軍の仲間とすることになったマルク。

こうしろっ「再開した時にはタイチさんが得たデータを見せてくださいね」

タイチ「ああ、アグモンも絶対に強くして帰ってくるからな」

山木「話は全て聞いたよ…君のご両親達には私から説明をしておくよ」

連絡を受けてやってきた山木が啓人にそう告げた。

啓人「すみません…それとみんな…送り出してくれてありがとう」

テリアモン「お土産楽しみにしてるよ」

健良「いや、遊びに行くわけじゃないから…テリアモン」

ディオ「ほな、そろそろ行くで」

と、ゲートを開いていくディオ。

デマンド「お迎えにあがりました、リンク様」

と、リンク達の方も仲間のデマンドがゲートを開いて現れた。

マルク「どれくらいの間かわからないが、よろしくな」

タイチ「ああ」

さくら「よろしく願いします」

と、茜にあいさつしたさくら。

茜「あつ、よろしく…」

美琴「まっ、仲間が増えるのはいいかもね」

そして、この世界の仲間たちに見送られマルク達とリンク達は各々の世界へと戻っていった。

まだその生命は絶たれず、どこかに存在しているファイナモン。

いずれ再戦する時のために、それぞれがより高みを目指し精進していくのである。

第27話：更なる高みを目指して（後書き）

後ほどキャラ紹介にてリンク側の仲間も説明しますが、タイチ達の年齢は02時代から三年後の設定です。

リンク達は表に出すつもりがなく趣味で書いていた夢世界の集いのキャラで、結構書き込んでいたため物語内の年数も進んでいるためみなさん原作などより年齢が上がっています。

詳細はいずれ書きますキャラ紹介にて…ではでは

第28話：兄と妹

前回、デジモンの世界を訪れ更に新たな仲間を増やしたマルク。

そして、戻って来た日から数日後…の早朝。

王国から少し離れた場所に立っているタイチと茜。

その二人から更に離れてウォーグレイモンとデュークモンが向かい合って立っていた。

啓人『行くよ』

ウォーグレイモン「ああ！」

そして、ぶつかり合う二体のデジモン。

大技は使わず、接近戦でやり合っていた。

茜「…zzz…」

特に早朝特訓につき合う必要はないのだが、タイチも行くからと無理についてきた茜だが半分眠りに入っていた。

タイチ「よし！ラストの一発だ」

タイチがそう告げると、互いに跳び上がり構えた。

ウォーグレイモン「ガイアフォース！」

デュークモン「ファイナルエリシオン！」

空中にて激突する両者の必殺技。

タイチ「今日はここまでだな」

ディオ「なんや…朝から疲れることやつとるんやな」

そう言いながらゲートを開きやってきたディオ。

タイチ「俺達にはやらなきゃいけない目標があるからな」

そう呟くタイチ。

そして、ディオのゲートですぐに城に戻り仲間達との朝食を終える。

シエル「！？…」

マリアン「マルク様…」

マルク「今回は異世界には行かない」

美琴「じゃあ休日って事？」

マルク「いや…クリスの国に向かう」

リュウキ「！…」

ディオ「クリス…あの子のテンションはウチ苦手やな」

そう呟くディオ。

マリアン「しかし、急にどうしたのですか…クリス様にお会いになられないなんて…」

さくら「クリスさんって…」

そう尋ねるさくら。

ディオ「クリスはマルクの双子の妹や」

そう説明するディオ。

マルク「詳しい説明は会えばわかるからしないぞ…準備出来次第ディオのゲートで向かうぞ」

タイチ「マルクにも妹がいるのか」

マルク「も…ってお前もか…この間は会わなかったが…」

タイチ「…あいつは自分のやるべき事をやってる…だから俺達も頑張らないといけないんだ」

啓人「でも、マルクさんはお兄さんもいるんですよね」

マリアン「ユーマ様です…マルク様達はお父様であるゲイル様により剣術は一通り教えられましたが、その中でも一番の使い手になられたお方です」

そう説明するマリアン。

美琴「まあ、それはそうと私達も行くわけ？」

マルク「紹介しておきたいしな…大事な仲間だしな」

美琴「あんたにそう言われてもね…」

ちよつと微妙な表情を見せる美琴。

それからしばらくして、準備を終えたメンバーが集まった。

ディオ「ほな、国の前に開くで」

そして、マルク達は妹・クリスが治める国へと向かったのであった。

さくら「ここも大きな城ですね」

見上げながらそう告げるさくら。

と、その時

『そこの者達、動くな!』

突然声が聞こえて来たと思うと、上空から翼をもった人間が降り立った。

美琴「…その妹もあんたみたいに色んなの集めているわけ？」

マルク「この国の防衛リーダー・ジェイ…仕事熱心なのはいいけど

俺の顔は忘れるなよ」

ジェイ「マルク様!？」

マルク「クリス達と別れて以来だからな…クリスに会いに来たんだが」

ジェイ「了解いたしました。少々お待ちを!」

そう言うのと飛び立っていったジェイ。

マルク「ちなみに、クリスやユーマ兄貴の所にディオのような能力者はいないぜ」

さくら「じゃあ先程のジェイさんは…」

アグモン「この世界で仲間にしたって事なんだね…」

啓人「デジモンみたいな人ですね」

しばらくすると、案内人の人が数名ジェイと共にやってきた。

そして、城の中へと招かれたマルク達。

マルク「一応覚悟しとけよ」

美琴「はい?」

クリス「お兄様!」

と、いきなり二階からマルク達めがけて跳んできたクリス。

さくら「えっと、えっと…フライのカードで…」

マルク「慌てるな」

そう言つて仲間を落ち着かせるマルク。

と、急に落下スピードが落ちてマルク達の前にふわりと降り立ったクリス。

タイチ「今のは…」

クリス「お兄様、中々会いに来てくださらないんですもの…」

マルク「ユーマ兄貴も同じ感じだろ…それに今回は気まぐれで来ただけだしな」

そう告げるマルク。

ジェイ「それではクリス様。私は警備の方へ…」

クリス「ええ、ありがとうジェイ」

と、飛んで行くジェイを見送るとクリスはマルクの仲間達をじっと見渡した。

クリス「しばらく会わない間に増えたんだね…それも凄い力の持ち主…そのモンスター達も」

と、アグモンとギルモンを見てそう言うクリス。

ギルモン「不思議な女の子だね、啓人」

クリス「じゃあ、久しぶりだし…」

と、いきなり両手に武器を持ちマルクに襲いかかるクリス。

さくら「ほえっ!？」

赤色と水色の短剣を振るうクリスに対し、変幻刀で対応するマルク。

美琴「って、マリアンさん達は落ち着いてるし…」

マリアン「クリス様ったら…いくら久しぶりに会えたとはいえ…」

マルク「短剣なのは手を抜いてるからか？」

クリス「お兄様こそ、中型の武器で戦っていますよね！」

しばらく戦闘が続いたのち、距離をとる両者。

美琴「って、マルク！」

マルク「だから言っただろ…クリスはこう言う奴だ」

クリス「腕は鈍っていませんね、お兄様」

そう言うつと武器を消すクリス。

クリス「では、ゆっくり出来る部屋にご案内しますわね。アーク！」

と、何処からともなく飛び込んできた生物が一体。

さくら「犬？」

アーク「アークと申します。以後よろしく、ではご案内を……」

クリス「後で私も伺いますわね」

そんな訳でアークの案内で部屋に向かうマルク達。

美琴「…もう考えない方がよさそうね……」

そう思ってしまう美琴なのであった。

第29話：越すべき存在

かなり広い部屋に通されたマルク達。

アーク「では後ほど、クリス様もいらっしゃると思いますので…」

そう言うと退室していったアーク。

さくら「私の所のケロちゃんも喋れるし…ね…」

ディオ「…マルク…気づいてるんやろうけど…」

マルク「ああ、リュウキだろ」

シエル「仕方のない事だな…」

タイチ「俺達はこの前仲間になったばかりでよくわからないけど…」

美琴「リュウキがどうしたのよ…」

マルク「あいつは…ユーマ兄貴よりもクリスをライバルとして見てるからな」

さくら「でも、ユーマさんの方が剣の腕は上なんですよね…」

タイチ「さっき二階から飛び降りた際に感じた何か…それと関係あるのか？」

マルク「俺と戦った時…クリスの短剣を見ただろ？」

アグモン「確か赤と水色の…」

マリアン「クリス様も剣術は憶えられましたが、それ以上にクリス様は…魔法的な力が誰よりも強いんです」

美琴「それって私とかさくらに近い存在って事？」

ディオ「せやな…リュウキやマルクとは逆やな」

マルク「自分に無い力を持つクリスをライバルとして挑むことで何かを得ようとしているのさ」

クリス「そう言う挑戦姿勢…嫌いじゃないですよリュウキさん」

リュウキ「ありがとうございます。未だユーマ様にもかなわぬ剣の腕を持つ俺の挑戦を…」

クリス「かたい挨拶は無しだよ…じゃあ、行くよー！」

誰も見ぬ人がいない所で、ぶつかり合うクリスとリュウキ。

それからしばらくして、マルク達のいる部屋にクリスがやってきた。

クリス「お待たせ」

美琴「って、リュウキは…」

シエル「まあ、少し放っておいてもいいと思うがな」

そう告げるシエル。

マルク「大体特に用事なく来ただけだからな…とはいえ俺もクリスも一応目標はある…個人的にな」

美琴「マルクは強い仲間を集めて最強の王国にするつもりじゃないの？」

そう言う美琴。

マルク「それは結果的にだ…それに王国的なものだしな…個人的には…」

クリス「ユーマお兄様に勝つ…ですわね」

さくら「じゃあ、クリスさんも」

クリス「同じ剣術を学んだお兄様達…もちろんマルクお兄様にもいつか勝ちたいです」

マルク「ディオのような能力者がいない以上、俺達が行かないと大変だしな」

クリス「もちろんお兄様のお仲間の皆さんとも戦ってみたいです」

タイチ「とはいってもデジモンと戦わせるわけにはいかないよな」

美琴「私ならいつでもいいわよ」

さくら「戦いはあまり好きじゃないけど一度ぐらいなら…」

そんな話をしていくマルク達。

そんな中、いつの間にかディオの姿がこの部屋からなくなっていた。

茜「ん？あのワープの人がいない？」

その頃、ディオはというと…。

リュウキ「ディオか…」

城の外にいたリュウキの前に姿を見せたディオ。

ディオ「そんなに落ちこまんでもええんとちゃうんか」

リュウキ「自身にプライドの無いお前にはわからないだろうな…」

ディオ「そうでもないで…ウチかてな…一人じゃ戦いで役に立てへん事、何も感じてへんわけないやろ」

リュウキ「…俺はマルク様の右腕としてのプライドもある…より強くなってはいけない…しかし、剣術では俺が上でもクリス様には勝てなかった…」

ディオ「せやからクリスには何度も挑んでるんやろ…何かを得ればリュウキはクリスに勝てるんやろっし」

リュウキ「簡単に言ってくれるな…」

それからしばらく流れる沈黙の時間。

マルク「お前ら…探したぞ」

リュウキ「マルク様…」

クリス「ほらほら、お兄様を困らせちゃダメよ」

ディオ「すまんことしてもうたな…」

と、じつとマルクとクリスを見ているリュウキ。

クリス「お兄様だけじゃなくて貴方の挑戦も受け続けます…お兄様のために強くありたいのなら何度でも来なさい」

そう告げるクリス。

リュウキ「ありがとうございます、クリス様…」

マリアン「それではクリス様…」

クリス「今度は時間ある時に来てね！私もマリアンさんの手料理久しぶりに食べたいし」

マルク「なら明日にでもディオに協力して作りに来ればいいだろうなっ」

マリアン「…マルク様がそうおっしゃるのなら…」

ディオ「ウチの意見はないんやな…まあ、それでクリスが喜ぶんならえんちゃうんか」

そんなディオ達の会話を聞いて、より一層の笑顔を見せるクリス。

そして、クリスやお付きの者たちに見送られマルク達は自分達の国へと帰っていった。

さくら「いい妹さんでしたね」

美琴「色々と苦労しそうな感じだったけどね」

タイチ「マルク、お互い目指すものがあるな」

マルク「まあ、レベルは全然違うけどな…俺じゃお前たちの戦いには入り込めないしな…だが、ユーマ兄貴に勝つのは難しい…だが目標として居続けてくれるおかげで俺も強くなるために頑張れるのさ」

啓人「僕達も同じだね、ギルモン」

ギルモン「うん！ギルモン、啓人と一緒に強くなる」

シエル「では、私は次の世界の搜索でもやりますかな」

マリアン「この世界と異世界の交流…これからも良いものになっていくといいですね」

マルク「絶対なるさ、俺が管理してるんだからな」

自信を持ってそう告げるマルク。

そして、いつものようにまた異世界と交わる生活が始まっていくの

である。

第30話：スター＆ライトニング

前回、妹のクリスの元に久しぶりに会いに行ったマルク。

早朝、タイチ達が特訓しているのを知ってか知らずかマルクはリュウキと簡単な手合わせを行っていた。

茜「どっちもよくやるよね…」

例によって眠そうな瞳をしながらそう呟く茜。

ディオ「そっちの兄さんもマルク達も色々事情があるんやろ…倒すべき存在や越えたい存在がな」

マリアン「朝食の時間に戻ってきてもらえば、別にいいんですけどね」

さくら「でも、男の子ってやっぱり凄いですね」

美琴「…っ…」

ちよつと嫌な人物を思い出したのか、表情が暗くなる美琴。

シエル「次の世界へのルートがわかったよ…って…それどころじゃないみたいだね」

そして、早朝特訓も終わり朝食の時間。

マルク「次の世界も面白そうなところだな…」

シエル「何やら大きな戦いが終わった後みたいだな…あちこちで大きな力の残留が確認されている」

ディオ「せやけど、異世界のそういう事までわかるんは相変わらず凄いんやな」

感心するディオ。

マルク「マリアンは約束通りクリスの所に行つてやれ。俺達を異世界に送つてからディオにな」

ディオ「ウチはその後どうしたいらええんや？」

リュウキ「マリアンに付き添つてあげればいいでしょう。何かあればこそ通信カードを持っていればすぐに駆け付けられるのですから」

マルク「クリスの国で何かあるとは思えないしな…さくらもこつちに連れていくし少し手伝いでもしてやればいいさ」

マリアン「マルク様もお手伝いしていただけると、私達も助かるんですけどね」

さくら「あはは…」

そんな訳で、準備したメンバーはいつものように集まった。

ディオ「美琴は残るんか？」

美琴「別にずっと一緒にいる必要はないでしょ。あまり大人数で異世界を移動するのも大変だし…それに…」

シエル「私からの提案だ。少し用があつてな…こっちの青年にも残つてもらふことになっている」

と、タイチとアグモンを見てそういうシエル。

タイチ「そういうわけだから、デジモン世界代表として頼んだぜ、啓人」

ギルモン「啓人の為に、ギルモン頑張る」

いつも以上に意気込んでいるギルモン。

マルク「じゃあ、出発だ！」

いつもとは違い、仲間に見送られながら異世界へと旅立っていったマルク達。

しばらくして、異世界のとある場所に降り立った。

マルク「じゃあ、マリアンの方を頼んだぜ」

ディオ「了解や！」

そう言い放ち、ゲートをまったくぐって消えていったディオ。

リュウキ「…何か感じますね」

突然そう告げたりユウキ。

同じ頃…。

シャーリー「八神部隊長…」

はやて「この反応いきなりやな…」

シャーリー「どうしましょう…六課も解散する直前でこんな事…隊長達に出てもらいますか？」

話している人物、一人はシャリオ・フィニーノ。

シャーリーの愛称で呼ばれている人物。

そして、八神部隊長と呼ばれている人は八神はやて。

とある大きな事件・戦いに対応していた機動六課の部隊長をやっているその中のロングアーチのトップを担っていた。

はやて「ここは卒業試験的な感じで、フォワードのみんなにいつてもらおか」

シャーリー「フォワードの四人にですか…」

はやて「不安なんか…？」

シャーリーの表情を見てそう告げるはやて。

シャーリー「いえ…フォワードの实力は私もよく知っていますし、

これまでの経験でみんな強く逞しく成長していますから……ですがまだ情報も何もない未知の存在を相手に上手くやれるかどうか」

はやて「心配あらへんよ。あの子たちはそういう事態でも難くこなせるしな」

そして、はやてはすぐに指示を出した。

それからそんなに時もかからず、はやてたちの元に集った四人の人物達。

スバル「スターズ3、スバル・ナカジマ」

ティアナ「スターズ4、ティアナ・ランスター」

エリオ「ライティング3、エリオ・モンディアル」

キャロ「ライティング4、キャロ・ル・ルシエ」

シャーリー「……って、誰に名乗っているんですか……」

そう思ってしまったシャーリー。

はやて「大体の事情はさっき説明した通りや、今回は一応隊長・副隊長は動かさへんつもりやから、しっかりな」

そして、はやての号令と共に指示された地点へ向かう四人。

エリオ「ここからそう遠くないですね」

スバル「私が先行して様子を見てこようか？ウイングロードを使えば…」

ティアナ「駄目よ、よくわからないのが相手なんだから、一人で行って返り討ちにあつたら意味ないでしょ」

キャロ「ティアナさんのバイクと、私のフリードで行くのが一番速いと…」

スバル「それじゃ久しぶりの…」

スバル・ティアナ・エリオ・キャロ「セットアップ！」

同時にそう叫ぶと、四人ともコスチュームが変化し待機状態になっていたそれぞれの装備・デバイスが出現した。

ギルモン「何か来る！」

ギルモンがそう叫ぶのと同時に、リュウキが武器を抜いた。

そして、空と地上から近づいてくる者達に気づくマルク達。

リュウキ「マルク様…」

さくら「空を飛んでるの…ケロちゃんより凄いかも…」

マルク（さて、人としての人数は同じだが…）

エリオ「キャロ！」

キャロ「うん、ありがとうフリード」

と、地上に近づいたフリードから降りたエリオとキャロ。

そして、そこにスバルとティアナも合流した。

ティアナ「いきなり現れた貴方達…何者」

マルク「ディオのあれを感知したのか…この世界はどちらかと言うと美琴の世界に近いのか…」

エリオ「一人は武器を構えています…もし動いたら僕が…」

ティアナ「無理に危害を加えるつもりはないわ。ただし、貴方達が何かしでかす気なら…」

銃型のデバイス・クロスミラージュの銃口を向けてはいないティアナだが、その瞳はしっかりとマルク達を捉え向こうが動けば応戦できるようにしていた。

マルク「俺達も争いに来たわけじゃないんだが…まずはお前らのトップと話をさせてくれ」

スバル「トップって隊長達？」

ティアナ「目的を言いなさい！いきなり現れた怪しい人達をなのはあるに会わせるわけにはいかないわよ」

リュウキ「ディオがいれば楽なんでしょうが…」

マルク「リュウキ、さくら…こつちを頼めるか」

小声で話すマルク。

さくら「マルクさん、もしかして強行…」

マルク「こつちの話を通してもらえなさそうだしな…あいつらの来た方角に向かえば何とかなる…でだ啓人」

啓人「あまり乗り気はしないけど…無理に戦うのは僕も嫌だし、ギルモン」

ギルモン「分かったギルモン戦わないで先に進む」

と、一歩前に出た啓人とギルモン。

ティアナ「みんな、気をつけて！」

ギルモン「ギルモン進化！」

光に包まれ、ギルモンと一つとなる啓人。

デュークモン「デュークモン！」

スバル「何…あれ…」

リュウキ「隙だらけだな」

と、いつの間にか接近していたリュウキ。

エリオ「…!？」

とつさにデバイス・ストラダを構えるもリュウキのみねうちでバ
ランスを崩したエリオ。

さくら「動きを止めて、ウインディー風！」

そこに追い打ちをかけるかのように風ウインディーのカードを発動させたさくら。

マルク「今だ！」

と、マルクがデュークモンに飛び乗りデュークモンはマルクを乗せ
たままティアナ達を飛び越えて駆け出していった。

ティアナ「しまっ…って身動きが…」

スバル「そう簡単にはいかないよっ！」

と、空中に道を作りながら追いかけようとするスバル。

さくら「飛フライ！そして、力パワー！」

空中を飛びスバルの前方に回り込むと、力を加えた星の杖を振り下
ろしたさくら。

スバル「凄い…力…」

その勢いにより道から弾き飛ばされ地上に着地したスバル。

リュウキ「どうかご無事で…」

そう呟くりユウキ。

シャーリー「大きな反応一つと小さな反応一つがフォワード達を抜けて来ました」

はやて「そこそこやるみたいやね…せやけど…」

と、駆けていたデュークモンがその足を止めた。

マルク「どうし…」

見上げるデュークモンにつられて空を見たマルクは、宙に浮いている二人を目撃した。

なのは「スターズ1、高町なのは。目視で確認」

フェイト「ライトニング1、フェイト・T・ハラOWN。はやて、私達が出てよかったの？」

はやて「フォワードの子らをまいて来たんやしな、全力でやらんでウォーミングアップのつもりでやってみてな」

シャーリー「八神部隊長、なんでそんなに嬉しそうなんですかね…」

少し疑問に思うシャーリー。

デュークモン「感じる力、かなり大きい。降りて離れていた方がいい」

マルク「また戦力外か俺は… まあ、任せたぜ」

デュークモンから飛び降り観戦する方向性に決めたマルク。

そして、なのは・フェイトとデュークモンのぶつかり合いが始まる
うとしていたのだった。

第31話：機動六課へ…

啓人『相手は人だし、本気はダメだよ』

デュークモン「分かつている啓人。だが、感じる力は大きい…啓人にもしもの事があるようなら…」

腕に力を込めるデュークモン。

フェイト「なのは、まずは私が様子を見るから」

なのは「うん、久しぶりのフェイトちゃんの実戦。見せてもらうね」

と、デュークモンの方目掛けて降下してきたフェイト。

そして、互いの武器を一瞬ぶつけあわせすぐさま距離をとる両者。

フェイト「あの武具…かなりの強度…生半可な攻撃じゃバルディッシュにダメージが…」

デュークモン「啓人…あの武器を上手く手放させれば戦いを終わらせられる」

啓人『うん、やってみよう』

と、今度はデュークモンからフェイトに仕掛けていった。

そんな中、空のなのはの動きを観察しているマルク。

マルク「俺も観戦しているだけじゃダメだよな…」

変幻刀を構え駆けだしたマルク。

マルク「ロングスピアならデュークモンの後ろからでも届くだろ」

フェイト「！？、もう一人が攻撃」

啓人『マルクさん』

だが、そんなマルクの攻撃はいつの間にか接近していたなのはのデバイス・レイジングハートによって防がれていた。

マルク「お前…」

なのは「駄目だよ、フェイトちゃんの戦いの邪魔をしちゃ」

マルク（顔は笑っているが…近くだとかなり感じるな…俺なんかがこんなに感じるんじゃデュークモンは…）

はやて『二人ともその辺でええよ』

と、なのはとフェイトにはやてからの通信が入ってきた。

なのは「はい…って、いう訳で戦いはここまでだね」

マルク「…どういうことだ…」

フェイト「なのは…」

なのは「ここは私一人でも大丈夫だから、フェイトちゃんはフォワード達の方をお願い」

なのはに頼まれ飛んで行ったフェイト。

と、なのはから戦いの意思が無いことを感じたデュークモンはギルモンと啓人へと戻った。

なのは「お互い知らなきゃいけない事あるみたいだし…ねっ」

マルク（調子が狂うやつだな…だが、まあ俺達の実力じゃこいつの本気にはかなわないだろうしな）

冷静にそう分析していたマルク。

なのは「先行して私が君達を案内するから」

と、武装を解いて機動六課の服装に戻ったなのは。

マルク「それがこの世界の力か」

なのは「一部かな…詳しく知りたいなら後で教えてあげるからね」

さっき感じた笑顔の中の強い力はなくなっており、ただ本当に心からの笑顔を見せていたなのは。

そして、大きな建物の中へと案内するなのは。

ヴィータ「ん？誰だ、そいつらは」

なのは「あつ、ヴィータちゃん」

シグナム「主はやてが何かしていたようですが…」

なのは「これからはやてちゃんの所に行くんだけど、ヴィータちゃん達はどうする？」

シグナム「少しまだやる事があるので…後ほど伺つと…」

そんな訳で、歩いて行つた二人を見送るのは達。

ギルモン「あの二人も強いよ」

なのは「私達の力がわかるんだね」

ギルモンの顔を覗き込みながらそう言うのは。

啓人「ギルモンは…デジモンだしね…」

はやて「いきなり出勤させてごめんな、なのはちゃん」

そう言つて姿を見せたはやて。

なのは「待つてくれれば直接行つたのに…」

はやて「ウチもちょっと興味あつたしな…見たことないモンスターやな…それとデバイスみたいに变化する武器…」

マルク「見てたのか…俺達の戦い」

シャーリー「もちろんです。後でその武器見せてくださいね…後、あの小さい子の持ってた武器も改造し甲斐がありますね」

はやて「まあ…シャーリーはおいといてやな…話、聞かせてくれるか？」

そして、フェイトが向こうの騒動を鎮静させている間にはやて達はマルクから話を聞いた。

なのは「異世界から来て仲間を…」

マルク「元々横の一人と一体も別の世界の住人だからな…」

シャーリー「機動六課みたいに優秀な人材を集めているみたいな感じですね」

そう言いながらもマルクの武器に興味津々な様子のシャーリー。

マルク「そっちの話を聞く限りじゃ、大きな事件も終わってチームを解散するんだろ…」

なのは「だそうだけど…はやてちゃん…」

はやて「せやなあ…」

腕を組み考えるはやて。

だがそんな時、新たな展開が起ろうとはこの世界にいるメンバーは誰一人として思っていなかったのであった。

第32話：繋がる世界（前書き）

今回の話は自身の小説【仮面ライダーデイクイド・ミラクル】[『]現在執筆停止中』とのリンクです。

詳細は後書きにて

第32話：繋がる世界

なのは達がマルク達と接している頃・・・このエリアの外れでは・・・。

『急激な時空の乱れです』

『八神部隊長は？』

『ついさっきお出になられて』

と、ざわつき始める機動六課のスタッフ達。

ヴィータ「何の騒ぎだ？」

シグナム「この感じは・・・ヴィータ、お前は主達に伝えてほしい」

と、何かをヴィータに話すシグナム。

ヴィータ「また誰か来やがったのか？」

シグナム「心配はない・・・十年來の家族を出迎えるだけだ」

そう言うトデバイスを装備し、飛び立っていったシグナム。

ヴィータ「あっ・・・」

ここでシグナムの真意に気付いたヴィータ。

その頃・・・。

？「今度はどんな世界なんだ？キバーラ」

キバーラ「どうやら考えてる場合じゃないみたいよ」

と、その人物達の前に姿を見せたシグナム。

シグナム「久しいな・・・門矢士」

士「お前シグナムか！？だけど、この世界はあの時とは全然・・・」

そんな風に言う士にデバイス・レヴァンティンの剣先を向けるシグナム。

シグナム「例え顔見知りとて、不法な侵入者とは一戦やりあわなくてはならないな・・・」

キバーラ「どういう理屈なの・・・それ」

士「相手になってやる・・・この前の通りすがった世界じゃ思いきりやれなかったからな」

そう言いながら一枚のカードを手にする士。

そして、場面変わってなのは達。

はやて「そう言うことやったらな・・・」

リイン「大変です」

マルク「何だ？」

ヴィータ「ここにいた・・・はやて！」

はやて「は、はい？」

ヴィータはとりあえずはやてに話をした。

なのは「そつか・・・じゃあ私達も行こう」

啓人「話が見えないけど・・・」

ギルモン「・・・」

そんな中、表をじっと睨んでいたギルモン。

ギルモン「気を付けて啓人。何かが・・・来る」

ヴィータ「大体なんなんだ、こいつは・・・ザフィーラみたいな感じか？」

そうなのはに聞くヴィータ。

なのは「この子、結構感覚鋭いから・・・何か起こるならその前に阻止しないと」

はやて「ほならウチはサポートに戻る。このメンバーの指揮はなのはちゃんに任せる」

なのは「了解！ヴィータちゃん、まずはその場所に・・・」

ヴィータ「ああ、六課解散も近いのに大変な日になっちまったな」

マルク「なのはだったか・・・もう一人の奴に通信して俺の仲間と一緒に待機させとけ・・・」

ヴィータ「お前何を偉そうに」

マルクに突っかかりそうになるヴィータを止めるなのは。

なのは「何かあるんでしょ？」

マルク「さあな・・・」

マルクの発言になのはは承諾し、移動しながらフェイトに連絡を入れた。

同じ頃、仮面ライダーディケイドへと変身した士とやりあっていたシグナム。

ディケイド「腕は上がってるみたいだな」

シグナム「お前も腕を鈍らせてはいないようだ・・・未だ世界を巡っているのか」

ディケイド「ああ、ちょっと厄介なことになってるしな・・・」

と、その時空に突如漆黒の渦が出現した。

その様子は、この世界にいるみんなが目撃していた。

ヴィータ「なのは・・・」

なのは「十年前・・・」

啓人「十年前に何かあったんですか？」

リン「リンはまだ誕生してないですから、話を聞いただけですけど・・・」

なのは「ヴィータちゃんの話が本当ならまた同じように・・・」

そしてこちらははやて。

モニターから渦の様子を伺っていた。

シャーリー「部隊長・・・顔色が悪いみたいですけど・・・」

はやて「大丈夫や・・・ちょっとあの時の事、思い出してもうてな・・・」

フェイト「・・・」

キャロ「フェイトさん？」

フェイト「これが待機の意味・・・なの」

リュウキ「向こうにはデジタルな野生の獣もいるからな・・・マルク様の指示は正しいものだろう」

さくら「でもそれなら私達も行かなくていいんですか？」

フェイト「なのはも了承したってことだから・・・今は様子を見るしかないよ」

リュウキ（マルク様、どうかご無事で・・・）

そして、現れた渦の中に生体反応が示された。

シャーリー「部隊長・・・未知のエネルギー反応・・・これって・・・」

はやて（なのはちゃん・・・無茶はせんといてや・・・）

シグナム「土・・・」

ディケイド「何だ？」

シグナム「敵に時間は与えるな。以前の戦いの記憶・・・十年経っても私の中に残っている・・・主を蝕んだあの出来事を・・・」

ディケイド「俺にとっては最近の事だけだな・・・だけどこの前より厄介だと思うぜ」

シグナム「何故だ？」

ディケイド「敵側にもいるんだよ、仮面ライダーがな」

そして、渦の中の生体反応の主は渦を吹き飛ばすとシグナム・ディ

ケイドの前に降り立ったのだった。

第32話：繋がる世界（後書き）

前書きの通りこの話より自身の小説である『仮面ライダーディケイド・ミラクル』『現在執筆停止中』とリンクさせています。

実際に書き続けていたらストライカーズ時代のなのは達の世界に行かせようと前々から考えていたものです。

このディケイドをはじめとして、執筆停止中の作品を夢世界のストーリーとリンクさせていきたいと思っています

今回のようにリンクに当たって、時が過ぎた未来の話だったり多少設定が変わったりとありますが、読み続けていただければ幸いです。

ではでは

第33話：漆黒のレイヴ

シグナム「少しお前に似ているな」

ディケイド「よりによってあいつか・・・俺達が相手している連中の中でもトップクラス・・・俺と同じライダーの力を得た・・・」

レイヴ「自己紹介ぐらい自分でするさ・・・私は光輝ひかり、神代光輝じんたいひかり。
またの名を仮面ライダーレイヴ」

シグナム「お前と同じライダーとか言う奴だが・・・纏う空気が全く違うな・・・」

しっかりとレヴァンティンを握り締めるシグナム。

ディケイド「とりあえずこいつに掴まるなよ。厄介なことになる」

レイヴ「久しぶりに会ったと言うのに・・・挨拶もないのか？元・破壊者」

ディケイド「ネガの世界・・・ダークキバをどうしやがった」

レイヴ「君もおかしいね。ダークキバ・・・彼は君を攻撃してきたんだよ・・・ネガの世界を訪れた私から君を逃がすためにボロボロの身体を張ったからといって君が心配する必要は・・・」

と、レイヴの腕をかすめる銃弾。

ディケイド「もういい、お前を倒せばすむことだ」

レイヴ「なるほど、だがまだケータッチを取り戻してはいないね・
・真の力もなく私と再戦するなど・・・」

シグナム「知り合い同士に割り込まんですまないが、士には仲間がいる。それに・・・」

なのは「敵、目視で確認！」

レイヴ「駆けつけましたか・・・」

ヴィータ「士・・・か」

ディケイド「相変わらず小さいなお前は」

なのは「まあ、ヴィータちゃんだから」

ヴィータ「どういう意味だ！」

ギルモン「啓人！」

唸り声をあげていたギルモン。

マルク「何者か知らないが・・・」

ディケイド「まさかあの白服・・・おいシグナム・・・」

シグナム「この件が片付いたら説明する・・・行くぞ」

と、三方向からシグナム・なのは・デュークモンが攻めていった。

ディケイド「ダメだ、むやみに攻めたら」

レイヴ「初対面が多いですから・・・私の力を見せておきましょう」

と、シグナム・なのはをかるくいなしてデュークモンとの一騎討ちに持ち込んだレイヴ。

啓人『一気に決めよう』

デュークモン「よしっ・・・」

と、盾を構えエネルギーを充填させるデュークモン。

ディケイド「隙だらけだ、後ろだ！」

そう叫んだディケイド。

と、デュークモンの背後に現れたレイヴ。

レイヴ「この漆黒の翼・・・自由に動けるんだよ」

と、両腕でデュークモンを掴むレイヴ。

すると、レイヴの身体から黒いモヤモヤしたものが出現するとデュークモンを包み込んでいった。

啓人『な、なに周りが真っ暗に』

デュークモン「た、啓人」

シグナム「土！あいつのあの力は・・・」

そして、黒いモヤモヤが消えると大地にギルモンと啓人の姿があったのだった。

ディケイド「おい、しっかりしろ」

なのは「あの敵の能力を教えて」

ディケイド「すぐにわかる・・・」

なのはの問いにそれだけ答えたディケイド。

レイヴ「成程…良い武器だ」

と、黒いモヤモヤがレイヴの両腕に集まるとそこにデュークモンの装備である槍と盾が出現したのだった。

啓人「何で・・・」

ディケイド「あいつは人の力を奪う…その両手両足に一つずつな」

レイヴ「君の知り合いかどうかはこの際どうでもいい。まずは使ってみるとうか…ディケイド」

と、槍をディケイドに向けるレイヴ。

ディケイド「こいつらを連れて離れる！」

ディケイドが叫ぶのと同時に、なのはは啓人とギルモンを抱えて飛んだ。

【カメンライド・キバ！】

【フォームライド・キバ・ドッグ】

二枚のカードを使い、仮面ライダーキバ・ドッグフォームとなるディケイド。

レイヴ「ロイヤルセイバー…」

槍から放たれる一閃。

それをパワーのあるドッグハンマーで粉碎に向かうディケイド。

その間に、シグナムがレイヴに攻撃を仕掛けにいった。

レイヴ「…なら」

と、右足を振り上げたレイヴ。

シグナム「！？」

とつさに後方に回避し、レイヴに触れられるのを避けたシグナム。

レイヴ「その通りだよ…触れる事、それにより私の能力が発動する」

なのは「それじゃ接近戦が出来ない…」

レイヴ「そして…私の能力の発動は…いつでも可能だ…触れてさえ
いれば…ね…」

Dキバ「…まさか…」

と、いきなりなのはとシグナムの体の周囲に出現した黒いモヤモヤ。

啓人「あぁっ…」

なのは「ダメ…振り払え…ない」

シグナム「いつ私達に…」

Dキバ「最初の攻撃の時、二人の攻撃をやり過ごした際にすでに足
で触れさせて嫌がったのか」

レイヴ「君達の力を自分が体験出来るんだ…君達が見せてくれるよ
り早く知る事が出来る」

そして、モヤモヤに包まれてしまったシグナムとなのは。

デュークモン同様にその場に倒れる二人。

そして、モヤモヤはレイヴの両足にその力を与えていく。

レイヴ「右足の力…耐えられるかな？ディケイド」

と、レイヴの右足に収束される魔力。

Dキバ「これは…あの戦いで見せた…集束砲…」

レイヴ「スターライトブレイカー…」

足の振りを利用してなのはスターライトブレイカーを放ったレイヴ。

しかし、その威力の大きさはレイヴ自身耐えられるものではなく放った直後大きくバランスを崩し後方にはじかれた。

Dキバ「ううっ…」

レイヴのバランスが崩れたおかげで、直撃は免れたがその余波で弾き飛ばされキバからディケイドに戻されてしまった。

レイヴ「…凄まじいな…この私でさえともに放つ事が出来ない力…恐ろしい味方がいるじゃないかディケイド」

ディケイド「…まずいな…」

そして、その戦いをじつと離れた場所から見ていたマルク。

レイヴ「さて、君は何故参戦しないのかな？」

マルク「俺はこいつらみたいない力はないからな…一般人代表だよ」

そう告げるマルク。

レイヴ「違うな…君は力を隠し持っている…よければ私が引き出してあげようか」

と、両腕の武具を解除したレイヴ。

だが、その直後雷撃がレイヴの身体に直撃した。

さらに、追撃で二発の弾丸がレイヴに撃ち込まれた。

スバル「なのはさん！」

飛び出そうとしたスバルと制止させるティアナ。

フェイト「あまり効いてない・・・」

マルク「密に連絡するのが遅いんじゃないのか？」

空を見上げながらそう言うマルク。

そして、こちらは集まっているロングアーチメンバー。

はやて「堪忍したってや…敵に気付かれたら厄介やしな」

シャーリー「でも、敵の能力…こちらの力が強ければ強いほど、相手に奪われたら有利になっちゃいます」

はやて「シャーリー、ここ任せてもええか？」

シャーリー「八神部隊長、参戦されるのですか？」

はやて「間接的にな…彼がおるんやったら…十年前の時のようなあれが出来るやろっしな」

そう考え行動を開始するはやて。

マルク「援軍がきたはいいが状況は変わってない。何か手はないのか？」

ディケイド「あるにはある…が、まだ足りない…」

一枚のカードを取り出すディケイド。

しかし、そのカードは使えない事を示しているのか全体的に色が薄くなっていた。

エリオ「フェイトさん、指示をお願いします」

フェイト「うん、でも気をつけて…十年前と同じだけど…相手は格段に強い」

リュウキ「マルク様…」

さくら「状況がよくわからないんですけど…」

マルク「今の所は静観しておけ…次のラウンドが始まるぜ」

援軍が到着し、戦いはさらに激しくなっていくのである。

第34話：力を一つに

レイヴ「新たに七人…それぞれ力を試してみたいが…」

ヴィータ「こつちにもいる事を忘れてんじゃねえ！」

と、気配を消して隠れていたヴィータが飛び出しギガントフォームのグラーファイゼンをレイヴに叩き込んだ。

しかし、その瞬間高出力の光の砲撃により弾かれたヴィータの攻撃。

レイヴ「あの剣士と比べると一撃の攻撃力は高いようだ…彼女の力が無かったら私とて大きなダメージを受けていただろう」

ヴィータ「今のはなのはの砲撃…」

ディケイド「余計な攻撃はするな！そいつに触れたら力を奪われる！」

ティアナ「奪われるって…じゃあなのは隊長やシグナム副隊長は…」

シグナム「不覚を取っただけだ…それにレイヴに使われていてもまだ私も炎の魔力は扱える…」

レイヴ「まあ、奪うというよりはコピーすると言った方が正しいからね…」

キヤロ「…私の龍達の力もコピーされるんでしょうか…」

心配そうにそう告げるキャラ。

フェイト「そうだとするとキャラの龍を戦力にいれるわけにはいかないよね…」

エリオ「手数で攻めれば…」

リュウキ「マルク様から聞いた話の内容から考えると、可能ではあります…」

ディケイド「レイヴ自身の力も強いんだ。生半可な攻撃しても反撃されて終わるぞ」

レイヴ「一番頑張らないといけない君が攻めに転じないのでは、君達の勝ちを訪れないよ」

はやて「それがそうでもあらへんのよね」

と、そこに登場してきたロングアーチのトップであり機動六課を支えてきたはやて。

なのは「遅いよ…はやてちゃん」

と、すんなり起き上ったなのは。

シグナム「やられていたふりか…」

なのは「出来る限り回復させておきたかったし…」

レイヴ「…ならば見せるのか？君の最大砲撃を」

なのは「見せるのは私のじゃないよ」

フェイト「ティアナ、みんなを連れて後方に」

ティアナ「えっ、フェイトさん！？どちらに…」

と、なのはの側に集うフェイトとはやて。

ディケイド「信じられない気分だが…本当に…この三人なんだな」

先ほどから取り出していた一枚のカード。

さらに二枚のカードを取り出し眺めるディケイド。

どれも薄くなっているが、そこにはまだ幼さの残るなのは・フェイト・はやてが描かれていた。

すると、なのは達から流れ出す魔力がディケイドの持つカードに注がれていった。

ディケイド「カードの絵が…変わる…」

そして、今現在のなのは達の姿へと変化し再びカードは色を取り戻していた。

レイヴ「何かが変わりましたね・・・」

ディケイド「覚悟はできてるか？」

なのは「それはもちろん・・・」

フェイト「行き続ける覚悟」

はやて「大事な家族が一人帰ってきたんや・・・盛大にやらんとな」

そしてディケイドは、三枚の中からは描かれたカードを抜いてディケイドライバーにセットした。

【ファイナルフォームライド・な、な、な、なのは】

すると、なのは達三人のデバイスが中に浮かぶと不思議な力でそれ等は一つとなった。

はやて「あの時と同じやな・・・」

そしてそれは、大きな魔杖砲へと姿を変えた。

レイヴ「こちらでもそれ相応に対処しなければなりませんね・・・」

と、足にコピーしていたなのはの力を右腕に移動させ、更にシグナムの炎の力を付加させた。

なのは「スタンバイオッケー！」

魔杖砲を三人で持ち、レイヴに照準を合わせた。

そしてレイヴは、デュークモンの盾を再び左腕に装備し後方に向けた。

ティアナ「あれもデバイスなの・・・」

エリオ「隊長達のデバイスが一つになって・・・」

ディケイド「さあて・・・決めてやるぜレイヴ」

そして次なるカードをドライバーにセット。

【ファイナルアタックライド・な、な、な、なのは】

ディケイドとなのは達の力を一つにした、極大砲撃がレイヴに向け放たれる。

それと同時にレイヴは、盾からエネルギーを放ち支えを作った。

レイヴ「いきますよ・・・」

支えにより安定を得たレイヴは、なのは達の砲撃を相殺するように炎を纏ったスターライトブレイカーをぶつけた。

なのは「私達は強くなった・・・あの時はまだはやてちゃんを助け出すのにも苦勞してたけど・・・」

ディケイド「俺も闇のライダー達に負けっぱなしは嫌だから・・・」

「

レイヴ「これが君達に宿る結束の力か・・・見事だったよ・・・」

と、次第に押され始めるレイヴ。

そして次の瞬間、レイヴのスターライトブレイカーは粉碎されなのは達の砲撃にレイヴは飲み込まれていったのだった。

第35話：意外な救援とその後…

ディケイド「やったか」

マルク「いや・・・」

はやて「みんな気を抜かんといてや！」

はやての言葉に、レイヴの生死に注目する一同。

レイヴ「・・・あと一歩・・・でしたかね」

なのは「！？・・・まだ動けるの？」

驚いた表情を見せるなのは。

レイヴ「君の力のおかげでしたか・・・まともに受けていれば消し飛んでいたでしょう」

フェイト「スターライトブレイカーが私達の攻撃を弱めていた・・・」

ディケイド「これ以上は・・・あいつ等も残っている力が・・・」

レイヴ「君のその力は素晴らしく危険だ、ディケイド。やはりここで・・・」

と、空中からディケイドに向かっていくレイヴ。

スバル「まずいよっ」

と、飛び出していったスバル。

しかし、そんな時

【カメンライド・ファイズ、ブレイド、キバ】

その音声と共に、ディケイドの前に現れた三人の仮面ライダー達。

ディケイド「これは・・・」

『君はここでやられる器じゃないだろ・・・士』

ディケイド「何でここにいいのかは後にしといてやる」

と、三枚のカードを取り出したディケイド。

そして【ファイナルフォームライド】で、三人のライダーを変化させた。

スバル「何なの、これ」

フェイト「私が剣を・・・」

シグナム「すまない・・・ここは私にやらせてほしい」

そう言って前に立つシグナム。

ティアナ「私達も力になるわよ！」

フォワードの四人は協力して、ファイズブラスターを持ち構えた。

ディケイド「タイミングは一瞬だ・・・シグナム・・・」

シグナム「問題はない・・・」

そう言いながら、ブレイドブレードを握りしめるシグナム。

ディケイド「後は、キバアローだが・・・」

デュークモン「ここは・・・」

と、颯爽と姿を見せたデュークモン。

マルク「いつの間にか回復して格好よく登場とは・・・」

啓人「あいつを強くさせたのは僕達にも原因があるから」

そして、キバアローを手にするデュークモン。

レイヴ「・・・」

そんなディケイド達のやり取りをじっと見ているレイヴ。

ディケイド「一つ聞く・・・何故邪魔してこないんだ？絶好のチャンスだろ？」

レイヴ「ディケイド・・・そして、予定外の救援者・・・君達の最後の力を受けてみたい」

なのは「あの人…どう言うつもりなの」

レイヴ「なのはと呼ばれていたね…君達だって強くなるために色々やってきたのだろう？私は君達の力をコピーすれば確かに強くなれるが、それは本来の私の力ではないからね」

そう告げるレイヴ。

ディケイド「なら、これ以上強くなられる前にここで倒す！」

そう言いながら新たなカードを三枚取り出したディケイド。

ティアナ「シグナム副隊長！」

シグナム「合わせていくぞ」

デュークモン「啓人…」

啓人「うん、絶対成功させる」

そして、ディケイドが【ファイナルアタックライド】のカードを発動。

それと同時にブレイドブレードの斬撃、ファイズブラスターの砲撃、キバアローの射撃が同時に放たれた。

レイヴ「君達の強さを確認して、私は更に高みに行く事が…」

そして、その身で全ての攻撃を受けたレイヴ。

はやて「…今度こそいったんやるか…」

リュウキ「マルク様…力そのものは消えていますですが微かに…」

マルク「仮面ライダーって力は相当強いものなのか？」

土煙が辺りからなくなると、大地に仮面ライダーの変身が解除された光輝が立っていた。

ディケイド「いくらなんでも強すぎだろ…」

光輝「気にする事はない。君やほかのライダー同様…私にもフォームチェンジが出来る…見た目は変わっていないが防御力が高いフォームに変えていただけだ」

と、光輝の戦う意思がなくなったのを感じてかディケイドは変身を解除した。

士「大人しく捕まっとくお前じゃないだろ」

光輝「今回はこの世界に救われたな、士。ダークキバと言いつつ士は良意味方がある…」

と、光輝の足元に黒いエネルギーが出現し始めた。

はやて「どないするつもりや？」

光輝「大人しく引き上げるさ、この世界から。士とはまた何処かの世界で会うだろう。その時までにはケータッチを取り戻しておいてく

れよ」

そして、黒いエネルギーに包まれた光輝はその場から消えたのであった。

フェイト「一件落着…なのかな」

はやて「ほなら全員広い部屋にでも集合や。色々話もあるやろしな」

マルク「リュウキ、俺達の仲間の指揮はしばらくお前がとれ。俺は少し用がある」

リュウキ「了解しました、マルク様」

そして、はやて達の案内で場所を移動する中その場にとどまったマルク。

マルク「姿ぐらい見せたらどうなんだ？」

大樹「誰とも接触せずに次の世界に行くつもりだったけど…何か用かな」

銃型のディエンドライバーを手に持ち姿を見せた人物は海東大樹。

マルク「お前もライダーになれるんだろ」

大樹「…そうだね。こいつで…でも、君には何の関係も…」

マルク「お前は強そうだしな…俺の仲間にならないか？」

突然そう告げたマルク。

大樹「唐突だね…君の仲間になって何か僕に利益が…」

マルク「俺達も色んな世界に行く…言っている意味がわかるか？」

大樹「…僕の目的はお宝だ…君達と同行してお宝を集められるのなら…行く価値はあるかもしれないね」

しばらく静かな時が流れたが、マルクは背中を向け歩きだした。

マルク「俺達もまだしばらくこの世界にいる…それまでに返事を決めておいてくれ」

そして、そのままはやて達が向かった方へ歩いて行くのであった。

第36話：拳闘と銃撃とライダーと

さくら「あつ、マルクさん」

遅れてマルクがやって来たのをさくらが発見した。

マルク「随分と和やかムードだな」

はやて「それぞれの話を聞いたんやけどな」

士「お前達も世界を渡っているのも驚いたが、はやて達が十年後の姿になっているのにはもつと驚いたな」

なのは「私達だけ年を重ねたみたいな感じで複雑だね」

フェイト「世界だけじゃなく私達の世界だと時間まで飛んだのかな…」

ヴィータ「あたしらは変わらないんだけどな…」

シグナム「お前と久しぶりに剣を交えられて良かった」

士「そっぴゃマルやザフィーラもここにいるのか？」

はやて「別の所におるんやけど…会いたいんやったら呼ぼうか？」

士「いや…忙しい所に邪魔してるわけだしな…もう十年前の世界に行ってしまう事もないだろうし…」

士はかつて出てきた幼いなのは達の姿のカードが、全て今のものは達の姿に変わっているのを確認しながらそう言った。

フェイト「話の問題は…彼らの仲間の件なんだけど…」

エリオ「隊長や副隊長はどう考えているんですか？」

シグナム「…私やヴィータも思う所はあるが…ここに三隊長が揃っている以上判断は任せるしかないだろうな」

なのは「とはいっても六課のリーダーははやてちゃんだし」

フェイト「必然とはやてに決めさせちゃう事になるのかな…」

はやて「…反論とか出さんというや…ウチとしてはやな…フォワードの子らを訓練として送り出したいんと思うとるんよ」

そう話していくはやて。

なのは「いいかもしれないね。色々経験しておけば役に立つと思うし」

なのははやての意見に納得した。

フェイト「ちょっと待って、スバルやティアナは良いと思うけど…エリオやキャラはまだ小さいし…知らない所に行くのは…」

ヴィータ「過保護だな…やっぱり」

シグナム「主はやて…反対意見というわけではないのですが…」

はやて「ん…言つてええよ」

そう告げるはやて。

シグナム「J S事件が一段落したとはいえ、まだ予期せぬ事が起こる可能性もあります。それに他の世界で竜召喚でのトラブルが起きた場合も考えるとキャロとパートナーであるエリオは六課の方に残した方がよいと…」

キャロ「シグナム副隊長…」

シグナム「そう言うことだろう…テストロッサ…」

フェイト「シグナム…」

なのは「フェイトちゃんは隊長だけど、こう言う所はシグナム副隊長に負けちゃうね」

フェイト「もう、なのは…」

マルク「まあ、好きにしていいいが…」

はやて「とまあ…ウチらで勝手に話を進めてるんやけど…フォワード達の意見も聞きたいんやけど」

スバル「意見つて…ねえ、ティア」

ティアナ「私に振られても…でも、なのは隊長の言う通り経験になるのなら良いと思いますけど…」

フェイト「エリオとキャロは…」

エリオ「僕達が勝手に決めるわけにはいきませんから…六課でまだやらなきゃいけない事があるなら僕達は…」

キャロ「はい」

はやて「そう言うことで決定やな。スムーズに決まって良かったな」

マルク「で、お前はどうするんだ？仮面ライダーさん」

と、じつと周りの話を聞いていた士にそう言うマルク。

士「悪いが俺は世界を守らなきゃいけないんでな…他のライダー達の世界を再び訪れたりな…レイヴも生きている…レイヴの仲間達も世界に散っているしな」

マルク「なら何処かで会えるかもしれないな…」

士「それはどうか…俺の行く世界はろくな事が起きないしな」

シャーリー「はいはい、そういう話はここまでにして…せつかくだからみんなでパーティーでもやりましょう」

はやて「…！シャーリー…いきなり現れて…って、今まで何してたんや？」

シャル「パーティーの準備です」

士「シャルカ…」

シャル「こちらの世界では十年ぶり…になりますね」

マルク「楽しむのいいが…一応仲間になるこの二人の戦力を知りたい…ある程度はリュウキ達とのやり合いで分かっているが…初めてみるデバイスとやらの情報もな…」

はやて「マツハキャリバーとクロスミラージュ…本来なら協力してくれたとはいえ見ず知らずの人に情報を渡す事はしないんやけどな…条件をつけて貸し出してもええよ」

そう言ってきたはやて。

マルク「条件か…なんだ？」

はやて「スバルとティアナ…今より強く育ててやってや…二人ともエリオやキャロ同様に素質あるええ子達や。デバイスの情報もデバイスの強化のためやったらな…」

リュウキ「そう言う事でしたら良い技術者がいますよ…」

ティアナ「どんどん話が進んでるけど…」

スバル「でも、隊長や副隊長に少しでも強く近づけるならいいよねティア」

ティアナ「…そうね…戻ってきた時なのはさん達を驚かせるのも…」

なのは「ほう…楽しみだねフェイトちゃん」

フェイト「えっ、私は…別に…」

そんな訳でいつの間にか準備されていたパーティー会場にて僅かな時を楽しむメンバー達。

そして…時は翌日…。

部屋を借りてゆっくり休む事が出来たマルク達や士。

キバーラ「あんまりゆっくりしている場合じゃないんじゃない？」

士「相変わらず何処かに消えていきなり現れるな…」

マルク「行くなら先に行った方がいいぞ…俺達も今日中にはこの世界を出るからな」

士「…そうだな…」

ゆっくり起き上がると部屋を出ていった士。

はやて「…もう、行ってしまうんか？」

部屋を出た士を待っていたかのようにそう告げるはやて。

士「またこの世界を危険に巻き込むかもしれない…。だがそうなたらまた止めに来る。そうならなかったとしても全て終わらせたら挨拶ぐらいは…」

はやて「ウチだけすつかり成長してもうて…複雑なんやけど…それでもウチらは家族だよ」

士「ああ…シグナム達によろしく言っておいてくれ」

それだけ伝えるとはやてに背を向け歩きだす士。

マルク「あの場面に水を差すわけにはいかないしな…と、ディオがこっちに合流次第戻るから準備しておけよ」

啓人「はい」

そして、いつの間にか士とキバーラがこの世界からいなくなっ**て**しばらくの後…。

シャーリー「これがデバイス達のデータ。無くさないように…
と言っても元データはまだこっちにあるけど」

シャマル「一応セットのナックルの方のデータも入れてあるから…
」

スバル「ありがとうございます」

エリオ「あの…キャロと少し話したんですけど…」

と、ある事をシャーリー達に伝えるエリオ。

そしてこちらは、スターズ&ライティングの隊長・副隊長達。

なのは「私達も立ち止まってちゃいけない」

フェイト「うん・・・」

シグナム「いつかまたレイヴとやり合う事もあるかもしれぬからな」

ヴィータ「結局良い所はお前らが持つていったからな」

なのは「スバルとティアナ・・・どう成長するか楽しみ」

そう言つて微笑むなのは。

そして、時はお昼過ぎ。

ディオがマルク達と合流していた。

マルク「マリアンやクリスの方は上手くいったのか？」

ディオ「まあええ感じやな・・・」

はやて「お待たせや！」

と、仲間達を連れはやてがマルク達の元にやって来た。

なのは「遅くなってごめんなさい」

マルク「準備は良いんだな？」

スバル「うん、ばっちり」

そう答えるスバル。

はやて「色々な事はスバル達に聞いてや」

キャロ「スバルさん、ティアナさん。帰ってくるの待ってます」

ティアナ「ありがとう、キャロ」

ディオ「ここにホールを開くんか？」

そう聞いてきたディオ。

マルク「…ああ、そうだな…」

曖昧な返事に多少戸惑うディオだったが、いつものように宙にホー
ルを出現させた。

シグナム「異世界には様々な力があるようだな…私も少し興味を持
ったよ」

マルク「こいつを渡しておく。何かあれば連絡できる…」

はやて「了解や…ほな…」

はやて達に見送られ、スバル・ティアナと共に自分達の世界へと戻
っていくマルク達。

そして…。

さくら「ほえ…」

ホールから出たさくらはいきなりそんな声を上げた。

大樹「やあ、待ちくたびれたよ」

リュウキ「マルク様…こいつは確か…」

マルク「そうだ。あの時ライダーを出して助けた奴だ…一応声をかけておいたんだが…そう言えばお前も世界を越える力を持っていたんだっけか」

大樹「一応自分の意思表示という事で自分からこの世界に来た…つまらなくなったらいきなりいなくなると思うが…それまでは協力してあげてもいい」

マルク「異世界で宝を狙うのはいいがやり過ぎるなよ」

大樹「出来る限りはね…」

そう言い笑みを見せる大樹。

スバル「そう言えば私達が使ったあの武器もライダーって人が変化したんだよね」

ティアナ「こんな事で驚いてたら持たないわよ…私達はこれからもっと知らない世界にいくんだろっから」

気を引き締めるように言うティアナ。

そして、マルク達が戻ってきたのを知りマリアン達が集まってきた。

色々な展開が起こったものの、乗り越え新たな仲間を増やしたマルク達。

そして、次なる世界は…。

第36話：拳闘と銃撃とライダーと（後書き）

なのは達の世界に加えて、自分の小説【ディケイド・ミラクル】とのリンク小説となりましたが、ディケイドも含めて後々またリンクさせていきますので、どうぞよろしくです

第37話：孤独なゴーカイ戦士

マルク「相変わらずやっているな…」

そう呟くはこの国の主であるマルク。

そして、いつもの場所では…新たにスバル・ティアナを加えての早朝特訓。

その隅の方で見学している大樹。

ディオ「異世界の人達うちゅうのは特訓好きなんかな」

リュウキ「強くありたいと思えばこそ…」

マルク「なら、リュウキも参戦してみるか？」

リュウキ「機会があれば…」

マルクの言葉にそう返すリュウキ。

そして、いつもの朝食時間。

スバル「おいしーっ」

満面の笑みでそう言うスバル。

マリアン「喜んでもらえると嬉しいです」

さくら「はいっ」

そう言うマリアンとさくら。

シエル「前の世界では大変だったようだな」

マルク「スバル達の世界での事か・・・まあな」

タイチ「すまないな啓人。負担かけさせちまった」

啓人「僕とギルモンなら別に・・・いい経験になったし」

美琴「一応こっちの作業もひと段落したし、次の世界はついていけるけど」

マルク「シエル！」

シエル「もちろん世界探索はしているよ。今度の世界は・・・どちらかというとお前達の世界に近いか？」

大樹「...僕？まさかライダーがいる世界とか言うのかい？」

そう聞いてきた大樹。

シエル「まあ、行けば分かるだろうな...今回も同行はパスしようかな」

マルク「なら...」

大樹「少し興味はあるね...同行するよ」

早くも一人のメンバーが決定した。

美琴「なら私も、やっぱり少し身体動かしてないよね」

ティアナ「強くなる…その思いで来た以上私達も行くわよ」

スバル「オッケー、ティア」

そして、スバル・ティアナも参加決定した。

マルク「リュウキは今回休んでろ…というより特訓やっつけ」

リュウキ「しかし、マルク様…」

タイチ「特訓なら俺達も付き合うぜ」

アグモン「同じ強くなりたい者同士だしね」

ギルモン「ギルモンも頑張る」

リュウキ「…わかりました。それがマルク様の御希望ならば…」

と、言う事でさくらも残る事に決まり今回のメンバーが決定した。

そして、準備をして庭に集合したメンバー達。

ディオ「ほな、早速行くで〜」

目の前に開かれたホール、そしてマルク達は次なる世界へ旅立って

いったのだった。

マルク「よし、到着…」

マルク達が異世界に降り立った直後、いきなり目の前に見たことない怪物がこちらに駆けていた。

スバル「えっ、えっ…」

大樹「いきなりはごめんだよ」

と、大樹は素早くディエンドライバーを取り出し構えると連続して銃弾を放ち怪物を目の前から引き離れた。

ワニーゴ「貴様！俺を新たなザンギャック幹部のワニーゴと知っての…」

大樹「知らないよ」

あっさりそう言うともた銃弾を放ちワニーゴを後退させる大樹。

ワニーゴ「貴様ら、これでも食らえ！」

と、ワニーゴは口を開くと牙型の刃を多数放った。

美琴「さっきは驚いたけど…一呼吸おけば…」

周囲に電撃を放ち刃を防ぐ美琴。

スバル「セットアップ！ウイングロード！」

瞬時にデバイスの力を開放させ刃を交わしワニーゴにナックルを打ち付けたスバル。

ワニーゴ「グッ…あいつから上手く逃げ切れたと思ったら…こんな奴らに…」

ティアナ「あいつ？」

大樹「何か来るね」

と、空より誰かが飛び込んでワニーゴとマルク達の間而降り立った。

？「ようやく見つけたぞザンギヤックの残党」

マルク「なんだ、あの銀色の奴は…」

大樹「…ああいうのは…確か…」

ワニーゴ「ゴークアイシルバー…」

ゴークアイシルバー「マーベラスさん達に任されたこの世界を守るために…そして、マーベラスさん達から託されたスーパー戦隊の力で…」

と、ゴークアイシルバーのベルトから出現した物を手にして持っていた機会の中にいれた。

ゴークアイシルバー「ゴークアイチェンジ！」

【シンケンジャー！】

その音声と共にゴークイシルバーはシンケンジャーのシンケンレッドへ変身を遂げた。

シンケンレッド・G「シンケンマル、行きますよ！」

武器であるシンケンマルでワニーゴを切り刻んでいくシンケンレッド。

大樹「これはどう言う事だ…あの姿はシンケンジャー…かつて見た事がある…」

マルク「何か知ってるのか？」

大樹「確かめてみないといけないかな」

そう呟く大樹。

かなりのダメージを受けふらついているワニーゴ。

そして、シンケンレッドはゴークイシルバーの姿に戻った。

ゴークイシルバー「これで決めさせてもらいます、ゴークイチェンジ」

と、イカリ型のアイテムであるゴールドアンカーキーを使用するゴークイシルバー。

ゴークイシルバー「ゴークイシルバー！ゴールドモード！」

美琴「姿がまた変わった…」

ゴーカイシルバー「ゴーカイレジェンドリーム！」

ワニーゴ「!？」

そして、ゴーカイシルバーの攻撃を受けたワニーゴは爆発と共に消滅したのであった。

鎧「よしっ」

変身を解き、伊狩鎧の姿に戻った。

マルク「おい、大樹」

と、いきなり外の前に立つ大樹。

鎧「貴方は…」

と、ディエンドライバーの銃口を外に向ける大樹。

スバル「えっ、何をして…」

大樹「別に僕が深くかわる必要はないけど…知りたい事がある。何故君がシンケンレッドの力を持っている」

そう尋ねる大樹。

鎧「…いきなりそんなものを向けてくる奴に答えるつもりはありません」

せん」

マルク「とりあえず…二人とも落ち着け」

鎧・大樹「!？」

二人に変幻刀を向けるマルク。

ティアナ「あいつも結構過激なんじゃないの？」

マルク「とりあえずお前がこの世界の住人なら…こつちの話を聞いてほしいものだ。それから大樹の質問に答えてくれりゃいい」

そう言いながら変幻刀を戻すマルクなのであった。

第37話：孤独なゴーカイ戦士（後書き）

前回までがライダーだったので、今回は戦隊を入れてみました
この話の詳細は、次話で鎧が話してくれますので…
ではでは

第38話：VSザンギャックの残党

落ち着いた場所でお互いに話することに決めさせたマルク。

マルク「こつちの話はこんな感じだ…大樹の事も理解したか？」

鎧「はい…貴方がこのスーパー戦隊の世界に来たときは、シンケンジャーがこの世界を守っていたって事なんですね」

大樹「僕にはあまり興味がない話だけどね…どちらかと言えば君の持っているアイテムが気になる」

鎧「これは渡せませんよ。マーベラスさん達にこの世界の事を託されているんですから」

マルク「それで…鎧だったか…お前の方の経緯を教えてほしいものだが…」

鎧「この力を手に入れた経緯は長くなるので…で…」

そして、鎧は話し始めた。

ザンギャックからこの世界を守った鎧やマーベラス達、ゴカイジャ一の面々。

しかし、マーベラス達は次なるお宝を求めこの世界を離れることを決めていた。

そして、鎧にこの世界の事と自分達以外のレンジャーキーを託しハ

カセの手によりゴークaiserラーもパワーアップさせてもらっていた。

鎧「それでマーベラスさん達の代わりに34のスーパー戦隊の力とこの世界を守っていく役目を受け継いで俺がここにいてわけです」

そう説明した鎧。

ディオ「戦力として申し分ないんとちゃうんか？」

鎧「戦力？」

大樹「彼等は色んな世界にいて仲間を集めているってことだよ…つまり君の力に惹かれたのさ」

そう告げる大樹。

鎧「ありがたい話ですけどお断りします」

マルク「…この世界の為か？」

鎧「はい、さっきやつつけた奴…あれ以外にもまだザンギャックの残党がいます。それを全て倒すまでは…」

そして、しばらく静かな時が流れる。

ティアナ「自分達が力を貸してやつつけてやる…でしょ？」

マルクが何か言おうとした瞬間に、ティアナがそう告げた。

スバル「ティア…」

マルク「よくわかってるな…それでどうだ、鎧。その敵がこの世界からいなくなれば一先ずは安心だろ？何かあればすぐにこの世界にも戻れる」

鎧「…わかりました。ですがザンギヤックを倒してからその話の件は…」

マルク「ああ、決まりだな」

ティアナ「決定はいいんだけど…どうやって探すのよ…その敵を」

鎧「実は…奴らのアジトはわかってるんです…残りは三体なんです
が…」

大樹「残党とはいえ相手は今まで仲間と一緒に倒してきた怪人…一人では無謀ということか」

マルク「ならそのアジトに乗り込んで分断させるか…」

スバル「ティア！私達のコンビネーションで」

ティアナ「まあ、油断しないようにね」

大樹「僕はひとりで構わないよ…君がついてくるのなら好きにすればいい」

マルクにそういう大樹。

マルク「俺は鎧と一緒に行く…構わないか？」

鎧「わかりました…では、行きましょう」

鎧の案内でアジトの近くに移動したメンバー達。

スバル「街から離れた山の中…」

ディオ「せやな…あんな怪物が街の中におつたら大騒ぎや」

マルク「ディオはティアナ・スバル組と一緒に行動してくれ…能力的に相性いいだろうしな」

ディオ「了解や…」

大樹「じゃあ、彼等への挨拶は…」

と、いきなりディエンドライバーで銃弾を放つ大樹。

『！？』

すると、こちらの存在に気付き戦闘態勢を取る残党達。

鎧「鳥型のザンギヤック、バーミード。機械仕掛けのギガイラス。そして、司令官のワルズ・ギルに似た風貌のジェレイド…この三体です」

ジェレイド「すでにここを嗅ぎつけていたか…たった一人のゴーカイジャー」

鎧「たった一人でもお前達を全て倒すまで戦い続ける」

バーミード「で、どうするのよ？」

ギガイラス「敵なら倒すのみ」

マルク「悪いがな…余計な茶番には付き合わない主義なんだな」

と、いきなり敵味方一人一人の後方にホールが出現した。

ジェレイド「何!？」

そして、一瞬でこの場から誰の姿も消えてしまったのであった。

第39話：守るべき世界の為に

スバル「ティア！」

一緒になって落ちてきたティアナを受け止めるスバル。

ティアナ「味方にぐらいこういうことするって教えておきなさいよね」

と、スバル・ティアナの前に同じようにホールから落とされたザンギャックの残党の一人・バーミード。

バーミード「どうやらお前達は私に倒される運命みたいね」

そう言う羽ばたくバーミード。

ティアナ「さつさと片付けるわよ、スバル！」

スバル「オツケー！ウイングロード！！」

と、周辺空域に張り巡らされた魔法力による道。

バーミード「なにつ」

ティアナ「空域戦が出来るのは、貴方だけじゃないのよ！」

スバル達が開戦した頃…。

大樹「一番楽しめなさそうな相手だね」

ギガイラス「お前倒す、仲間に加勢に行く」

大樹「それは残念だ…」

【カメンライド・ディエンド】

空に向けて放たれるエネルギー。

ディエンド「君は加勢には行けない。僕に倒されるからね」

そして、残る一組…。

ジェレイド「貴様とやり合うとはな」

ゴークイシルバー「小手先抜きで…初めから全開で行きます」

と、ゴークイシルバーはすぐにゴールドモードを発動させた。

ジェレイド「貴様らを倒し、新たなザンギャク軍団を作り上げるのだ」

三地域にて行われている戦闘。

バーミードの素早い動きに翻弄されながらも、ウイングロードを利用したスバルの高速戦法とティアナの遠距離攻撃でバーミードを押し始めていた。

対して、ギガイラス戦。

ここはディエンドの一方的な戦いとなっていた。

【ファイナルアタックライド・キ、キ、キ、キバ】

キバアローを放ち、ギガイラスの身体を貫いていった。

ディエンド「君の場合生命体と言うよりは…」

ギガイラス「…倒す…お前を…倒す…」

ディエンド「つまらない相手だったけど…その執念には恐れ入るよ…」

【ファイナルアタックライド・ディ、ディ、ディ、ディエンド】

しかし、次に放たれた自身のファイナルアタックライドによりギガイラスの身体はバラバラに吹き飛ばされてしまったのであった。

ディエンド「さて…」

そして、こちらはジェレイド戦。

次々と攻撃を仕掛けていくゴーカイシルバー。

その攻撃を受けながらも、しっかりと反撃しゴーカイシルバーにダメージを蓄積させているジェレイド。

マルク（身体の強度はジェレイドが上か…この世界を守るっていう強い思いは買うが…）

ジェレイド「ふんっ！」

ジェレイドの一撃が、一瞬ゴーカイシルバーのゴークイスピアを弾いた。

ゴーカイシルバー「なっ…」

ジェレイド「これで終わり…」

マルク「…にさせるわけにはいかないな」

と、大剣に変化させた変幻刀を思い切り振るいジェレイドを退けさせるマルク。

ゴーカイシルバー「マルク…」

マルク「一度この世界を守ってからたった一人でこの世界を守り続けてきたんだろうけどな…本当はひとりじゃなかったはずだぜ」

呟くようにそう告げるマルク。

ジェレイド「子供がしゃしゃり出てくる場ではないぞ！」

気合と共にマルクに向かって飛び込んでいくジェレイド。

と、その間に入りゴークイスピアでジェレイドを止めるゴーカイシルバー。

ゴーカイシルバー「すみません、自分が頑張らないと思って思いが…焦りを生みだしていたみたいです…でも、考えてみたら俺は一人じ

やない…レンジャーキーに…マーベラスさん達の思いが込められていますから」

そして、ジェレイドを押し飛ばすとゴークアイスパアーを構えた。

【ファゝイナルウェゝイブ】

ゴークアイシルバー「この一撃で…ゴークアイレジェンドクラッシュ！」

と、六人のスーパー戦隊が現れジェレイドを切り刻んでいく。

そして、最後にゴークアイシルバーがその一閃を放った。

ジェレイド「貴様…何故…貴様一人ごときに…」

ゴークアイシルバー「俺は一人じゃない…いつだって俺は…俺達は六人のゴークアイジャーだ」

そして、倒れると共に爆発したジェレイドなのであった。

バーミード「嘘でしょ…ギガイラスも…ジェレイドの反応も消え…」

わずかな集中の途切れ…それをスバルは見逃さなかった。

スバル「デイベインバスター！」

バーミード「がつ…」

上からのスバルの懇親の一撃で、地面に叩きつけられるバーミード。

そして、その直後バーミードが見た光景は周囲に広がる魔力弾の数だった。

バーミード「いつの間に…」

ティアナ「いくら動きが素早くても…スバルの一撃で地面にめり込んでたら動きようないでしょ？」

スバル「いいよ！ティア！」

スバルの言葉と同時に、バーミードに放たれた無数の魔力弾。

そして、バーミードは爆煙に包まれながら消滅していったのだった。

その後、ディオによって仲間達は再び一か所に集められた。

大樹「余裕すぎてつまらなかったよ」

鎧「みなさん、強いんですねこれで残党も全て…」

スバル「ねえ、ディオ…マルクの姿がないような気が…」

ディオ「マルクは何や用がある言つてな…」

そして、そのマルクは…とある林の中を歩いていた。

マルク「…俺達の戦いを見ていたな…姿を見せたらどうだ？」

マルクがそう告げると木の陰から誰かが姿を現したのであった。

第40話：世界を守ってきた者達

マーベラス「中々鋭いな、お前」

マルク「敵…じゃなさそうだな」

と、マーベラスは自分が持つレンジャーキーをマルクに見せた。

マルク「お前、鎧の仲間か？」

マーベラス「こんな所で無駄話している場合じゃないと思うがな」

マルク「…どういう意味だ」

マーベラス「ザンギヤックを甘く見ない方がいいって言うてるんだ…俺達も奴らを倒しはしたが…ザンギヤックは最後まで手強い奴だったぜ」

マルク「…忠告は受け取っておく…で、お前の名は…」

と、いつの間にかマーベラスはその場からいなくなっていた。

マルク「ディオの残していったホール…すぐに戻らないとな」

そして、マルクが仲間達の元に戻っていく頃…。

ジェレイド「…我等を…倒したと思っているようだが…まだ…終わらぬ…」

倒したと思っていたジェレイド。

しかし、その命はまだ微かにこの世界に留まっていた。

ジェレイド「奴等に倒された…同胞たちよ…力を…ここに…」

と、鎧達に倒されたワニーゴ・バーミード・ギガイラスの魂がジェレイドの元を集っていった。

ジェレイド「この世界ごと…お前達を壊してくれる」

と、突然巨大化していったジェレイド。

鎧「!？」

突然の大地の震えに驚く鎧。

ディオ「今の話ほんまなんか？」

ティアナ「まだ何かあるって言うの？」

スバル「みんな！外！」

スバルに言われて全員外に出ると、そこにはビルのように立つジェレイドの姿があった。

大樹「そう言えばこの世界の敵ってこんな風に巨大化するんだったね」

鎧「でも、それをやる奴がいはいはずなのに…」

スバル「とりあえず私が止めに行く」

セットアップしウイングロードで巨大化したジェレイドに向かっていくスバル。

鎧「ダメです！生身の身体で戦える相手じゃ…って、そうだすぐに豪獣ドリルを呼んで…」

ジェレイド「そうは…させんぞ！」

と、ジェレイドはやってくるスバルを軽く弾き飛ばすと鎧達に向けて衝撃波を放った。

マルク「くっ…」

そして、その衝撃を受けて鎧はゴークアイセラーを弾き飛ばされてしまった。

鎧「しまっ…」

ディオ「とりあえずこの場から離れるほうが…」

そう思いホールを開こうとするディオ。

だが、その時何処からか攻撃が飛んできてジェレイドを後退させていった。

鎧「今のは…」

そして、ジェレイドの前に降り立った巨大な口ボ。

大樹「…」

鎧「まさか…あれは…ゴーカイオー…でも、何で…」

ゴーカイレッド「最後の最後まで油断はするな…お前も海賊ならな」

鎧「マーベラス…さん…」

マルク「今の声…あの時の奴が…」

ジェレイド「海賊の仲間が戻ってきたか…だが、今更…」

ゴーカイレッド「悪いが…もう終わりだ」

と、上空からジェレイドに向けて攻撃を仕掛ける二つの力。

鎧「風雷丸と炎神マツハルコン…」

ジェレイド「こんな小物の力ごときに…」

ゴーカイレッド「ならお前ごときには初期の力で十分だ、行くぜ！」

そして、ゴーカイオーから放たれたゴーカイスターバーストの直撃を受けるジェレイド。

ジェレイド「グッ…力が…失われて…」

と、消滅するわけではなく元のサイズに戻っていったジェレイド。

すると、ゴークイオーから五人の戦士達がジェレイドの元に降り立った。

ジェレイド「ゴークイジャー…」

ゴークイレッド「大きくなったり小さくなったり忙しい奴だな」

鎧「みなさん…どうして…」

ゴークイブルー「マーベラスは気まぐれだからな…まあ、それより…」

ゴークイエロー「まずはこいつの始末でしょ」

ゴークイレッド「ゴークイガレオンバスターでいくぞ」

ジェレイド「!？」

【ライジングストライク！】

ジェレイド「ザンギヤックは…」

そして、ジェレイドはライジングストライクにより倒れるのであった。

鎧「ジョーさん…ルカさん、ドンさん、アイルムさん」

ジョー「相変わらずだな」

ルカ「まあ、それなりにこの世界を守ってるみたいだし」

アイム「それにしても後ろの方々は…」

マルク「お前…」

マーベラス「鎧、お前はお前の道を進め…元々は海賊じゃなくこの世界の住人なんだしな」

鎧「マーベラスさん…でも、俺にはこの世界を守る役目が…」

ハカセ「だからこそ僕達が戻ってきたわけだし」

マーベラス「次のスーパー戦隊が現れるまで俺達がこの世界を守ってやるよ…宇宙での宝さがしも一段落ついたしな」

大樹「中々面白そうな話だね…」

ジョー「俺達の宝を狙うつもりか？なら、覚悟してやった方がいい…」

マーベラス「まあ、俺達がここに残るにあたって…」

ハカセ「鎧にはまた追加戦士のレンジャーキーでやってもらうんだけど…」

アイム「専用のレンジャーキーボックスもお作りしましたから」

と、不思議な力を感じる小箱を鎧に渡すアイム。

鎧「アバレキラーやゴセイナイト…追加戦士のレンジャーキーが全
て…」

マーベラス「世界を越えてレンジャーキーが転送されるかわからな
いからな、それでも持っている」

鎧「…ありがとうございますマーベラスさん」

ティアナ「とりあえずこの世界は終了って事？」

スバル「最後は良い所なかったね…」

ルカ「にしても他の世界に行くホールね…」

鎧「スーパー戦隊としての役目が終わったら来てくださいよ、構わ
ないですよ」

そうマルクに聞く鎧。

マルク「好きにしろ…」

マーベラス「鎧の事はこき使ってやれ…うるさい奴だがいい仲間だ」

マルク「心配するな…仲間は大事だからな…じゃあ行くぞ」

一足先にホールに飛び込むマルク。

鎧「何かあれば戻ってきますから…ザンギヤックは倒しても新たな
敵が出てくるかもしれませんから」

アイム「その頃には…新たな戦士が誕生しているかもしれないですね」

そして、マーベラス達に見送られ仲間達はマルクの世界へと戻っていくのであった。

第41話：異世界の柱（前書き）

今回は魔法騎士レイアースの話なのですが、何分昔の作品であるため、多少設定が違ってたりしてるかもしれませんが。

また、原作とアニメでも多少違いがあるのでわかりにくい所があるとは思いますが

よろしくです

ではです

第41話：異世界の柱

前回の旅を終えたメンバー。

それでありながら今回はいきなりすでに異世界へとやってきていた。

鎧「いたって普通な世界ですね。俺達が住んでた世界と似ている」

美琴「シエルが言うにはこの世界から更に別の世界に行けるらしいけど…」

マルク「タイチ達の世界からデジタルワールドに行けるように…って事か…まあ、タイチが言うには条件さえ整えば俺達の世界からでもデジタルワールドにいけるらしいが…」

ディオ「そう言った不思議な世界やとウチの能力でも移動は出来へんしな」

マリアン「街中であまり立ち止まっておられますと通行人の邪魔になりますわよ、マルク様」

マルク「そうだな…この世界を調べるのにもまずは拠点を…」

？「何かお探ですか？」

と、突然誰かがマルク達に話しかけてきた。

美琴「貴方は…」

フウ「いきなり声をかけて申し訳ありません。私は鳳凰寺風と申します」
ホウオウジ・フウ

美琴（あの子から…何か感じる…）

鎧「すみません、初めてきたもので…」

マルク「で、他にいる二人は誰なんだ？」

フウ「!？」

マルクの言葉に驚くフウ。

美琴「つて、この感じなのがまだ二人いるの？」

フウ「…やはり普通の方々ではございませんでしたね」

マルク「お互い様だろ…ついでだ話をしたい」

フウ「わかりました。立ち話もあれですから…あの場所で…」

と、フウは赤く建つ東京タワーを示した。

そして、そこでフウの他にいた二人と対面するマルク達。

フウ「龍咲海さんリュウザキ・ウミと獅堂光さんシドウ・ヒカルです」

両隣りにいる二人を紹介するフウ。

そして、マルクも自身と仲間達の紹介をした。

ウミ「でも、それって勝手すぎない。自分達の為に仲間に加えるなんて」

美琴「相変わらず相手の方が正論なのよね…」

鎧「でも、俺は…ちゃんと自分の意思でここにいます…無理やりとかじゃ…」

マルク「美琴の場合は仕方なかったからな…今ではやり過ぎないようにしている」

そう告げるマルク。

ヒカル「手伝ってあげたいけど…少し無理かな…特に私は…」

美琴「そう言えば…近くで感じてみてだけど…ヒカルって子だけ何か違う力を…」

マルク「ならその理由を見せてほしいものだ…」

ヒカル「ウミちゃん、フウちゃん…」

ウミ「向こうに行くのも久しぶりだし…」

フウ「言葉で説明していても時間だけが過ぎてしまいますから…行きましょ…私達の運命を変えた場所へ」

そして、マルク達はヒカル達の案内で人気のない場所へやってきた。

フウ「他の方に見られる訳にはいきませんから」

と、ヒカルを中心に光が溢れ広がっていった。

マリアン「この光は…」

ヒカル「まぶしいから目を閉じててね…」

そして、一気に光がみんなを包み込んでいくとその場にいた全員の姿はそこからなくなっていたのだった。

マルク「これは…」

ディオ「ウチの能力も真つ青やな…」

ウミ「ヒカルはね…この世界の大切な柱だから」

フウ「と言いましても柱システム自体はヒカルさんの意思によって消滅させる事が出来ましたが…」

マルク「簡単にその話も聞いたが、ならこの世界に縛られる事もなくなっただろう？」

ウミ「それでもヒカルは…ううん、ヒカルと私達はこの世界セフィーロの平和を見守っていくって決めたんだから」

ヒカル「自分達の手で…失わせてしまった人の為にも…」

ディオ「これだけ強い意思やと難しいんとちゃうんか？」

そう呟くマルク。

マルク「そうだな……」

美琴「って、マルク！まさか私みたいに……」

ヒカル「えっ……」

と、マルクが動き出そうとしたその時何者かが上空からマルクに飛びかかってきた。

マルク「！？」

とつさに後退し距離を取るマルク。

マルク「散れ！」

マルクの叫びと共に、ディオはマリアンを連れホールでその場から離れた。

美琴「いきなりなにをするのよ！」

鎧「敵なら……相手になります」

????「気集拳……」

両腕に込められたオーラの力。

それを美琴と鎧に打ち付け、二人を弾き飛ばした。

フウ「あの方は…」

ヒカル「シャル！」

シャル「リーダーを倒せば鎮まるか？」

と、再びマルクを狙い駆け出すシャル。

マルク「変幻刀！槍！」

リーチのある武器で応戦するマルク。

シャル「気集腕脚陣」

と、シャルの手足にオーラが纏われ片手でマルクの攻撃をいなすと一気に懷まで潜りこんだ。

ディオ「マルクはやらせへんで！」

瞬時にホールよりシャルに飛びかかるディオ。

しかし、強化されたシャルの蹴りを受け上空へと高く放り上げられた。

マリアン「ディオ君！」

シャル「気集砲」

右腕に集まっていくオーラ。

マルク「くっ…ホールで逃げる！デイト！」

だが、それより早く放たれたシャルの一撃。

しかしそれは、斜め方向より放たれた超電磁砲によってかき消された。

美琴「いきなり襲ってきて…これ以上やらせないわよ」

ゴークァイルバー「こちらにも本気でいきます！」

戦闘モードに入った美琴と鎧。

リンク「シャル…もういいよ…というかやり過ぎだ」

マルク「おかしいとは思ったが…お前が絡んでるのかよ…リンク！」

フウ「リンクさん…いつからセフィーロに…」

リンク「ヒカルが僅かに通り道を残してしてくれたからね…と…どうだったかな次期リーダーとなる彼の戦いは」

マルク「お前のあとを継ぐ奴だと…この少年が…」

リンク「強さは今やった通りだ。だがシャルの凄さは強さよりも他人の技を自分流にして扱う技術力だ」

美琴「どういう事よ…」

ヒカル「シャルは自分のオーラを上手く利用して、色んな技を使え

るから」

マルク「リンク、こいつらは元々お前の・・・」

リンク「ああ、かつてはな。今は自分達の世界のために戻っているが・・・今回私達が来たのはそう言う事だ」

マルク「・・・少し気に入らない事もあるが・・・帰るぞ!」

突然そう告げたマルク。

鎧「帰っちゃうんですか?」

マルク「粘ったところで仲間に来るそうにないし・・・その少年が仲間のために邪魔するだろうしな」

リンク「今日は素直だな」

マルク「お前の縄張りを荒らすこともないし・・・いつか越えるけどな」

シャル「解決したならもう帰るのか?」

リンク「すまないなヒカル。平和になったセフィーロに押し掛けて」

ヒカル「大丈夫だよ。でも折角だしみんなに会っていかない?」

リンク「この世界を平和に導いたのはヒカル達だ。私は少し手助けをしたにすぎないよ」

そう言い笑顔を見せるリンク。

ディオ「ウチは戦闘タイプやないんやけどな・・・マルクにまた手出すんやったら・・・」

マルク「俺がまだ弱いからだ・・・だから今日は引くぞ」

ディオ「了解や」

そう言つてホールを開くディオ。

リンク「セフィーロから直接帰れるのか？」

マルク「ディオの能力を甘くみるなよ」

リンク「そうだね・・・と、機会があれば私の国に遊びに来るといいよ。タイチと茜も連れてきて、茜のお姉さんもこっちにいるからね」

マルク「気が向いたらな」

リンクの言葉に対してそう返すマルク。

ヒカル「なんかごめんなさい・・・力になれなくて」

マルク「お前が謝る必要ないだろ・・・俺もリンクと同じ・・・だからな」

そして、異世界の旅をして来て初めて仲間を増やせず帰っていったマルク達。

シャル「あの人は悪い人じゃなかったのに戦う必要あったのか？」

リンク「・・・彼らは若い。シャルと同じように・・・色々な経験が彼らを強くする。かつての私みたいだね・・・まあ、ヒカル達のためについていうのもあるけどな」

きえゆくホールを見ながら、そう告げるリンク。

だが、この時まだ誰も知らずにいた。

ある一つの世界が危機に瀕していることに・・・。

第42話：失われた世界の希望

いつもと変わらないはずの日常。

前回の世界では仲間を増やすには至らなかったが、それでも次に向けてマルク達は動き出そうとしていた。

しかし・・・シエルが見つけた情報から事態は動き出していく。

リュウキ「どういう事だ？」

シエル「さあな。ただ、この世界からは・・・今までとは違う何かを感じている」

マルク「ここで話し合いしてもこれ以上の情報はない。メンバー選出してすぐにでも向かうぞ」

そう決定させたマルク。

そして、マルクが選んだメンバーは・・・。

ディオ「美琴にさくらに・・・」

鎧「俺とスバルさんですね」

ティアナ「スバルが行くなら私も行きたいんだけど・・・」

と、ティアナは大樹を見た。

大樹「お互いに強くなりたいなら、良い相手だからね。お宝を手に入れるにも力は必要だ」

スバル「任せてティア。ティアの分まで頑張るから」

マルク「後はリュウキ、頼む」

リュウキ「はっ！」

そしてマルク達は足早に、異世界に向かっていくのであった。

ディオ「到着やく……って……どないなつとるんや」

辿り着いた異世界の光景を見たディオは思わずそう告げていた。

世界全体の空は雲に覆われ、辺りの自然や建物は壊れた痕があった。

美琴「……大地も削られてて……」

マルク「リュウキ……」

リュウキ「気を抜かないよう……何者かが……」

と、その時空から何かが落下してきた。

鎧「って……キャッチ!!」

何とか上手くそれを受け止めた鎧。

さくら「ネコさん？」

ふとそう思ったさくら。

ハミィ「にやつ！？敵に捕まってしまったのかにゃ！？」

美琴「私達は今この世界に来たばかりよ。って、喋るネコって」

スバル「何か持ってるのって女の子の人形？」

ハミィ「敵以外はもうこの世界にいないと思っていたにゃ・・・」

マルク「違うな・・・」

リュウキ「感じた気配はそのネコではなく・・・」

ハミィ「ネコじゃなくハミィだにゃ・・・って、今はそれどころじゃ・・・」

と、突然辺りに撃ち込まれたエネルギー弾。

マルク「ディオ！話がある」

マルクから作戦を受けたディオは、敵と接触する前にホールで何処かへと向かった。

そして、マルク達の前に降り立った青年のような人物。

リュート「まずははじめましてかな。僕はリュート」

マルク「お前・・・」

ハミィ「あれにゃ！あれが響や奏や・・・みんなを人形に変えたんだにゃ！」

美琴「人形につて・・・」

さくら「あの時持ってた人形・・・」

リユート「成る程、一つ足りないと思ったら君が持っていたのかい」

鎧「詳しい事情は知りませんが、何かしたのなら戻すのが・・・」

リユート「構いませんよ。それは差し上げます。よろしければ元に戻す方法も教えましょうか？」

あせる様子もなく、ただ話し続けるリユート。

ハミィ「にゃぶ・・・」

美琴「あんた何のつもりでこんな事・・・」

リユート「それは秘密です。まあ、お望みなら君達も人形の世界にご招待・・・」

と、マルク達に向けて放たれた虹色のエネルギー球。

だが、その瞬間

ウォーグレイモン「ドラモンキラー!!」

その鋭い爪でエネルギー球を貫き消滅させた。

リユート「へえ……」

タイチ「マルク！」

マルク「ナイスタイミングだな」

ティアナ「スバル、無事？」

大樹「さて……」

リユート「勢揃いなようですね……」

マルク「やるなら相手になるぜ」

リユート「……」

ハミィ「ダメにや！あんまり挑発したら人形にされたみんなが……」

リユート「僕は穏やかだから……道を作ってあげるよ」

と、リユートが力を放つと宙にホールが出現した。

マルク「デイオと同じ能力！？」

リユート「この先の世界にある【人魚の涙】と呼ばれる石がある。それを使えば君が持つ人形は元に戻るよ」

そう説明していくリユート。

リユウキ「いかがなさいますか？話の流れでは奴がこの世界の崩壊を招いたようですが・・・」

リユート「・・・じゃあ僕も付き添うよ・・・それを許可してくれ
たらある程度の事を教えてあげるよ」

ハミィ「気を付けるにゃ！絶対何か企んで・・・」

マルク「わかった。承諾してやるよ」

ハミィ「にゃ！？」

マルクの言葉に驚くハミィ。

美琴「何してくるかわかんないけど・・・」

ティアナ「って、私達が加入した意味ってあるわけ？」

大樹「・・・それだけ危機を感じたのか・・・」

マルク「よし、行くぞ」

リユート「じゃあ、向こうで待っているよ」

一足先にホールに飛び込んだリユート。

リユウキ「マルク様・・・」

マルク「心配するな・・・仲間は守るからよ」

そしてマルク達も、意を決してホールに飛び込んでいったのだった。

第43話：リユートの謎

マルク「何となく想像してたがな・・・」

新たにやって来た世界・・・。

そこもまた人の気配のない場所へと変わっていた。

リユート「・・・」

さくら「あつちに何か見えます」

そう告げたさくら。

辺りを見ながらその場所へ歩いていく一行。

スバル「これって・・・人が・・・石に・・・」

と、いきなり鎧がリユートに掴みかかった。

ハミィ「にゃにゃ!？」

鎧「全部お前の仕業なのか!」

リユート「心配しなくてもお話しますよ」

そう言われ鎧はリユートから手を離れた。

大樹「!」

ティアナ「どうしたの？」

大樹「人の気配がする。どうやら生き延びている人が・・・」

リユート「ならおそらく・・・」

リユートがやって来たのはとある建物の前。

さくら「あそこ！」

何人かの石と化した人達に囲まれている形で、一人の女の子がうずくまっていた。

スバル「君・・・大丈夫？」

優しく声をかけるスバル。

??「あっ・・・」

スバル達の姿をみて、少し身構える女の子。

美琴「状況から見て、回りの人達はこの子を守ろうとしてたみたいね」

リユート「さすがは噂に聞くマーメイドプリンセスだね」

??「!?!」

と、女の子はリユートの姿を見ると睨み付けた。

??「貴方達が・・・るちあ達を・・・」

リユート「誤解しないでほしいな。この世界で僕はなにもしてないよ」

鎧「だけどこの世界で起きた事は知ってるんだろ！」

リユート「二つの世界を襲った人物は別だよ。ちなみに石化を戻すには術者を倒すしかないけど・・・」

大樹「なら、その人物の情報を教えてもらわないとね・・・」

ディエンドライバーをリユートに向ける大樹。

リユート「それは出来ないな。僕も主との契約でやらせてもらっているからね」

マルク「どうせこの世界にはいないんだろ。そいつが話さないなら、お前から聞くしかないんだが・・・」

そう言いながら女の子の方を見るマルク。

スバル「怖かったよね・・・でも大丈夫だから」

そう言って女の子を抱き締めるスバル。

星羅「・・・星羅・・・です」

と、スバルにそう呟いた星羅と言う女の子。

ティアナ「スバルはこう言うのは得意なんだから・・・」

そしてマルク達は、星羅からここで起きた事を簡単に説明してもらった。

星羅は仲間が目の前で石となり、精神的にかなりダメージを受けていた。

ハミィ「そうにや。聞きたい事があるにや。人魚の泣って石知らないかにや？」

星羅にそう尋ねるハミィ。

星羅「それなら…ちあが石になる前に私に託した…」

ずっと握りしめていた手の中にある、一粒の雫の形をした透明度の高い石。

リユート「そのちあつて子…それを託すことで彼女を石化から守った…」

ティアナ「この世界を襲ったフードの男…貴方に詳細を聞いても教えてはくれないでしょうけど…名前ぐらいはいいんじゃないの？」

リユート「そうですね…そのフードの男の名前はゲイズ…ゲイズ・ハーリー。魔術師のような人ですよ」

鎧「倒せば元に戻るってことはこの人達はまだ生きてる…出来る限り急いでそのゲイズって人を探さない」と

そう告げる鎧。

ハミィ「その前に人形を元に戻すにゃ！」

少し慌てながらそう言うハミィ。

マルク「そうだな・・・」

スバル「人魚の涙、いいかな？」

星羅「私はこれに助けられたんでしょ・・・またこれで誰かを助けられるなら・・・」

と、星羅はスバルに人魚の涙を手渡した。

リユート「人魚の涙を人形に触れさせればいいよ」

スバル「こうかな・・・」

ハミィの持つ人形に、人魚の涙に触れさせるスバル。

すると突然輝き出す人魚の涙。

そしてその輝きは、そのまま人形の中へと吸い込まれていった。

ハミィ「にゃぷ！」

人形はハミィの手から離れ宙に浮いた。

そして、マルク達の前に一人の女の子が姿を現したのだった。

なぎさ「ここって・・・」

ハミィ「キュアブラックこと美墨なぎさにゃ」

なぎさ「君って確か・・・ハミィ・・・!？」

と、リユートの姿を見るや否や構えるなぎさ。

リユート「久しぶりだね。といっても君からしたらほんの少し前だろうけどね」

なぎさ「ほのか達は・・・まだ・・・」

星羅「あつ、人魚の涙が・・・」

と、輝き終えた人魚の涙はその場で砕け散ってしまった。

スバル「この子の大切な・・・」

星羅「・・・いいの。誰かのために使えたのなら・・・」

そう言ってようやく笑顔を見せた星羅。

リユート「マルクって呼ばれてたね・・・これを君達の技術者に渡すといい」

と、マルクにディスクのようなものを投げ渡すリユート。

マルク「何だこれは」

リユート「彼女達を助けるヒントだよ・・・それとついでに・・・」

と、懷から人形を一つ取り出すとこれもまたマルクに投げ渡した。

ハミィ「にゃ・・・それはキュアミントの人形にゃ」

美琴「一体どういふつもりよ。私達が得するようなこと・・・」

リユート「さすがにそこまでは話せません。まあ、機会があれば・・・ということにしておいてください。では、後はお任せしますよ」

そう言うリユートはホールを開き、何処かへと消えてしまったのだった。

さくら「で・・・どうしますか？」

ハミィ「人形を一つ取り戻せたけど・・・」

マルク「・・・で、お前達はどうするんだ？」

マルクは星羅となぎさに向けてそう告げた。

スバル「そうだね・・・二人とも・・・」

なぎさ「力を取り戻せたら仲間を助けられたりするんだけど・・・」

大樹「リーダーはどうするんだい？」

マルク「自分達の仲間や世界を取り戻すまで俺の世界に来い。リート
の奴は謎が多いが、まずはこのディスクを調べたいしな」

星羅「私も役に立てないかもしれないけど、るちあ達を救うために
何かやりたい」

美琴「いつもと違って人助けで仲間が増えたわね」

ディオ「大人数やけど・・・」

そう言いながらホールを開くディオ。

マルク（色々面倒な事が起こり始めているな・・・）

そんなことを思いながら、マルクは仲間達と共に自分の世界へと戻
っていくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9772i/>

新生夢世界の集い

2011年11月20日12時49分発行